第 17 巻
SEIJU
成・寿
1991
秋
秀子
横浜 善光寺

拝啓 暑かった夏も過ぎ、さわやかな秋が
駐留でやって参ります 皆様 益々ご健勝の
ことと拝察いたします
東京寺第七期 お使いいただいます
今番三百来 タイに派遣された 二人の留学生の
得度式がワット・パクナムでおこなわれました
さいわい子供たちも休暇中でしたので 三年前
当寺で沙弥の得度式を挙げていただいた
ご礼言上のためにと連れてゆきました
たいへん喜ばれワット・パクナムとの一層の
親善友好に寄与し得たものと思います
何卒御面倒を通じてお願い申しあげ
幸甚です まずは中間報告まで 合掌

平成三年九月一日

善光寺信徒 墨田大圓
（武志）

各位

ささやかなる
たのしみを棄てて
若し
大きなる
たのしみを得んとせば
かしこき人は
彼岸の大楽をのぞみて
小さきたのしみを
すてさるべし

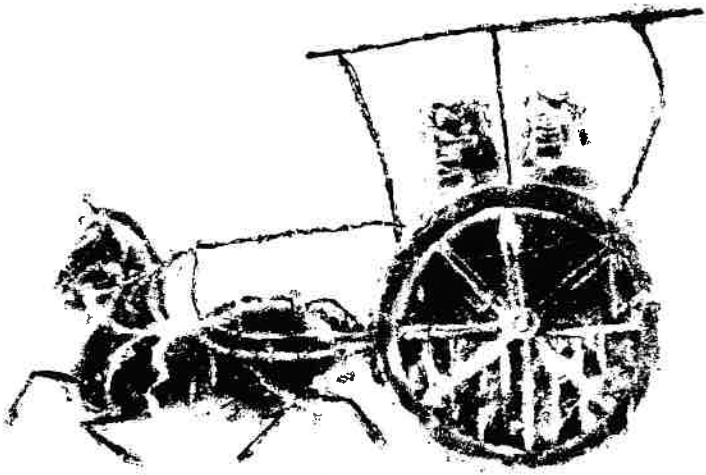
〈法句経〉

第 17 巻

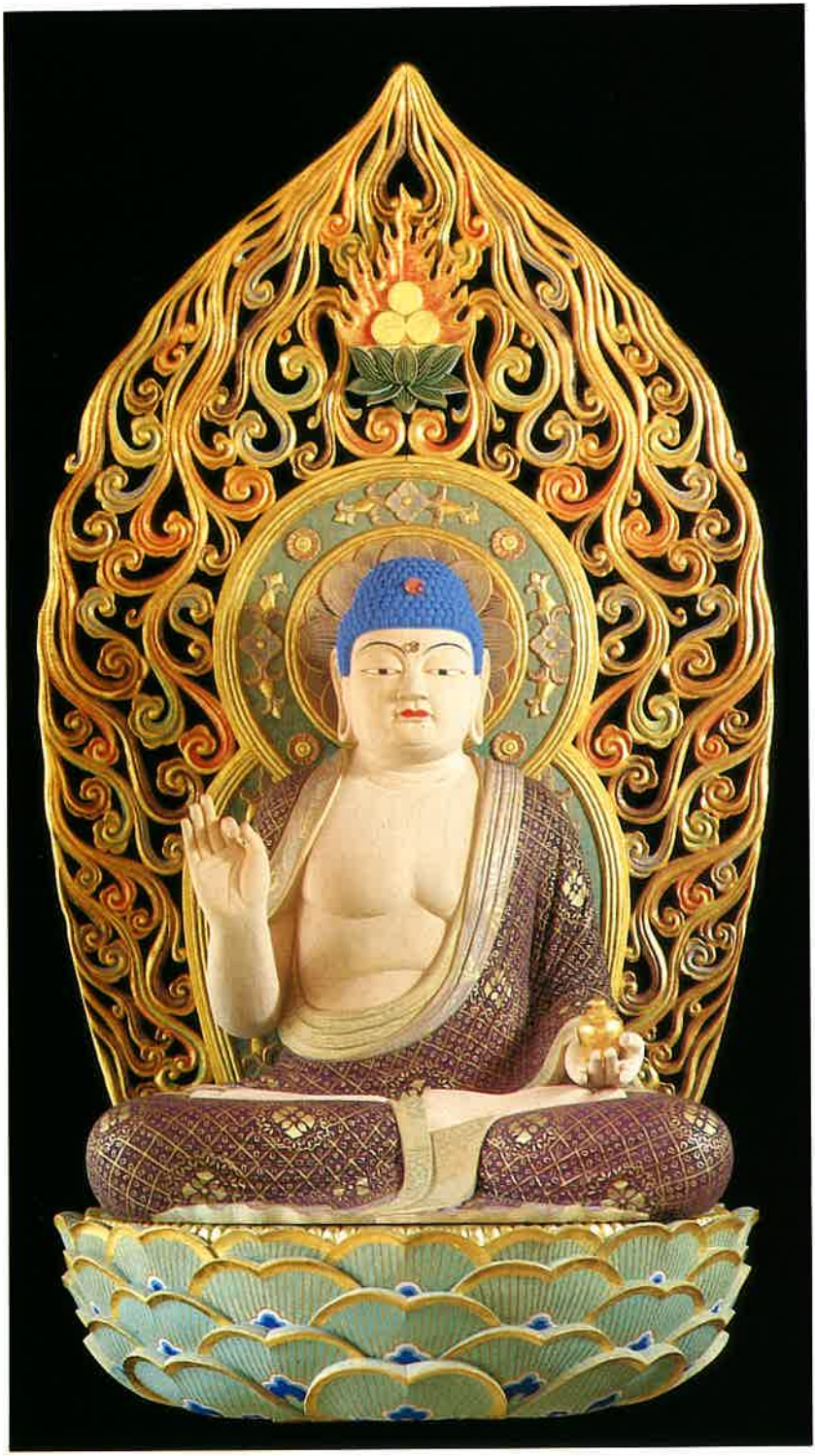
成寿

SEIJU

1991 秋 季号



阿弥陀如来尊像



薬師瑠璃光如来尊像

二仏像成り御堂に坐す

善光寺不動殿に阿弥陀如来と薬師瑠璃光如来の二尊像が造顕され５月28日開眼供養を厳修。大勢の檀信徒の皆様が参集して盛儀を祝した。

開眼師・佐藤俊明老師

開眼香語

発心貫徹不尋常
　発心の貫徹尋常ならず
二仏像成坐御堂
　二仏像成り御堂に坐す
仏徳荘厳開法運
　仏徳を荘厳して法運を開く
人天歓喜仰慈光
　人天歓喜して慈光を仰ぐ

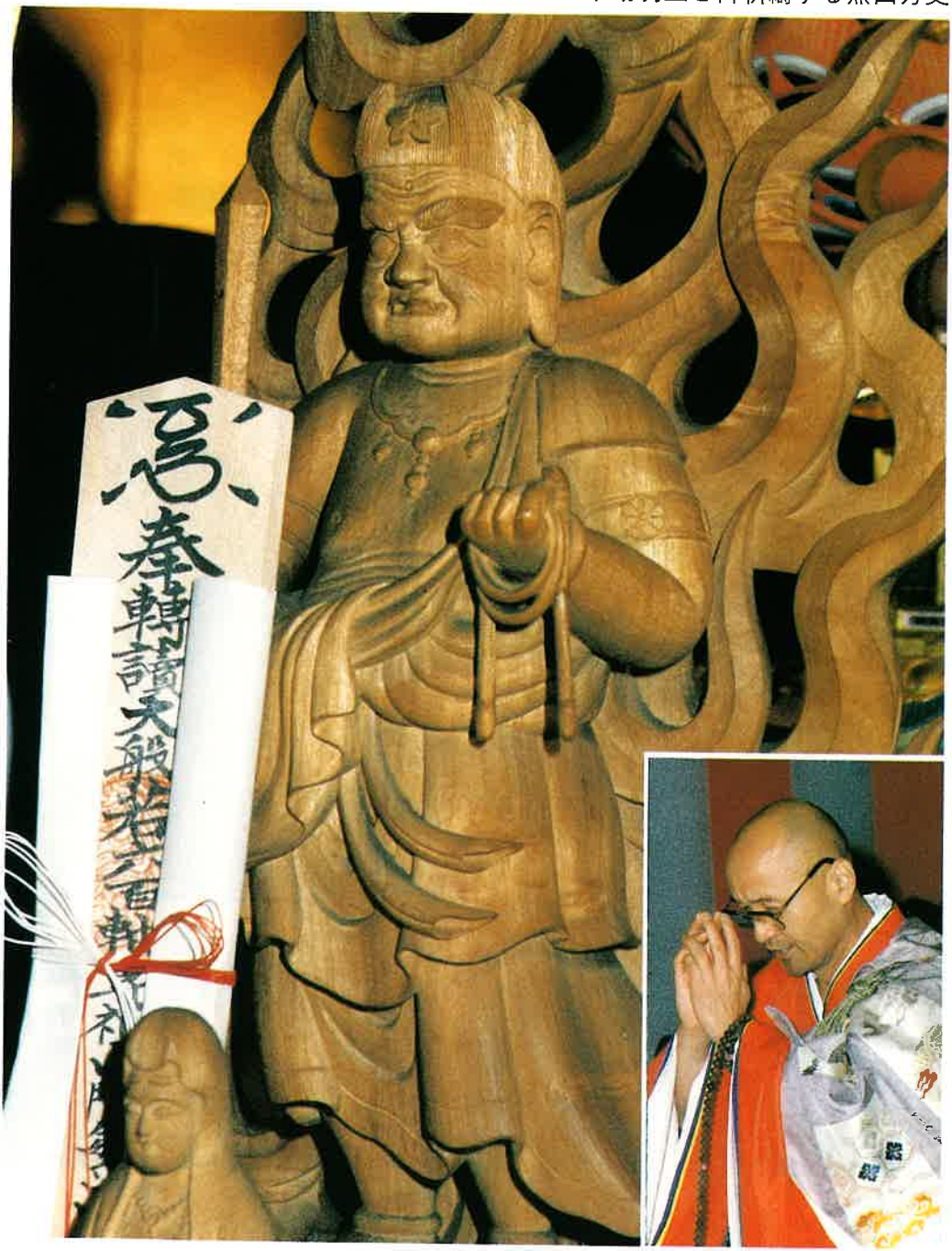
薬師瑠璃光如来発願文

▶薬師瑠璃光如来尊像の胎内に納められた発願文

◀不動殿に祀られた三尊像を背に挨拶する黒田方丈

▼造顕の銘
阿弥陀如来尊像胎内

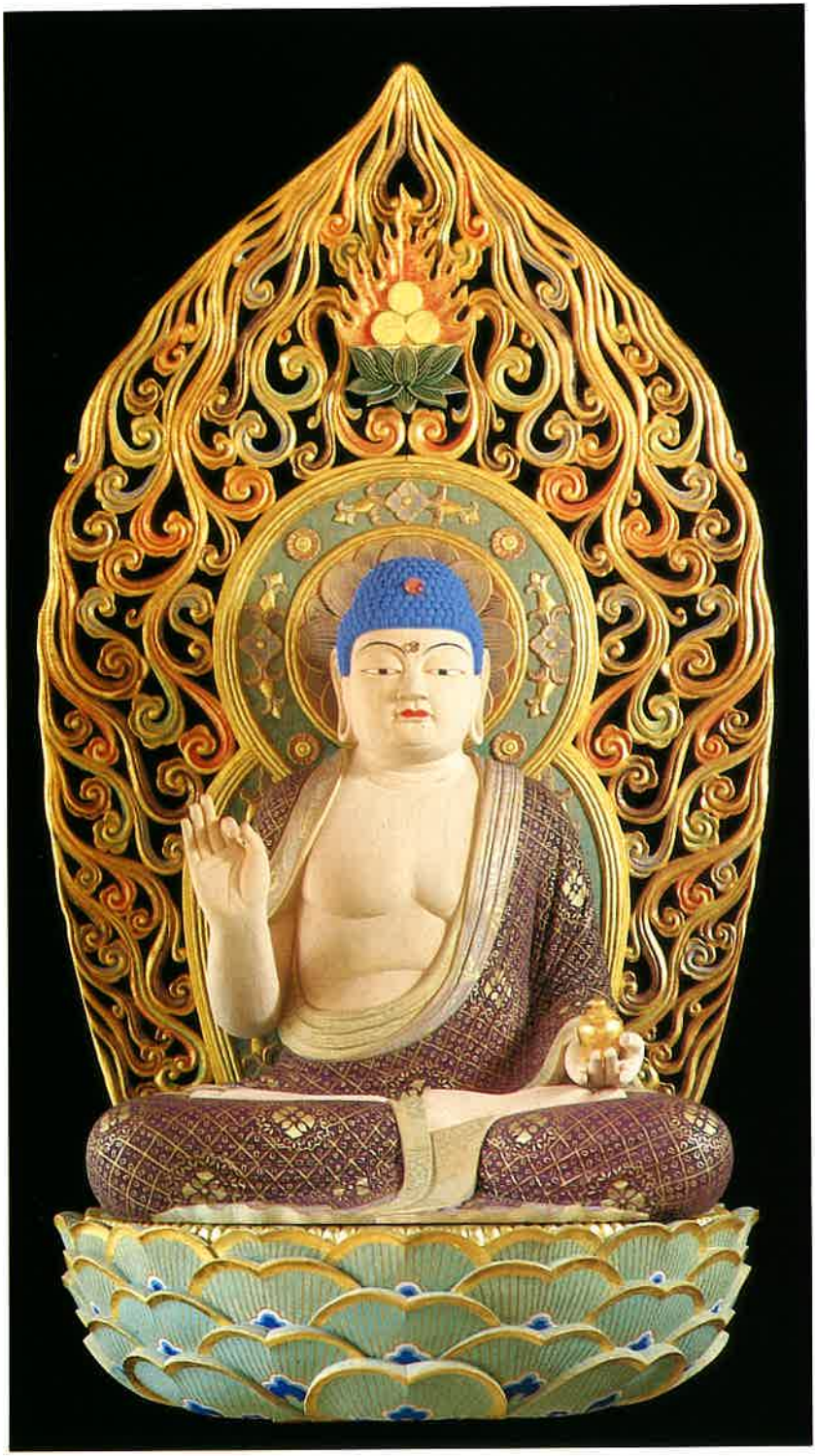
不動明王と御祈禱する黒田方丈



▲ 仏師・錦戸新観師

▼檀信徒の皆様

阿弥陀如来尊像



薬師瑠璃光如来尊像

二仏像成り御堂に坐す

善光寺不動殿に阿弥陀如来と薬師瑠璃光如来の二尊像が造顕され５月28日開眼供養を厳修。大勢の檀信徒の皆様が参集して盛儀を祝した。

開眼師・佐藤俊明老師

開眼香語

発心貫徹不尋常
　発心の貫徹尋常ならず
二仏像成坐御堂
　二仏像成り御堂に坐す
仏徳荘厳開法運
　仏徳を荘厳して法運を開く
人天歓喜仰慈光
　人天歓喜して慈光を仰ぐ

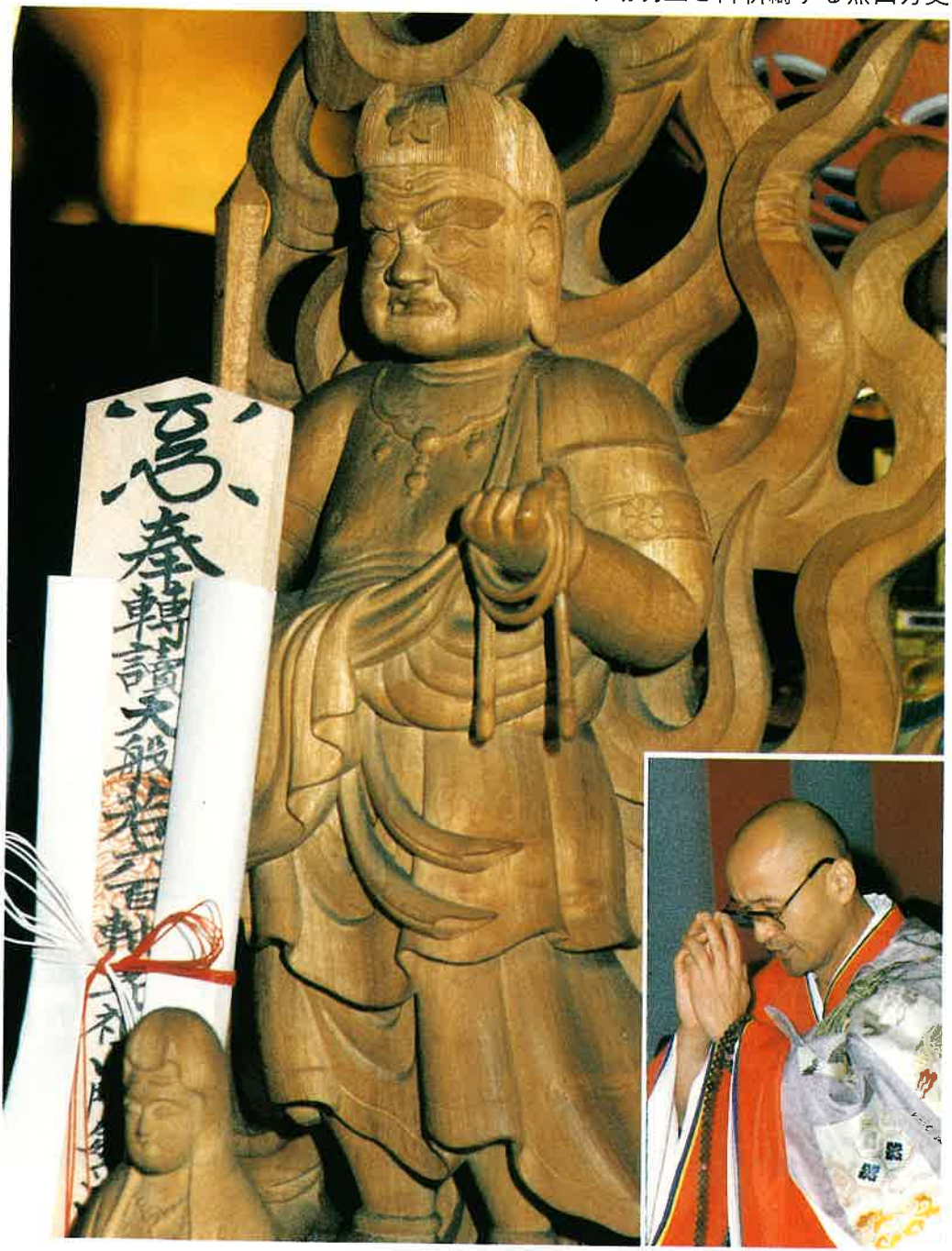
薬師瑠璃光如来発願文

▶薬師瑠璃光如来尊像の胎内に納められた発願文

◀不動殿に祀られた三尊像を背に挨拶する黒田方丈

▼造顕の銘
阿弥陀如来尊像胎内

不動明王と御祈禱する黒田方丈



▲ 仏師・錦戸新観師

▼檀信徒の皆様

開山・楳庵白純大和尚　十三回忌法要

二月五日、開山・楳庵白純大和尚の十三回忌法要が吉祥寺（東京都文京区）住職・岩本昭典老師を大導師にお迎えして執り行われました。（釈迦殿）

開山楳庵白純大和尚頂相（ちんぞう）

成寿山善光寺開山楳庵白純大和尚十三回忌報恩供養法要香語

辱交ノ歳月転無量ナリ　辱交の歳月はうたた無量なり

十有三年ハ如レ夢ノ亡ス　十有三年は夢の如くに亡ずる

留得タリ開創千古ノ基　留め得たり開創千古の基

善光寺畔ニ看ニ成祥ヲ一　善光寺畔に成祥をみる

恭しく惟みれば、成寿山善光禅寺、此の日、平成三年佛紀滅二千五百五拾七年二月五日の時、当寺開山楳庵白純大和尚十三回忌之忌辰に相い値う。即ち善光の蘭若裡を厳飾し、香華灯燭菓茶湯飲食等を兼備し、遠近諸山の老貴宿を屈請し、以って供養を展ぶ。集むる所の殊勲は、品位を増崇し奉る。想うに、当寺開山白純大鉄翁は、辱知道交幾多年の因みに、遺風烈々として感新らたなるもの有り。特地に、現住大円武志方丈積年の法愛を享受するあり。ここに迂衲をして、栴檀吉祥の浄香一片を拈ぜしむ。更に本辰を卜して、善光寺海外留学僧派遣育英会育英生任命式をあげ、佛道探求の為に、育英を修設し、報恩謝徳の道心に住して、慇懃裡に、開山十三回忌酬恩の佛事を勤修す。

即今、想いは起す十三年前の事、想ば到る十三年後の事、白雲流水共に依々として、思いありて感窮るものあり。正与麽の時、老大和尚耒儀にやぶさかならざる底、如何が情量を絶せん。

喚

只だ見る満城春雪の後
東風は吹き送る古梅（楳）香

慈悲容納

平成三年二月五日　焼香比丘

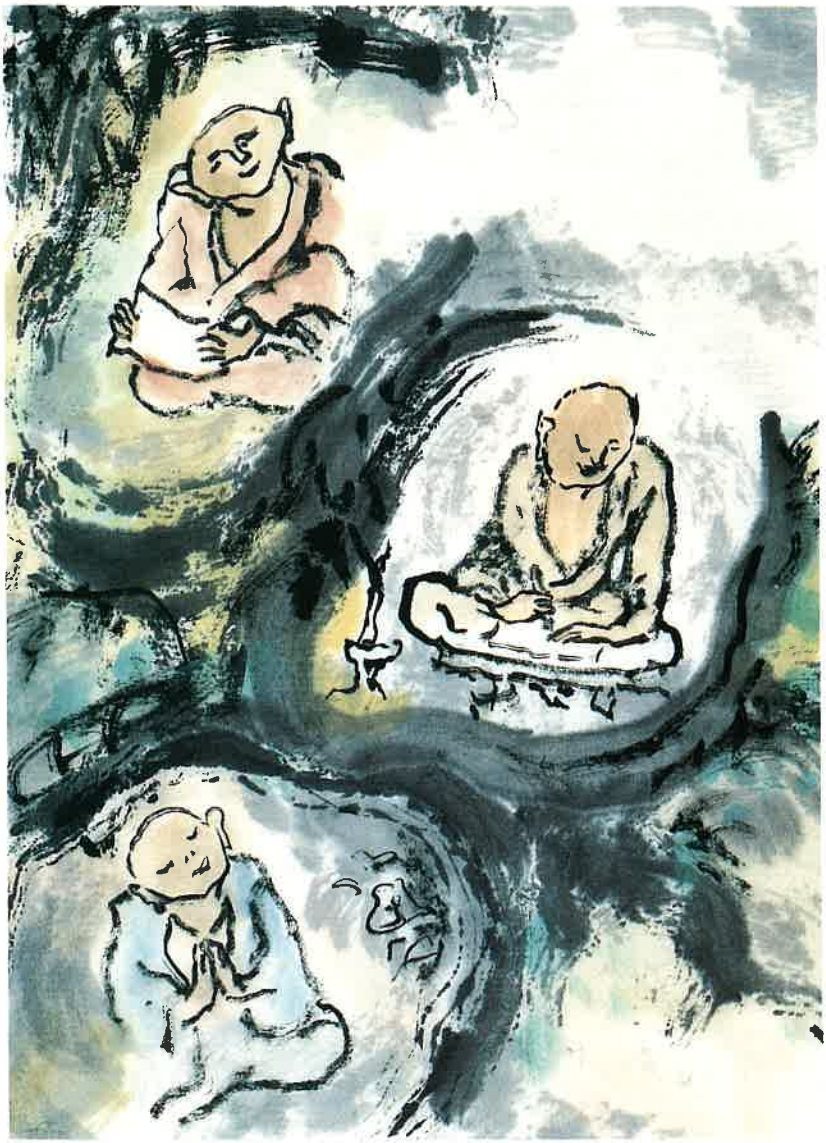
吉祥寺文海昭典拝草

▲大導師・岩本昭典老師

▼第７回海外留学僧辞令伝達式に出席された皆様

▲焼香する参会の皆様

▼開山ゆかりの皆様と黒田方丈



開山・楳庵白純大和尚　十三回忌法要

二月五日、開山・楳庵白純大和尚の十三回忌法要が吉祥寺（東京都文京区）住職・岩本昭典老師を大導師にお迎えして執り行われました。（釈迦殿）

開山楳庵白純大和尚頂相（ちんぞう）

成寿山善光寺開山楳庵白純大和尚十三回忌報恩供養法要香語

辱交ノ歳月転無量ナリ　辱交の歳月はうたた無量なり

十有三年ハ如レ夢ノ亡ス　十有三年は夢の如くに亡ずる

留得タリ開創千古ノ基　留め得たり開創千古の基

善光寺畔ニ看ニ成祥ヲ一　善光寺畔に成祥をみる

恭しく惟みれば、成寿山善光禅寺、此の日、平成三年佛紀滅二千五百五拾七年二月五日の時、当寺開山楳庵白純大和尚十三回忌之忌辰に相い値う。即ち善光の蘭若裡を厳飾し、香華灯燭菓茶湯飲食等を兼備し、遠近諸山の老貴宿を屈請し、以って供養を展ぶ。集むる所の殊勲は、品位を増崇し奉る。想うに、当寺開山白純大鉄翁は、辱知道交幾多年の因みに、遺風烈々として感新らたなるもの有り。特地に、現住大円武志方丈積年の法愛を享受するあり。ここに迂衲をして、栴檀吉祥の浄香一片を拈ぜしむ。更に本辰を卜して、善光寺海外留学僧派遣育英会育英生任命式をあげ、佛道探求の為に、育英を修設し、報恩謝徳の道心に住して、慇懃裡に、開山十三回忌酬恩の佛事を勤修す。

即今、想いは起す十三年前の事、想ば到る十三年後の事、白雲流水共に依々として、思いありて感窮るものあり。正与麽の時、老大和尚耒儀にやぶさかならざる底、如何が情量を絶せん。

喚

只だ見る満城春雪の後
東風は吹き送る古梅（楳）香

慈悲容納

平成三年二月五日　焼香比丘

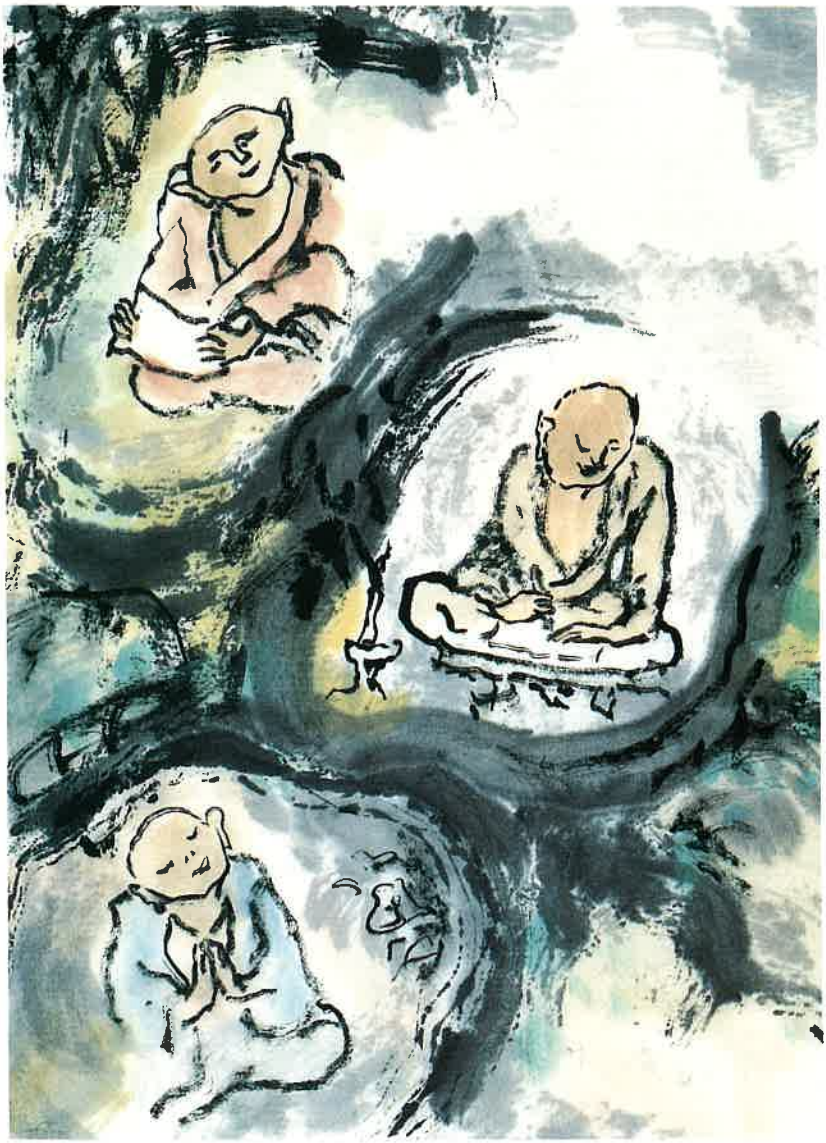
吉祥寺文海昭典拝草

▲大導師・岩本昭典老師

▼第７回海外留学僧辞令伝達式に出席された皆様

▲焼香する参会の皆様

▼開山ゆかりの皆様と黒田方丈



カラー■『二仏像成り御堂に坐す』『開山・楳庵白純大和尚十三回忌法要』
巻頭言●無相の福田衣……黒田　武志　18
特集●二仏像成り御堂に坐す……22
●二人の留学僧の得度式……佐藤　俊明　37
●開山十三回忌を厳修・育英生辞令伝達式……64
●白純大和尚さま――思い出を語る――……東郷　敏　68
連載●くらしの中で読む『正法眼蔵』……小倉　玄照　71
講演●激動する世界の旅……伊藤　博　78
留学記●日常の日々(2)……島　岩　89
●祈りと改宗……保坂　俊司　95
エッセイ●ヨーロッパを訪ねて……浅井　宣亮　98
●インドの学校事情……高橋　堯英　103
●聖地巡礼――リシケーシ……清水　晶子　106
●神話のいきづくヤムナー河畔（その一）……及川　弘美　110
●イスラームの国……太田　好信　113
●剃髪体験をして……井上　葉智　117
詩論文●第七回育英生入選論文……121
早川　敦、落合　隆、品田裕淳、水野克彦、曹　良淑、李　焌秀
善光寺だより……146
読者からのお便り……151

題字・さし絵　伊藤三喜庵
グラビア　駒澤　晃・五十嵐千彦
カット　『飛騨の民具』『敦煌装飾図案』より

無相の福田衣

今年は当寺開山楳庵日純大和尚の十三回忌にあたりますので、二月五日、生前親交のあった東京駒込の吉祥寺岩本昭典大方丈を導師に拝請して報恩法要を厳修し、引続き第七回海外派遣留学僧に辞令交付をおこないました。その中の一人が私の弟子となっての渡タイでしたので、三月三十一日の得度式に参列してきました。

次に不動殿本尊大日如来の脇侍仏として薬師如来・阿弥陀如来の尊像を造顕し、五月二十八日、身代り不動明王大祭の吉辰を卜して入仏開眼の法要をとりおこないました。これはもって檀信徒各位の「現世安穏　後生善処」を祈願し、寺門益々の発展興隆に資せんとするものであります。

次に、韓国の三大寺院といえば、仏宝の通度寺、法宝の海印寺、僧宝の松広寺ですが、中で通度寺は唐より奉持された仏舎利を奉安する名刹で、今年、各国より袈裟を集め、これを一堂に展示し、ひろく拝観に供する催おしを開いており、日本曹洞宗の袈裟を寄贈してほしいとの要請

を受けました。

袈裟は、過去の諸仏もこれを身につけて修行し、悟りを開かれたものであり、戯れに袈裟を着けて踊った遊女が、後に出家得度の機縁となった故事もあり、これを身に着けて修行にはげむことが解脱への道であるところから「解脱服」といわれ、また、如来の衣であるから衆生に恩恵を与える「福田衣」であるともいわれ、昔は袈裟を型取って都が建設されたほどでありますので、袈裟の功徳によって世界平和の具現をと念願し、その要請に応じ、過般佐藤老師、東先生とともに訪韓し、「大哉解脱服　無相福田衣　披奉如来教　広度諸衆生」（大なる哉、解脱の服、無相の福田衣。如来の教えを披奉して、広くもろもろの衆生を度せん）とお唱えし奉呈して参りました。これが日韓仏教の親善友好の一助となれば望外のよろこびであります。

平和への道づくり

赤間　義徳

ワット・パクナムの本堂で
善光寺派遣海外留学僧の
得度式が　厳かにおこなわれていた。
参列した
黒田方丈様は
同じ本堂で　得度式を挙げた
若き日の自分が　よみがえるのを感じた。
〝仏第子の初心にかえり
宗派、国籍、大乗、小乗をこえて
釈尊正伝の仏法を世界に弘めよう〟

大誓願達成のため
あるものは　ひとつ
燃えさかる求道心！
二十数年　ひたむきに精進して
世界九か国へ派遣した人材
善光寺・留学僧は　三十五名を数える。
不殺生を第一とする
仏法宣布の大事業は
人類の平和の道に通じている。
われら檀信徒も
方丈様に　従い申し上げ
仏第子の初心にかえり
世界平和へ通じる道づくりのために
毎食のひと口を　喜びの心で献じよう。

二仏像成り御堂に坐す

はじめに

本日はようこそご参詣くださいました。

身代り不動明王さま大祭の吉辰を卜して、阿弥陀如来と薬師如来の開眼供養がおこなわれましたこと、慶賀至極に存じます。

一昨年二月、本尊大日如来さまの開眼法要がおこなわれ、その時も今日と同じように、私が開眼師をつとめさせていただきました。

皆様、さきほどごらんなられましたように、「拈香法語（ねんこうほうご）」と申しまして、長い線香を拈じて法語を唱えました。その法語は『成寿』の第十二号に載っておりますが、今日の話と関連がありますので、前の部分をかみくだいて申し上げます。おおよそ次のようなことを申し上げたのであります。

方丈さまは、二十年前、この寺をお開きになり、身代り不動明王さまをお祀りになられ、一心に山門の興隆を祈願されました。すると日に日に法運が開け、わずか二十年で、檀家数は横浜随一となり、さらには、他の寺々では到底考えも及ばない、海外に留学僧を派遣して人材を育成するという、まことに破天荒の大事業を推

進し、横浜に善光寺あり、と知らない人がないほど知名度の高い寺院になりました。

「善光寺さん、すごいですねえ」

と、会う人はみなそう申されますが、方丈さまは決して自らの功を誇らず、

「それはお不動さまのおかげです」

と、合掌してこたえるのが常でありました。

そして、なんとかしてお不動さまにご恩返しをしなくてはと、前々から考えておられたことを私はよく知っておりました。

不動三尊の造顕

果せる哉、昭和六十二年、ここにお見えの錦戸新観先生を煩わし、まことにりっぱな矜羯羅童子・制吒迦童子を造顕、勧請し、まず以ってお不動さまにご恩報謝の一端を披瀝されました。

お不動さまは、八大童子、三十六童子といった眷属、つまり部下を従えておられます。

聖無動の眷属、三十六童子、各千万童を領す。本誓悲願の故に、千万億の悪鬼、行人を嬈乱せん時、此の童子の名を誦すれば、皆悉く退散し去る。若し苦厄の難あらん、咀呪病患の者は、当に童子の號を呼ぶべし、須臾にして吉祥を得ん。恭敬礼拝する者の左右を離れず、影の形に随うが如く護り、長壽の益を獲得せしむ。

と、経文にありますように、お不動さまの眷属三十六童子はそれぞれ千万人の童子を手足のごとく使い、衆生済度の大誓願を持っておりますので、たとえ千万億の悪魔があって人びとの心をかく乱しようとする時、この童子のお名前を唱えると悪魔は悉く退散してしまう。また、苦難や災害に逢ったり、呪われたり病魔に襲われた時もこの童子の名前を呼ぶと即座に安楽吉祥を得ることができる。童子を恭敬し礼拝する者があれば、その身辺を離れず、あたかも影の

形に随うがごとく護り、不老長寿のご利益を得させてくれる。

こういう眷属を随えているお不動さまなのですから、そのご威徳は実に素晴しいものでありますが、その眷属が一人も身近かにいないとなると、いかにお不動さまとはいえ、十二分にお力を発揮することはできないでしょうし、またまことにご苦労なことでもあります。

さて、数多くの眷属の中でも代表格の矜羯羅・制吒迦の二童子はお不動さまの脇侍として左右にはべっており、不動三尊ともいわれるのですが、不動三尊即不動明王といわれるほど不二一体のおはたらきをしているのであります。

そこで方丈さまはまず矜羯羅・制吒迦の二童子を勧請されたのですが、これは身代り不動明王さまのこれまでのおはたらきに対するご恩報謝であり、また今後いっそうのご利益をお願いする気持をあらわされたものであります。

身代り不動明王さまは矜羯羅・制吒迦の二童子を身近かに随えられて、たいへんおよろこびになられたことでありましょうし、また、当善光寺をさらに一段と法運の盛んな寺に導いてくださることでありましょう。

大日如来

ところでお不動さまは大日如来の化身であります。

大日如来さまはなぜ化身をあらわす必要があるのか。それはおいおいわかってきますが、学校の先生にたとえると、校長先生は学校の経営全般を掌握する偉い先生でありますだけに近付きがたい一面があるのですが、校長先生の意を体した受持ちの先生となると親しみやすいのと同じように、大日如来は宇宙の根本仏でありますので、いわば校長先生のようなものでありま

す。そこで私どもの身近かにお不動さまとして、校長先生ではなく、受持ちの先生としてお姿をかえてあらわれるのであります。

さて、これまでのようにお不動さまだけというと、受持ちの先生だけしかいない。学校でいうと分校に過ぎないようなものであります。そこで方丈さまは再び錦戸先生にお願いして、一昨年、大日如来の尊像をお造りいただき、ご本尊にお迎えされたのであります。校長先生が身近かにおられると受持ちの先生も力強いのと同じように、身代り不動明王さまはどんなにか心強いことでありましょう。また、この不動殿も分校から本校に昇格したように一段と素晴しくなりました。

そしていままた薬師如来・阿弥陀如来と、いわば副校長お二人をお迎えしましたので、不動殿は大きな大きな本校となったようなものですが、それはさておき、大日如来さまはどういう仏さまなのでしょうか。

大日如来は梵語で「ヴァイローチャナ」といい、それを音訳したのが「毘盧舎那」であります。毘盧舎那仏は略して盧舎那仏ともいいますが、盧舎那とはもともとインドで太陽のことで、「遍一切処・光明遍照」ともいわれ、この仏さまの霊妙不可思議な光明はあまねく法界を照らし、さわりなく円満で明らか（無碍円明）であるといわれます。光明あまねく一切を照らすということは、太陽を人格化した仏ということであり、毘盧舎那仏は大宇宙の根本仏なのであります。

奈良の大仏は盧舎那仏であり、光明遍照、無碍円明のお徳をもって真に明るく平和な、そして豊かな国造りをしようという願いのもとに国力を結集して造立されたものであります。

この毘盧舎那仏、大日如来のお徳を人間界に伝えるためにこの世にお出ましになられたのが

お釈迦さまであります。つまりお釈迦さまは人間の住む娑婆世界の受持ちの先生になられたわけです。

お釈迦さまは、人間世界の苦しみ悩みをつぶさに観察なされ、それぞれの苦しみ悩みに応じて、それを救ってくださる仏さまをこの世に誕生させてくださいました。たくさんの仏さまをお説きになっておられますが、本日開眼なされた薬師如来と阿弥陀如来についてお話いたします。

薬師如来

『法華経』に「現世安穏、後生善処」という言葉があります。現世では安穏で幸福な生活を送り、亡くなったら善処、すなわち浄土に生まれかわる。これは人間誰しもが望むところであります。

観音霊場を巡拝する人が、よく笈摺に「奉巡拝××霊場。為現当二世安楽也」と書きますが、現は現世、当は当来の世、来世のことですので、「現当二世安楽」は「現世安穏、後生善処」と同じ意味の言葉であります。

さて、有難いことに、薬師さまは現世安穏を、阿弥陀さまは後生善処を受持ってお護りくださるのであります。

まず現世安穏から申しますと、人間生きてゆくうえに、いろいろな苦しみや悩みや恐怖に遭遇します。それらを取り除かなければ安穏な生活は望むべきもないのですが、中でも病気はもっとも恐るべきものの一つでありましょう。

今日は医学が進歩し、いい薬もたくさん出まわり、治療施設もととのっておりますが、それでも病気は恐ろしいものであります。ましてや昔、医者もいない、薬もない、といった時代であれば、病気はどんなにか恐ろしいものだったことでしょう。それは日本にはじめて入って来

た仏さまが薬師さまであったことでもうなづけるところであります。

奈良時代、仏教が日本に伝来すると、法隆寺はじめ、薬師寺、東大寺など大きな寺が次々と天皇の発願によって建てられましたが、これらのお寺にはほとんど薬師如来が祀られ、病気平癒の祈願が、天皇はじめ民間の人びとの間でもさかんにおこなわれました。

薬師如来は読んで字のとおり、薬の師匠さまで、左手には薬壺、くすりの壺を持っており、右手は施無畏の印、右胸の前で手を開いております。これは不安や恐怖を取り除いてくださる印相、サインであります。

薬師さまの正式のお名前は「東方浄瑠璃浄土教主薬師如来」といいます。

『薬師瑠璃光如来本願功徳経』というお経がありますが、その中に、「東方、此を去ること十殑伽沙等の仏土を過て世界あり、浄瑠璃と名く。仏を薬師瑠璃光如来応正等覚明行円満善逝世間解無上士調御丈夫天人師仏薄伽梵と号し奉る」とあります。

殑伽沙というのはガンジス河の砂の数です。それはとても数え切れない数であります。十殑伽沙ですから、その数も切れないものの十倍という気の遠くなるような数、それだけの仏土、仏さまが教主となっておられる国国を過ぎた東の彼方に浄瑠璃という名の国があり、そこの教主が薬師如来というのであります。

東の方とは太陽の出る処、朝日の昇る処、人間に光明を与える処であり、十殑伽沙とは無限の彼方、なかなか到達できない憧れの世界のことであります。瑠璃とは青紺色、ルリ色に輝く浄らかな世界のことであります。

薬師如来はどういう仏さまかというと、修行中の菩薩であった時代に、生きとし生けるものに求めるもののすべてを与えようと、十二の大

願を立て、それを悉く成就して東方浄瑠璃世界の教主として成仏された方であります。

薬師さまだけではありません。仏さまはみな修行中に大願を立て、それを成就して仏になられたのであります。次にお話する阿弥陀さまは四十八願、お釈迦さまは五百の大願といったふうであり、このような仏さまを仏教では報身仏といい、誓願や修行が完成し、その果報として得られた完全円満な理想的な仏とされております。

私の寺には薬師堂がありますので、毎月八日薬師さまのご縁日にはお詣りして『薬師如来本願功徳経』を読みますが、第一の大願から第十二の大願まで、現世利益の誓願が多く述べられております。中でももっとも有名であり、またそこから「薬師」の名が生まれるようになったと思われる第七願は、

願わくは我、来世に菩提を得ん時、若諸の有情、衆病逼切して、救なく帰なく、医なく薬なく、親なく家なく、貧窮多苦ならんに、我之名号一たび其耳に経なば、衆病悉く除こり、身心安楽にして、家属資具悉く皆豊足して乃至無上菩提を証得せん。

というのであります。

生きとし生けるものが、いろんな病苦にさいなまれ、看護も受けられず、医療も薬剤もなく、頼る者とてなく、貧しく苦しみ多い時、薬師如来の名号がひとたび耳にふれれば、あらゆる病気はことごとく消滅し、身心安楽にして、衣食住すべてととのい、仏道修行に無上の悟りを得させよう、というのであります。

ただ単に病気をなおしてやる、物質的な満足を与えてやる、というのではなく、無上の悟りを得させようというこの誓願大悲により、どれだけ多くの人びとが救われたことでありましょ

う。また、医学の進歩した今日、依然として薬師さまが信仰されているゆえんはそこにあるのであります。

次に薬師さまの脇仏は日光・月光の二菩薩であります。日の光、月の光と書きますから、太陽と月のことで、東方、浄瑠璃の光の輝きが衰えないよう、昼も夜も信仰する人びとを守ってくださるのであります。

また薬師さまには十二神将といって、甲冑に身を固め、いかりの相をしている武将姿の眷属がおります。これは、何かというと、今日は一日二十四時間ですが、昔は、子の刻、丑の刻、寅の刻といったふうに、一日を十二の刻に分けておりました。その一刻一刻をそれぞれ手分けして信仰する人びとを守ってくださる神々なのであります。

阿弥陀如来

次は後生善処を受持ってくださる阿弥陀さまの話ですが、昔、昔、大昔、とても数字で書き表わすことのできない大昔、世自在王仏という、仏さまの御世のこと、一人の王さまがおりました。この王さま、世自在王仏の説法を聞いてたいへん感激し、自分もこの仏さまのようになりたいものだという願を起こし、ついに国王の位を投げ捨てて一介の出家沙門となりました。これが法蔵菩薩であります。

法蔵菩薩は、どうしたら世の中の人びとの苦しみをなくすることができるかと考えた結果、四十八の大願を立て、これを全部完成し、西の方、十万億の仏国土を過ぎたところに極楽浄土を建立して、そこの教主、阿弥陀仏となられたのであります。

私の寺の本尊さまは、禅宗では珍らしく阿弥

陀さまですので、私は朝のおつとめ、奇数日には『観音経』の代りに『阿弥陀経』を読みます。

『阿弥陀経』には、まず極楽の素晴しい光景が次のように描かれております。

極楽には、七重の垣と七重の宝石で飾られた網、七重の並木とがあって、これらには金・銀・瑠璃・玻璃の四種の宝玉をあまねくめぐらしてある。また、七種の宝玉からできている池があって、八つの功徳を備えた水がその中に充ち満ちている。池の底には金の砂が敷かれている。

池の四方には階段があって、金・銀・瑠璃・玻璃の四種の宝玉で造られており、上の方には楼閣があって、これまた金・銀・瑠璃・玻璃・硨磲・赤珠・瑪瑙の七種の宝玉で飾られている。

池の中には蓮華が咲いていて、その花の大きいことは車輪のようであり、青い花は青い光、黄色い花は黄色い光、赤い花は赤い光、白い花は純白の光を放って、それぞれえもいわれぬ清らかな香気をただよわせている……

といったふうの描写が長々と続き、「これまでの話を聞いた者は、まさに願を起こして、この国に生まれたいと願うべきである」「しかし、わずかな善行や福徳を修めただけでは、この国に生まれることはできない」

ではどうしたら極楽に生まれることができるか。

もし善男善女があって、阿弥陀仏についての話を聞き、それを心にとどめ、あるいは一日、あるいは二日、あるいは三日、あるいは四日、あるいは五日、あるいは六日、あるいは七日、一心不乱に阿弥陀仏のみ名を唱うれば、その人が臨終の時には、阿弥陀仏がもろもろの聖者たちとともに、その

者の前に現われる。そしてその人が死に臨んでも、心が乱れることなく、たちどころに極楽浄土に往生することができる

と説かれております。

そして、その次に、多くの仏さまが、阿弥陀さまの功徳を讃嘆し、このお経を説いたお釈迦さまの教えが真実であるということを証明しておりますが、その証明の仕方がたいへんおもしろいのです。

「広長の舌相をいだして、あまねく三千大千世界を覆い、誠実のことばを説きたもう」というのです。大きな舌を出して、あまねく三千大世界を舌で覆って、説くことが真実である、と証明しておられるのです。

どうして舌を出すのかというと、インドでは最高の証明の方法は舌を出すことという考えがあるのだそうです。それは、ウソをいうと舌がくさってしまう。「私はウソをついてない、だから、これこのとおり舌は健在だ」、というのだそうで、ウソをいって、かげでぺろりと舌を出す日本とは逆です。

お釈迦さまの舌は広くて長くて、舌を出すと頭の髪のはえぎわまでとどき、顔全体を覆ったということで、広長舌といいます。この舌であまねく三千大千世世界を覆うて誠実の言葉を説いたというのですから、時間空間を超越して真実のことばを説いたという証明になるのです。

したがって、一心に阿弥陀如来のみ名を唱えると極楽往生ができるというのは、決してうそ偽りではありませんが、一心になることは生易しいことではなくたいへんむずかしいのです。

念仏ばーさん

或る絵の展覧会に、若く美しいママさんが子どもの口もとにスプーンで食物を運んでいる絵がありました。これを見た一人の禅僧が、「これ

じゃ、だめだ」と、つぶやいたので、そのわけをたずねると、「子どもに口をあかせようとするならば、匙を運ぶその人が大きな口をあけなくてはならぬのにこの美人はツンとすまして口を結んでいる」と答えたということであります。

子どもに物を食べさせようという心（意）があれば、自分は食べなくても「アーン」と口を開き、そしてスプーンを子どもの口もとに運ぶという動作（身業）が生まれてくるように、身口意の三業が期せずして一つになるのです。かわいい子どもに対する時だけではありません。うれしい時も悲しい時も、身口意の三業が一つになって躍動するところに、まごころが相手に通じ、感応道交するものであります。

ほとけさまを拝む時もそうで、余念雑念をまじえない浄信そのものの心になった時、口はおのずから仏名を唱え、身体は合掌低頭するのであります。

むかし、或るところに「念仏ばあさん」といわれるほど、朝から晩まで念仏を唱えているばあさんがおりました。このばあさん、寿命尽きて、すべての死者のあゆむ道をたどり、エンマ大王の前に立たされました。エンマ大王はばあさんを一と目みるなり、

「地獄行き！」

と宣告しました。ばあさんは、エンマ大王をにらみ返して抗議しました。

「私は念仏ばあさんといわれたほどのものです。地獄行きとは見たて違いです。エンマさまにも、千に一つ万に一つ間違いがあるかも知れないと思い、生前に唱えた念仏を車に積んで持って参りました。調べてみてください」

「ワシの目には狂いはないはずだが、証拠の品持参とあれば再審してつかわす。鬼ども、調べろ！」

そこで鬼どもが大八車に積んだ念仏を片っ端

から箕でふるいにかけました。すると、パッパッパッとみな飛び散ってしまうのです。ばあさんの念仏はカスばかりで実がない。

「それ見ろ、お前の念仏はみな空念仏ばかりだ。どうじゃ、わかったか!?」

その時、赤鬼が叫びました。

「大王さま、一つだけ残りました」

「何、一つ残った？　どれ、どれ……ウーム、小粒ながらこれほんものだ！」

そこでこの一粒を調べてみると——或る夏の日のこと、彼女がお寺参りに出かけた時、一天にわかにかきくもり大雷雨となりました。ばあさん、大樹のもとに雨宿りしたところ、目の前の杉の大木に一大音響と共に落雷しました。その瞬間、ばあさん、思わず知らず「なんまいだ！」

この念仏だけが実のあるただ一粒として箕に残りました。おかげでばあさん、地獄行きは免れたということです。

念仏はまことに易しくてむずかしい仏道修行であります。この間の消息を伝える話を紹介しましょう。

二河白道

一人の旅人が西に向って遠い道を歩んでおりました。そして人影のない、だだっぴろい沼地のようなところに辿り着きました。

ふと気がつくと、群賊悪獣がうしろから迫って来ます。〝これはいかん！〟と、死の恐怖におののいた旅人が西に走りますと、突如として前に火の河、水の河が横たわっております。左手は火の河、右手は水の河。よく見ると真ん中に細い細い白道があります。二つの河とも向う岸までは約百歩ぐらいですが、底なしの深さであり、火の河は南に辺際なくのびており、水の河も北に際限なくのびております。真ん中の白く光った道は幅が十五センチばかりで、東岸より

西岸に通じており、その長さは河幅と同じく百歩あまりです。

わずか百歩ではありますが、水の河の波がこもごも打ち寄せては道を洗い、火の河の火焔は悪魔の舌のように道を甜めており、水火が交錯して休む間もない状況であります。

後方よりは群賊悪獣、右と左には毒蛇、毒虫、旅人ののがれる道はこの白道しかありません。しかし、一歩足を踏み入れれば水火の二河に足をさらわれること必定。しかし、いずれにしても死は免がれ得ない。ならば意を決して白道を進もう。万に一つ、渡れるかもしれない。

旅人がこう決心した時、うしろから声があって、

「汝、ただ決定(けつじょう)してこの道を進め。決して死ぬようなことはない。もし止まるなら、それこそ死あるのみ」と。

これはお釈迦さまの声であります。また西の岸の上空より声あって、

「汝、水火に堕ちることを畏れず、一心に仏を念じて直ちに来たれ。必ず汝を護るであろう」と。

これは阿弥陀さまの声であります。

旅人はこの勧めと招きの声を聞いて、直ちに白道に足を踏み入れました。すると東岸の群賊から声があって、

「帰り来たれ。その道は渡り切れるものではない。われらは悪心を持つものではない」と。

旅人はその誘惑の声に耳を貸さず、一心に仏を念じ、ただ一筋の白道を直進すると、たちまち西岸に達し、永くもろもろの危難を離れ、善友と出会い、安泰をよろこんだのであります。

ここにいう水火の二河とは、人間の貪り愛する情を水に、瞋り憎しみの情を火にたとえ、真ん中の細い白道はその中に生ずる浄土を願うささやかな心を示したものであります。人間は貪

りや愛欲の水に押し流され、瞋りや憎しみの炎に身を焦がすのですが、その間にあって、お釈迦さまの勧め、阿弥陀さまの招きに耳を傾け、信心決定して一筋の道を進めば極楽浄土に到達できるというのであります。

むすび

さて、大日如来さまは、さきに申しましたように、光明遍照・無碍円明、太陽の徳をあらわしたものですが、太陽は「一辺を照らしても一辺は照らさないし、昼は照っても夜は照らない。しかし、如来の智慧の光は常に全てを照らすのだから大日という」と説かれております。

いま、東の薬師如来、西の阿弥陀如来が本尊大日如来の左右にお坐わりになられたのは、大日如来の光明が世界の隅々まで遍く照らし、一切衆生を救われるすがたをあらわしたものでありますし、それは、この寺を現世安穏、後生善処の法悦の道場たらしめようとする方丈さまの大誓願のあらわれであります。

この方丈さまの大誓願はまことに素晴しいものでありますし、錦戸先生のお話のように、仏像制作には一躰二年もかかるというのに、わずか五年の間に衿羯羅童子・制吒迦童子、大日如来、そして薬師如来、阿弥陀如来と五躰の仏像が次々と造顕されたことは、仏天の加護なくしてなし得るものではありません。そこで私はさきほど開眼の法語の最後を次の偈で結んだのであります。

発心貫徹不尋常　発心の貫徹、尋常ならず
二仏像成坐御堂　二仏、像成り、御堂に坐す
仏徳荘厳開法運　仏徳を荘厳して、法運を開く
人天歓喜仰慈光　人天歓喜して、慈光を仰ぐ

発願文

当寺を開創して二十三年を閲しいま檀徒数は横浜随一の多きに達した　又開創十五周年を記念して発足した報恩行の一端としての海外留学僧派遣育英の事業も順調に進展している　これ一重に開山楳庵白純大和尚が如被によるもので鳴謝に堪えない　今年十三回忌正当の勝縁に因み阿弥陀如来の尊像を造立し以て品位を増崇し上慈衛の鴻恩に酬いんとするものである　願くは開山大和尚永く御加護を垂れ給わんことを

仏滅二五五七年　平成三年十月念八日

成寿山善光寺二世　黒田　武志

奉納される前の尊像（錦戸師のアトリエにて）

二人の留学僧の得度式

海外留学僧派遣育英会常務理事
龍光寺住職　佐藤俊明

出　発　―三月二十九日―

昨日は終日雨で肌寒い一日だったので、朝、目を醒ましてまず気になったのは気温と天候だった。

暑い国の一番暑い季節にでかけるので真夏の出で立ちにしなくてはならぬのだが、そこに到着するまではこちらの気温に絶える服装でなくてはならぬのが厄介なこと。寒暖計を見たら十度だった。昨日の電話ではバンコクはいま三十六度だというから二十六度の温度差がある。毛糸のセーターを着込んで出かけなくてはならんかなァ、荷物になって嫌だなァ、と思いつつ夜の明けるのを待った。さいわい快晴である。これなら温度もあがると判断して割に軽装で出発した。正解だった。

十一時成田を離陸。機内は少々寒い感じだったが、ドンムアン空港に着陸して一歩機外に出ると、サウナに入ったみたいな熱気に包まれた。時計を見たら十七時三十分だった。明日からの

日中の暑さが思いやられる。

善光寺海外留学僧派遣育英会では、過去七年間に、九ケ国に三十五名の留学僧を派遣しており、そのうちタイ国にはこれまで七名を派遣したが、今年度派遣した二名の得度式が明後三十一日におこなわれる。落合隆、品田裕淳の両君だが、落合君はタイの仏教に魅せられ、善光寺黒田方丈の弟子となっての渡タイでもあり、また三年前ワット・パクナム住職の一行が来日された際、ご住職の要望により黒田方丈の四人の子息が沙弥の得度式を善光寺で挙げたが、タイ国上座部仏教の得度式が日本でおこなわれたのは有史以来はじめての盛儀とて各方面から絶賛を浴びたのだが、さいわい学年末休暇中なので、お礼の意を込めてワット・パクナムを訪れるとともに子供たちも親しんでいる落合君の得度式を見学させようと、黒田方丈は四人の子息に二人の姉妹を加え、倫子夫人を引率の先生として一家八人の「遠足」をおこなうことにした。それに私と写真家の駒澤氏が加わった。もっとも駒澤氏は、文芸春秋社が創刊する雑誌『マルコポーロ』の写真撮影のため、われら一行より一週間前、前記落合・品田の両君と共にバンコクに渡っていた。

さて、落合君がいかにタイの仏教に惹かれたか。それを知ることは得度式に臨む彼の心情を窺ううえに参考になることなので、彼の応募論文「タイ仏教に学ぶ」の冒頭を引用してみよう。

一つの印象的な映像がある。タイ国で長い間上映されたその映画は、ある青年の悲恋物語で、それは彼の死によって完結する。その死は何を象徴しているのだろうか。

バンコックの富豪の息子に恋人を連れ去られた農村の青年は、その事件を契機として日

ごろ父親から勧められている得度を決意する。父親はその決意を喜び、三衣（チーオン）を大切そうに持ちながら村人たちに報告してまわる。車座になって作業をする農婦の一人はその姿を見て小さく合掌をする。仏像でも比丘でもない。息子の得度を喜ぶ一介の農夫に向って合掌するその姿からは、南方上座部仏教を小乗仏教と賤称する根拠を見いだすことはできない。

釈尊の大きな手で蒔かれた教えの種子は、伝播された国々の風土や固有の文化に育まれて、様々な花を咲かせた。花の形や色の諸相の成立は、それぞれの国土に育つように自在に変化させる仏教の柔軟さによるものであるが、種子はあくまでも同一のものに収斂される。それは息子の得度を喜ぶ父親への農婦の合掌が、いくつかの媒体を通してもなお、光の速度で釈尊に向かって行くことと同じ構造を示している。映画という庶民文化の一断面、それも時間的には数秒の場面にも釈尊の姿はたち顕われる。

仏教学を修めたわけでもなく、寺院の出身でもない、ごく普通の教育を受け、現代の日本社会で働き生活する私にとって仏教はおおむね無縁なものであった。加えて、私にとって寺院とは特別な儀式や法事以外には関わることのない特別な場所であり、仏像は礼拝の対象ではなく、ほどほどの美意識を満足させる美術品であった。又、仏教のもつ様々な哲理は物事の認識の方法を拡大させることもあり得るといった程度の理解はあっても、日常生活における私の所作には仏教の影響はほとんどなかったと思われる。そのような私にとって仏教との出会いはタイ仏教との出会いから始まったといえる。（後略）

空港には小谷亀太郎先生が出迎えてくれた。小谷先生は在タイ五十周年という在留邦人の長老で、世界仏教徒連盟本部の事務次長、そしてまた日本人会事業部長として納骨堂奉賛会の初代会長、それが改名して仏教奉賛会の会長となり、現在は懇話会の会長を務めておられる。一般邦人のみならず、タイ留学の仏教僧はその殆んどが小谷先生のお世話になっている。それで昨年、小谷先生が来日されたのを機に、タイ留学僧の組織する「日本パクナム会」では、小谷先生の叙勲と在タイ五十周年を祝し、特に世界仏教徒連盟本部の事務次長として世界仏教徒の親善友好に尽くした功績を賛え、そして留学僧の受け入れと後見人としての尽力に感謝する祝賀会を東京・銀座の三笠会館で開催し、石附周行会長より感謝状と記念品を贈っている。

黒田方丈と私は、細部の打合わせがあるので小谷先生のクルマに乗り、倫子夫人と六人の子供さん方は、旅行社のチャーターしたバスでホテルに向かうことになった。ところがそのバスたるや五十人乗りの大型バスである。でっかいことの好きな黒田方丈の好みに合わせたわけではない。日本では三十年も前に姿を消したダイハツ・ミゼットがタクシーとして走っているこの国のことだから、手ごろなマイクロバスは配車困難だったのだろうが、とにかく大乗仏教徒を迎えるにふさわしく大きな乗物を提供してくれたものと感謝して受取って置こう。

二人の留学僧と駒澤氏にはホテルで出会った。なんでも空港まで出迎えてくれたのだそうだが交通渋滞で遅れ、おまけにマイクロバスを探しまわったという。これでは遅れなくても見つかるはずはなかった。

さて、落合君は当然ながら在家人の姿だったが、品田君は白い着物の上に黄色の法衣をまとっている。一見して私は〝おやっ！〟と思い、

〝得度式は明後日なはずなのに〟とわが目を疑った。そこで駒澤氏に訊ねてみた。

駒澤氏は「あれは真言宗のころもなんですよ（注・品田君は真言宗の僧侶）。それが面白いんですよ」と前置きしてこんな話をしてくれた。

「この間、エメラルド寺院を拝観したんですが、チケット売り場の係員は、入場者の上半身しか見えないので、上座部仏教の坊さんと思ったんでしょう。ただで通してくれたんです。ところが入口では全身が見えますからばれてしまってダメ。しかし別の寺ではフリーパスでしたよ」と。とにかくまぎらわしい色の黄衣をまとった品田君は時折善男善女から合掌されて、もうすでに上座部仏教の坊さんになりかかっていた。

「いやー、パクナムの食べ物は豊富ですよ」と、九十五キロの巨漢はいかにもうれしそうで、〝これなら大丈夫〟とたのもしく感じた。

この日の夕食は小谷先生が中華料理をふるまってくれた。これは二十五年に及ぶ親交の黒田方丈の歓迎と、さらには落合・品田両君への在家人最後の夕食を振る舞うために設けられたものであった。彼等二人はワット・パクナムに寝泊りしているので、正午を過ぎれば食事を採らない生活にすでに入っており、随分遠慮していたが、その間の事情は知り尽くしている小谷先生の勧めに有難くその好意を受けていた。

ワット・パクナムに拝登　―三月三十日―

冬から真夏に一夜にして変わった朝、ホテルの食堂に入ってゆくと、ボーイが「サムライ！」と声をかける。何事かと思えば、一週間前からこのホテルに泊っている、ひげをたくわえた作務衣姿の駒澤氏はそう呼ばれているのだった。

また、タイではいま「一休さん」が放映され

ているそうで、私たちの僧形を見て「一休さん、サワディー！」と声をかけてくれる。

こうした雰囲気に包まれて朝食を採っていると、昨晩到着したばかりとは思えない親しみが感じられてくる。

さて今日の日程のメインはワット・パクナムを訪れることである。昨晩小谷先生から連絡をとってもらったところ、午後五時に待ってるとのことだった。これは、日中の酷暑を避けての配慮でもあろうし、また、日中は市内観光をするだろうからとの推測によるものでもあろうか、まことに有難い時刻指定である。そこでバンコクおきまりのコースを辿って、まず水上マーケットをみて、暁の寺院・エメラルド寺院を拝観し、王宮を見物して昼食を採り、午後はローズ・ガーデンに赴き、ここで一時間近く小休止をとる。

ローズ・ガーデンを三時半に離れ、五時丁度ワット・パクナムに着いた。住職のプラ・タム・パンヤ・ボディと小谷先生は待機しておられ、快く歓待してくれた。

黒田方丈がまず一家を挙げてお礼に参上した旨を述べると、ご住職は一人一人からの礼を受け、相好をくずして、「よく来た、よく来た」とねぎらってくれた。

ついで黒田方丈は、

一、今年二人お世話になっているが、さらに一名、大本山総持寺の安居者、それにロスアンゼルス禅センターからアメリカ人一名を留学させてほしいし、招聘状をいただきたい。

二、留学僧を派遣して七年になり、三十五名を九ケ国に派遣しているが応募に当っての提出論文を一冊にまとめ、近々発刊する予定なので、顧問として序文をいただきたい。

と要請し、快諾を得た。そして明日の得度式挙行について礼を述べ、細部の打ち合わせをお

こなった。

次に病気静養中の副住職プラ・パワナ・コーソン・テイラ（父君は日本人、母君はタイ人で日本名河北国雄、タイの高僧のなかで、ただ一人日本語に堪能な人で、日本人留学僧から「アーチャン」「アーチャン」「先生の意」といって親しまれている方である）をお見舞いした。この方は三年前善光寺での得度式の際、教授師をお勤めくださったので、四人の沙弥が一段と成長し、逞しくなっている姿を見て心から喜んでくれた。

明日の得度式に出ていただけないのが何よりも残念なことである。一日も早い本復をねがってやまない。

アーチャンの室を辞して、次に図書館に足を運び、「日本文庫」の陳列状況を見せてもらった。

戦後、タイ国で得度し修行した日本人僧の数は約九十名に達している。またバンコク在住の日本人の数は間もなく三万人に達するだろうとのことであり、日本とタイ国との仏教交流は年々深まっている。

こうしたことから「日本パクナム会」は昨年三月の臨時総会で、ワット・パクナムに「日本文庫」を開設することを決め、その図書を留学僧や在留邦人に利用してもらい、日本とタイ国の相互理解と仏教文化の交流に役立てようとし、開設に必要な経費を会員から集めるとともに、広く仏教書籍出版社などに図書の寄贈を呼びかけ、合計五百冊をまとめた。

贈呈式は当初、六月にワット・パクナムで総会を開き、その際おこなう予定だったが、ワット・パクナム住職、副住職が共々にアメリカ巡錫の旅に出て半月も不在になるため、日本に立ち寄った機会を利用しておこなうことに急きょ改め、五月二十九日、東京・渋谷の東急インで

目録を贈呈した。

その贈呈式の様子を報じた「中外日報」（平成二年六月八日付）に、中村元先生は次のように称賛の一文を寄せられている。

本屋には米国本のみ
日本文化への道開けよう

このたび黒田武志老師の発願により、日本パクナム会がワットパクナムに「日本文庫」を寄贈されることは大変意義深い。東南アジアは日本と関係も深く、大事な地域だが、日本のことはほとんど知られていなかった。物資の輸出入は盛んだが文化面では無視されてきたと言っても過言ではない。あちらの人が日本について知識を得るには、ロンドンまたはニューヨークを介しているのが現状で、英語で書かれた日本関係書物を読んでいる。大変な遠回りをして日本のことを知っている。

第一日本センターというものがほとんど無い。形式的には外交機関に付属して作られているが、余りに貧弱だから、大使館の人が見せようとしない。見せて欲しいとお願いしても、お恥ずかしくて見せられないという状態だ。

タイはアジアで一番国情も安定し進んでいる。文化的にはアメリカの感化が大きい。バンコクの本屋に行って驚いたのは、並んでいるのはアメリカのものばかりという印象だった。日本についての本なんてありはしない。大国のインドでも日本の書物を少し置いているのはタゴール大学の支那学研究所だけだ。これも中国人の作った研究所の横に置かれている。これでは残念だと思い、若干の有志が発起人になって、民間の力で何百冊かタゴール大学に贈ったことがある。東南アジアでは唯一ではないかと思う。

タイ国に何もないことはまことに残念なことで、それが黒田老師の発願に応じて、このように多くの方々が御協力になったことを知って喜んでいる。

タイ国の人々は日本の特に仏教の要素に対して、互いに友人、同信の気持ちを抱くだろう。華僑の人は日本語の読める人がいる。寄贈図書の中には英語のものも相当あるので、これは直接理解出来ると思う。この頃は日本人の滞在者が増えた。現地の文化に新しく接する機会を与えることにもなる。

寄せられた図書は船便で送ったのだが、前記のごとくアーチャンが病気で仆れたため、その後の状況を知ることができなかった。そこで今回ぜひにもと思って見せてもらった次第である。本は無事到着し本棚に並べられていたが、翠雲堂に寄贈制作してもらった「日本パクナム文庫」と大書した看板は、まだ到着していなかった。

一言付記すると、本の寄贈そのものはさほどむずかしいものではないが、送料がかさみ、届けるのが至難である。五キロまで二四〇〇円、それ以上になると、本の定価の一割が関税として徴収されるので、ツアー旅行の際携行してもらえればともかくも、送料高が最大のネックである。

落合・品田の両君もこの「日本文庫」をはじめて見せてもらい、「これだけ本があればうんと勉強できる」と張り切っていた。

得度式に参列　―三月三十一日―

今日はこのたびの旅行のハイライト、得度式に臨む日である。得度式は午後五時からおこなわれるが、その前に剃髪式がある。さいわい午前中は別に予定がないので大理石寺院・ワッ

ト・ベンチャマボピットを拝観に出かけた。この寺は約百年前ラマ五世によって建立されたバンコクで一番新しい寺で、イタリーから運んだ大理石で造られたまことに美しい寺であるが、ローソクの火の不始末から火災に遭ったとかで、目下修理中。せっかくの美観も写真のバックにならず、仏さまを拝んで早々に引き上げたので、一時間ばかり時間にゆとりができた。そこで子供さん方の希望によりホテルのプールで水泳、水球を楽しむことにした。おかげで私も何年かぶりで泳ぐことができ、さわやかな気分になった。また得度式に臨むに当っての沐浴でもあるので、「沐浴身体　当願衆生　心身無垢内外光潔」（身体を沐浴すれば、当に願うべし、衆生、心身無垢にして内外光潔ならん）と口誦し、強引に水泳を得度式に関連付けた。

昼食を済ませて、四人の子息は全員改良衣に着替え、各自法衣と袈裟を携えてホテルのロビーに集合した。今の今までシャツに半ズボンという軽装の男の子四人が白衣に黒の改良衣、白足袋に草履という出で立ちであらわれたので周囲の人々は一様におどろきの眼差をもって見つめていた。

約一時間バスに乗り、ワット・パクナムに着いた。早速アーチャンの居室を訪れ、ここで法衣に着替え、お袈裟をつけ、まず、ワット・パクナムを今日の隆盛に導いた、「ロンポー」（われらが父）と敬まわれ親しまれている前住職プラ・モンコン・テムニの尊像を礼拝し『般若心経』を読誦した。

剃髪は、日本の得度式の場合と違ってきわめて簡単なものだった。

日本の場合は、得度者は爾前に白衣を着け、導師は盛装して位につき、香を焚き、微音にて三宝を勧請し、十仏名を唱え、「礼讃文」を読み、

「髪を断ずるは愛根を断ずるなり。愛根わずかに断ずれば本身即ち露る」と諭し、出家の徳を賛え、次に「何某よ、世の無常なることを悟り、俗を棄てて仏弟子となる、まさに不思議の縁を思うべし」と唱え、ついで得度者の頭上に洒水灌頂、再び剃刀を拈じ「人生を流転すれば、恩愛を断つこと難し、恩愛を捨てて悟りに入る、これ真実の報恩なり」と唱え、導師、三たび剃刀を得度者の頭上に拈じ、「汝の頭上に、なおひと結びのシュラあり、ただ仏一人よくこれを断つ、われ今代って除去す、汝、許すや否や」と声をはげまし、許す、と答えを得てはじめて剃髪するのである。が、ここの場合は、建物のわきの大樹の下に椅子を置き、上半身裸の得度者の頭を濡らし、ハサミで切り、カミソリで剃る。頭だけでなく眉毛も剃り落とす。ただそれだけで、わずか数分間で終る。

「随分簡単なものだなァ」というと、駒澤氏いわく。「この間中国系の人の一時僧(タイでは男子二十歳にして五体健全ならば誰でも僧になれるし、とにかく結婚する前に僧になるのが一般的で、その期間は一週間、十五日間、一カ月、二カ月などと個々人の希望に応じて一般的に決められる)の剃髪式がありましたが、家族や友人三十人ぐらい参列し、それぞれハサミを入れたりカミソリを当てたり、写真を撮ったり、なかなか賑々しいものでした」とのこと。

日本の場合は、出家するということは本人のみならず家族にとっても一大決心を要することである。それだけに剃髪そのものに大きな意義を付与し、厳粛なセレモニーとしておこなうのであるが、この国の場合は一時僧の剃髪もあり、また一時僧でないにしても還俗に対する考え方はいたってゆるやかなもので、俗生活に還りたければ還俗し、また仏門に入りたければ入る。還俗は三度まで許されるという。仏門に入った

以上は戒律を守らなければならぬ。そこで戒律を守る誓約の儀式としての得度式は盛大におこなうが、その前の剃髪は当然の爾前処理として儀式化していないというところであろうか。

剃髪ひとつ見ても日本とタイとではこのように違うので、ここで日本の仏教とタイの違いについて触れておくのも無意味なことではあるまい。

お釈迦さまがご入滅になり、直接教えを受けた弟子たちも亡くなり、第二世代、第三世代と時代が経過するにつれ、お釈迦様の教えの解釈をめぐって対立が起こり、ついにいろいろな派に分れた部派仏教の時代となり、それぞれ自派の依り処とする経典の訓古的研究に没頭し、お釈迦さまの教えの枝葉末節に拘わるものが多くなった。ここにおいて、経典の奥にひそむお釈迦さまの教えの真実義を汲み取って仏教本来の姿に立還り、新しい時代に即応することが大事だとする仏教革新運動が抬頭して来た。

保守的な部派仏教においては、出家僧、つまりプロの坊さんが自らの悟りを得ることを最高の目的とするのであるが、新しい仏教運動では、仏教を信奉するのに出家在家の別はない。すべては仏の子であり、誰しもが悟りを求める菩薩である。そこで、自分だけでなく自他共々に悟りの岸に到るべく、衆生済度の誓願を立てて種々の波羅蜜行の完成を期すべきであるとするのである。

この仏教革新運動は燎原の火のごとく全インドにひろまり、その間、従来の伝承経典を超えて、仏の正法を開顕する新しい大乗経典が次々と創り出されたのである。そして大乗仏教は中国を経て日本に伝わり、小乗仏教はインド・スリランカ・タイの南方諸国に伝わった。ただ、大乗に対する小乗というといかにも見下げた感

じがするので、小乗といわず「上座部仏教」と称することに改められた。

さて、南方上座部仏教の比丘（僧侶）は二二七の戒律を守っているが、これだけの戒律を守るとなると衣食住に何等思いわずらうことのない、社会生活とは明確に一線を画した出家教団の比丘でなくてはできない。これは自他共々に悟りの道に進もうとする大乗仏教ではあまりにも煩瑣で窮屈すぎることである。そこで大乗仏教では十六カ条にすべての戒律を集約するのである。

前述のようにタイでは男子二十歳に達し、身体健全であれば誰でも僧になることができる。僧になるには「ウパサンパダ」（得度式）の儀礼を通らなければならない。

ウパサンパダとは「受け入れる」という意味のパーリー語で、サンガ（僧団）の一員として受け入れることを示すものである。

タイにおいて僧になることは、いわば一人前のおとなになることである。それは親を喜ばせることであり、また結婚相手に満足と安心を与えることである。しかし得度式を挙げるには相当の経費を要する。出家生活に不可欠の三衣つまり、アンタラワーサコー（腰巻）、ウッタラーサンコー（黄衣）、それにサンカーティ（黄衣をおりたたんだもの）やバアーツ（鉄鉢）及び日用品、それに戒師や参列僧に対するお礼の品々等々を準備しなくてはならぬが、これらの総額は月給の三倍ぐらいに相当するであろう。しかし幸いなことにタイでは「タン・ブン」といって、徳を積むことが最高の善行であり、同時にそれは自分を物質的にも豊かにするものであると考えられている。そして寺や僧団や僧に対する物質的な寄進こそ最善最良のタン・ブンとされている。したがって得度式があるともなれば、

自ら寄進を申出る人が少なくない。

さて、今回二人の得度式に際しては、二人とも善光寺留学僧であり、中でも一人は弟子でもあり、加えて今年は開山楳庵白純大和尚の十三回忌に正当しているので、黒田方丈は自ら二人のダーヤカ（施主）となるつもりだったが、アーチャンが、病気でもあるので「ぜひダーヤカにして欲しい」とのこと。そこで折半して一人づつ施主をつとめることになり、私がアーチャンの代理として参列することになった。

開式三十分前、クティ（僧房）のロビーにはたくさんのお供物がならべられ、ひとつひとつ、それを捧持するメチー（白衣をまとい、八戒を守り奉仕活動をする女性信者、最近は高校生・大学性が休暇を利用してメチーになるものが増えているという）が三十人位、それに小谷先生はじめ有縁の人びと、黒田ファミリーを加えて四十数名が、蓮華を持つ二人の得度者の前に二列に並び、ウポーサタ（布薩堂＝本堂）の囲りを三回右まわりして仏徳を賛えた。

十年前、日本人納骨堂のある寺、ワット・リアプで真言宗の青年僧野見山君の得度式に列したときは、銅羅や太鼓などの鳴物入りで踊りながらの三匝だった。得度式は俗人を仏のみ子に差上げるお祝いの儀式なのだから当然といえば当然かも知れないが、粛々として進むほうが私たち日本人にはふさわしいような気がした。

白衣に身を包んだ得度者は本堂入口にあるシーマ（結界標石、これのある寺だけが得度式ができる）の前で献香・献華・点燭して跪坐（ひざまづいて坐る）三拝、起立して「導師らに向いて礼拝し奉る。導師らよ、わが一切の罪過を許したまえ。わが徳は御身によって嘉賞されんことを。御身の尊徳はわれに与えられんことを。何卒、何卒」と唱える。この唱えごとは終始パーリー語で、暗記するには一、二週間はかかる

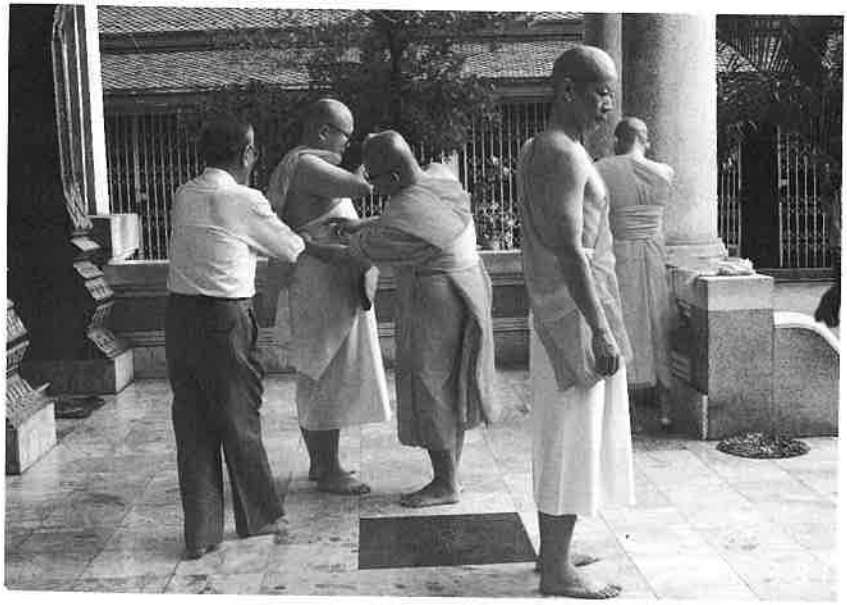
'91 3 31

という。一拝一唱、三度繰り返して本堂に入り、また同じような作法が続く。

一方本堂内では、僧衆二十数名ほどがコの字型に着坐し、定刻に入堂した戒師(住職)が点燭し、一同釈迦牟尼仏に三拝。戒師向きをかえて、コの字型の中心に、ご本尊を背にして坐わる。

得度者は出家を乞い、合掌した腕に黄衣をいただき、長跪(古い礼法の一つ。両ひざを地につけて、上半身を直立させてする礼法)して戒師の前に進み、黄衣を戒師に献げ、次に施主から戒師への供物を受けとって戒師に献上する。そして三拝して戒師より黄衣をいただき、合掌、起立して、前記唱え言を唱え、三たび重ねて出家を乞い奉る。

こうした所作が繰返し続き、やがて三衣をいただき、退堂して本堂裏で白衣を脱ぎ三衣を法の如く被着する。そして入堂して今度は戒師の前に進み、供物を献上して三拝し、前記唱えご



とを唱え、ついで三帰と戒を授けてほしいと懇願する。こうして三帰と戒が授与され、得度者が伝誦すること長々と続き、法名が授かる。落合君はピンダー・アラター、品田君はコーロー・アラタノー。アラタノーは住職の名前とのこと。

そして鉄鉢を首にかけてもらい、僧としての必需品三衣一鉢の確認をおこなう。そして戒師と教授師は得度者に教誡事項と同じく十三項目の障碍法の有無について質疑応答をおこない、最後に参列僧は沈黙によって賛意を表し、具足戒授与が全員一致で決定承認され、得度式は終るのである。

ついで、新比丘（僧）に対して垂示があり、終って「仰せの通り」と答辞を述べて三拝。施主は供物を献上して三拝する。式の流れは日本の得度式と大体同じで、所要時間も一時間だった。

式終了後、落合君が緊張そのものの顔であったのに対し、あの朗かで屈託のない品田君が、滂沱たる涙をじっとこらえている姿が印象的だった。

得度式終了して私は次のように謝辞を述べ、小谷先生に通訳してもらった。

「只今は善光寺留学僧二人の得度式を挙げていただき本当に有難うございました。そしてその儀式に参列させていただきましたことは寔に光栄かつ法悦の極みであります。

本来ならば黒田理事長が御礼申上ぐべきではありますが、実は黒田理事長、さきほど来、法悦に感無量の様子でございますので、常務理事の私が代って御礼申上げさせていただきます。

黒田理事長は今から二十五年前、ここワット・パクナムにおいて、只今のように得度式を挙げていただき、一年有余の修行生活を送ったのでありますが、その間に得た尊い体験をあとに続く修行者の為にぜひとも味わってもらいた

いとの念願に燃え、何とかこれが実現の方途を探って参ったのでありますが、〝念ずれば花開く〟といわれますように、七年前に花が開き、善光寺海外留学僧派遣育英会を設置する運びとなったのであります。

爾来、毎年、海外に留学僧を送っておりますが、これまで七年間に、九カ国に三十五名の留学僧を派遣しておりますが、ここワット・パクナムでは、今日の二人を加えて七名がお世話をいただいております。実は間もなくもう一人がご縁の深い大本山総持寺から、また、黒田理事長のお兄さん前角老師のもとからアメリカ人一名、計二名がお世話になる予定になっており、昨日ご住職よりご快諾いただいたところであります。

さらには三年前、ご住職のご一行がご来日なされた際、黒田理事長の四人のご子息のために得度式を挙げていただきました。これは日本はじまって以来の快挙として各方面から絶賛を浴びたのでありますが、本日、そのお礼言上の意もあって、そしてまた本場の坊さんの得度式をぜひ見せていただきたいこととて、その四人が、姉・妹とともにお母さん引率のもとに日本僧如法の姿で参っております。

このように、ワット・パクナムは遠い国の遠い異質の寺ではなく、まさに〝わが家〟といった親しみの感ぜられる寺であります。実はお互いがこうした親しみを抱いて触れ合うことが大事なことで、大袈裟にいえば、今、人類に求められているものはこのような親善友好の輪をひろげることでありましょう。

世界は今や一つの方向に着々とその歩みを進めておりますが、湾岸戦争に見られたようにナショナリズムと神を持つ宗教の融和には道なお遠しの感がいたします。しかし、さいわいにも仏教は神を持たず、四海平等を説くものであり、

これこそ来るべき新しい世紀の宗教であります。それにはまず私どもが仏教の内部においての親善友好の実を挙げなくてはなりません。そうした点において、只今の得度式は真に意義深いものであります。本当に有難うございました。

最後に、ワット・パクナムの今後一層の御発展と、日本との親善交流にさらに一段のお力を賜わらんことをお願いしてお礼の言葉といたします。」

アユタヤの旧日本人町跡へ　―四月一日―

今日は最後の日程、アユタヤ行きである。

アユタヤに王朝が興ったのは一三五〇年。タイ最初の統一国家として栄えたスヨタイ王朝をしのぎ、三十三代、四一七年間続いた王朝である。

アユタヤといえば山田長政、山田長政といえばシャムと連想する人も少なくないかと思う。

今から十年程前までは、東南アジアに出かける時は予防の注射や接種が必要で、パス・ポートにはイエロー・カードを添付する必要があった。十三年前タイに出かける時、私と同年で、今はもう故人になられた詩人の高田敏子さんが、「シャムにいらっしゃるんですって？　悪い病気に罹らないよう注意してくださいね」と電話をくださったことを思い出すが、あの時も黒田方丈と一緒で、アユタヤを案内してもらい、山田長政の白木の墓標の前に佇み、歴史の流れに感じ入ったものだった。そして今から三年前、黒田方丈は次のような趣意書を日・タイ協会会長に送っている。

山田長政顕彰碑建立趣意書

日本における歴史上の人物として山田長政ほど異色の英傑は他に見出だし得ないでありましょう。

下級武士より身を起こし、雄心の赴くまま波涛万里を超えてシャム国に渡り、威武を挙げ、国都アユチヤの日本人街の邦人を糾合して内乱を鎮め、六昆王に封ぜられて毒殺の悲運にたおれた山田長政は、正に風雲に乗じ、風雲に身を隠した異才であります。

そのため、山田長政を架空の人物と見る人は過去においても少なくありませんでしたが、日本の歴史教育の現況をみるに、山田長政の名は次代を担う青少年の心から消え去るであろうことは火をみるより明らかで、寔に憂慮にたえないところであります。

山田長政逝いて三五八年、いま日タイ両国は友好親善を深めております。このときに当たり、内憂外患を払い、シャム国を危急の難局から救った山田長政の功績を顕彰することは日タイ両国にとって時宜を得たことであります。これは、かってワット・パクナムにおいて修行経験を持ち、かつ同寺に留学僧を派遣している私として特に強く感ずるところであります。

ここに私は山田長政顕彰碑の建立を発願いたしました。経費は一切負担いたしますが、右意のあるところをお汲取りくだされ、アユチアの地に建立すべく万端のご高配をお願いするものであります。

昭和六十三年十月一日

発願主

日本国横浜市港南区日野町一六〇四

善光寺住職　黒　田　大　圓

後　援　　日本パクナム会

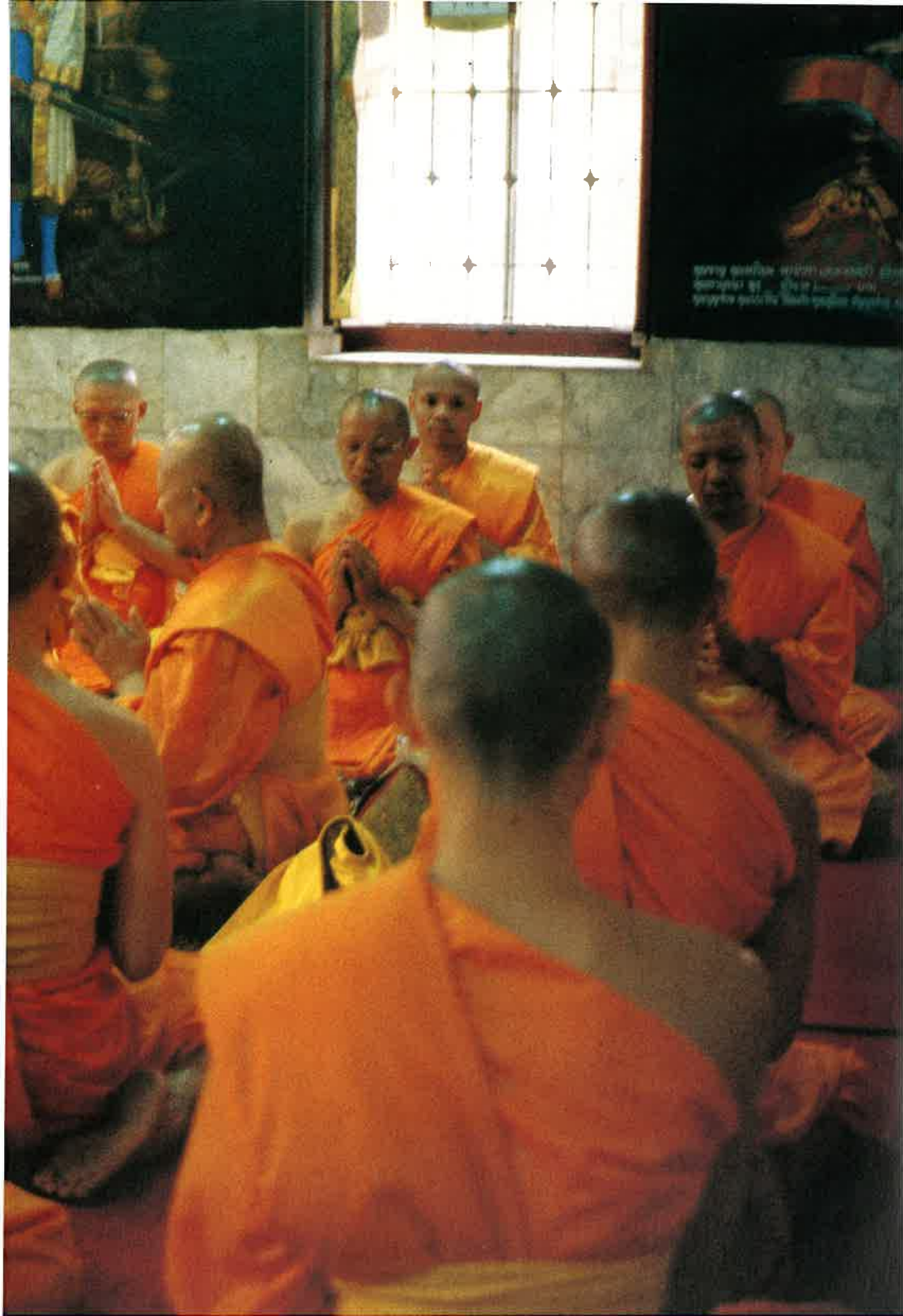
日・タイ協会会長　殿

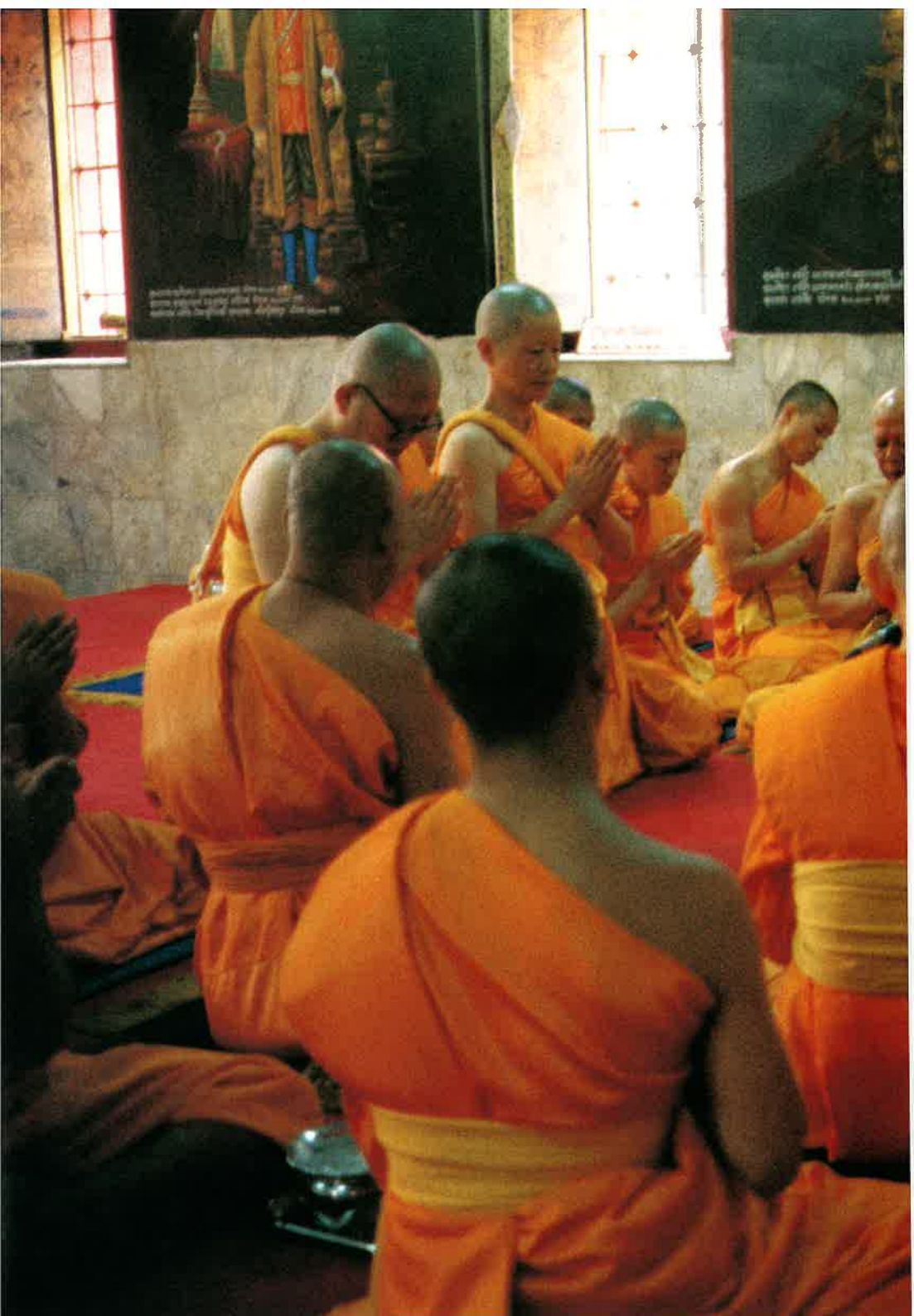
この趣意書を提出するに至った経緯はという

と、当時、日・タイ協会が旧日本人町博物館を建設する予定で、黒田方丈も協力を求められたのだったが、博物館もさることながら、供養のためお墓を造ることを忘れてはなるまいとの宗教者としての意見を述べたことに由来するものである。

ところがその後、当初の計画は大幅に修正され、日本政府から九億九千九百万円（約一億七千万バーツ）の無償援助があったので、日・タイ両政府の合意により「アユタヤ歴史研究センター」が設立されることとなり、本館はアユタヤ市ローチャナ通りに、別館は旧日本人町跡に建てられた。

足を運んでみると、一昨年十一月に行った時とはすっかり変って、実によく整備されていた。そしてまた、山田長政はこの地で亡くなった人ではないし、日本人全部の供養塔ならともかくもと建墓にはきわめて消極的だったので、今後別の形で何か協力要請があればともかくも、建墓の件はこれで打ち切り、水に流すことにしてチャオプラヤ川を舟でバンコクに下った。（終）





ประกาศ

二人の留学僧の得度式

海外留学僧派遣育英会常務理事
龍光寺住職　佐藤俊明

出　発　―三月二十九日―

昨日は終日雨で肌寒い一日だったので、朝、目を醒ましてまず気になったのは気温と天候だった。

暑い国の一番暑い季節にでかけるので真夏の出で立ちにしなくてはならぬのだが、そこに到着するまではこちらの気温に絶える服装でなくてはならぬのが厄介なこと。寒暖計を見たら十度だった。昨日の電話ではバンコクはいま三十六度だというから二十六度の温度差がある。毛糸のセーターを着込んで出かけなくてはならんかなァ、荷物になって嫌だなァ、と思いつつ夜の明けるのを待った。さいわい快晴である。これなら温度もあがると判断して割に軽装で出発した。正解だった。

十一時成田を離陸。機内は少々寒い感じだったが、ドンムアン空港に着陸して一歩機外に出ると、サウナに入ったみたいな熱気に包まれた。時計を見たら十七時三十分だった。明日からの

日中の暑さが思いやられる。

善光寺海外留学僧派遣育英会では、過去七年間に、九ケ国に三十五名の留学僧を派遣しており、そのうちタイ国にはこれまで七名を派遣したが、今年度派遣した二名の得度式が明後三十一日におこなわれる。落合隆、品田裕淳の両君だが、落合君はタイの仏教に魅せられ、善光寺黒田方丈の弟子となっての渡タイでもあり、また三年前ワット・パクナム住職の一行が来日された際、ご住職の要望により黒田方丈の四人の子息が沙弥の得度式を善光寺で挙げたが、タイ国上座部仏教の得度式が日本でおこなわれたのは有史以来はじめての盛儀とて各方面から絶賛を浴びたのだが、さいわい学年末休暇中なので、お礼の意を込めてワット・パクナムを訪れるとともに子供たちも親しんでいる落合君の得度式を見学させようと、黒田方丈は四人の子息に二人の姉妹を加え、倫子夫人を引率の先生として一家八人の「遠足」をおこなうことにした。それに私と写真家の駒澤氏が加わった。もっとも駒澤氏は、文芸春秋社が創刊する雑誌『マルコポーロ』の写真撮影のため、われら一行より一週間前、前記落合・品田の両君と共にバンコクに渡っていた。

さて、落合君がいかにタイの仏教に惹かれたか。それを知ることは得度式に臨む彼の心情を窺ううえに参考になることなので、彼の応募論文「タイ仏教に学ぶ」の冒頭を引用してみよう。

一つの印象的な映像がある。タイ国で長い間上映されたその映画は、ある青年の悲恋物語で、それは彼の死によって完結する。その死は何を象徴しているのだろうか。

バンコックの富豪の息子に恋人を連れ去られた農村の青年は、その事件を契機として日

ごろ父親から勧められている得度を決意する。父親はその決意を喜び、三衣（チーオン）を大切そうに持ちながら村人たちに報告してまわる。車座になって作業をする農婦の一人はその姿を見て小さく合掌をする。仏像でも比丘でもない。息子の得度を喜ぶ一介の農夫に向って合掌するその姿からは、南方上座部仏教を小乗仏教と賤称する根拠を見いだすことはできない。

釈尊の大きな手で蒔かれた教えの種子は、伝播された国々の風土や固有の文化に育まれて、様々な花を咲かせた。花の形や色の諸相の成立は、それぞれの国土に育つように自在に変化させる仏教の柔軟さによるものであるが、種子はあくまでも同一のものに収斂される。それは息子の得度を喜ぶ父親への農婦の合掌が、いくつかの媒体を通してもなお、光の速度で釈尊に向かって行くことと同じ構造を示している。映画という庶民文化の一断面、それも時間的には数秒の場面にも釈尊の姿はたち顕われる。

仏教学を修めたわけでもなく、寺院の出身でもない、ごく普通の教育を受け、現代の日本社会で働き生活する私にとって仏教はおおむね無縁なものであった。加えて、私にとって寺院とは特別な儀式や法事以外には関わることのない特別な場所であり、仏像は礼拝の対象ではなく、ほどほどの美意識を満足させる美術品であった。又、仏教のもつ様々な哲理は物事の認識の方法を拡大させることもあり得るといった程度の理解はあっても、日常生活における私の所作には仏教の影響はほとんどなかったと思われる。そのような私にとって仏教との出会いはタイ仏教との出会いから始まったといえる。（後略）

空港には小谷亀太郎先生が出迎えてくれた。小谷先生は在タイ五十周年という在留邦人の長老で、世界仏教徒連盟本部の事務次長、そしてまた日本人会事業部長として納骨堂奉賛会の初代会長、それが改名して仏教奉賛会の会長となり、現在は懇話会の会長を務めておられる。一般邦人のみならず、タイ留学の仏教僧はその殆んどが小谷先生のお世話になっている。それで昨年、小谷先生が来日されたのを機に、タイ留学僧の組織する「日本パクナム会」では、小谷先生の叙勲と在タイ五十周年を祝し、特に世界仏教徒連盟本部の事務次長として世界仏教徒の親善友好に尽くした功績を賛え、そして留学僧の受け入れと後見人としての尽力に感謝する祝賀会を東京・銀座の三笠会館で開催し、石附周行会長より感謝状と記念品を贈っている。

黒田方丈と私は、細部の打合わせがあるので小谷先生のクルマに乗り、倫子夫人と六人の子供さん方は、旅行社のチャーターしたバスでホテルに向かうことになった。ところがそのバスたるや五十人乗りの大型バスである。でっかいことの好きな黒田方丈の好みに合わせたわけではない。日本では三十年も前に姿を消したダイハツ・ミゼットがタクシーとして走っているこの国のことだから、手ごろなマイクロバスは配車困難だったのだろうが、とにかく大乗仏教徒を迎えるにふさわしく大きな乗物を提供してくれたものと感謝して受取って置こう。

二人の留学僧と駒澤氏にはホテルで出会った。なんでも空港まで出迎えてくれたのだそうだが交通渋滞で遅れ、おまけにマイクロバスを探しまわったという。これでは遅れなくても見つかるはずはなかった。

さて、落合君は当然ながら在家人の姿だったが、品田君は白い着物の上に黄色の法衣をまとっている。一見して私は〝おやっ！〟と思い、

〝得度式は明後日なはずなのに〟とわが目を疑った。そこで駒澤氏に訊ねてみた。

駒澤氏は「あれは真言宗のころもなんですよ（注・品田君は真言宗の僧侶）。それが面白いんですよ」と前置きしてこんな話をしてくれた。

「この間、エメラルド寺院を拝観したんですが、チケット売り場の係員は、入場者の上半身しか見えないので、上座部仏教の坊さんと思ったんでしょう。ただで通してくれたんです。ところが入口では全身が見えますからばれてしまってダメ。しかし別の寺ではフリーパスでしたよ」と。とにかくまぎらわしい色の黄衣をまとった品田君は時折善男善女から合掌されて、もうすでに上座部仏教の坊さんになりかかっていた。

「いやー、パクナムの食べ物は豊富ですよ」と、九十五キロの巨漢はいかにもうれしそうで、〝これなら大丈夫〟とたのもしく感じた。

この日の夕食は小谷先生が中華料理をふるまってくれた。これは二十五年に及ぶ親交の黒田方丈の歓迎と、さらには落合・品田両君への在家人最後の夕食を振る舞うために設けられたものであった。彼等二人はワット・パクナムに寝泊りしているので、正午を過ぎれば食事を採らない生活にすでに入っており、随分遠慮していたが、その間の事情は知り尽くしている小谷先生の勧めに有難くその好意を受けていた。

ワット・パクナムに拝登　―三月三十日―

冬から真夏に一夜にして変わった朝、ホテルの食堂に入ってゆくと、ボーイが「サムライ！」と声をかける。何事かと思えば、一週間前からこのホテルに泊っている、ひげをたくわえた作務衣姿の駒澤氏はそう呼ばれているのだった。

また、タイではいま「一休さん」が放映され

ているそうで、私たちの僧形を見て「一休さん、サワディー！」と声をかけてくれる。

こうした雰囲気に包まれて朝食を採っていると、昨晩到着したばかりとは思えない親しみが感じられてくる。

さて今日の日程のメインはワット・パクナムを訪れることである。昨晩小谷先生から連絡をとってもらったところ、午後五時に待ってるとのことだった。これは、日中の酷暑を避けての配慮でもあろうし、また、日中は市内観光をするだろうからとの推測によるものでもあろうか、まことに有難い時刻指定である。そこでバンコクおきまりのコースを辿って、まず水上マーケットをみて、暁の寺院・エメラルド寺院を拝観し、王宮を見物して昼食を採り、午後はローズ・ガーデンに赴き、ここで一時間近く小休止をとる。

ローズ・ガーデンを三時半に離れ、五時丁度ワット・パクナムに着いた。住職のプラ・タム・パンヤ・ボディと小谷先生は待機しておられ、快く歓待してくれた。

黒田方丈がまず一家を挙げてお礼に参上した旨を述べると、ご住職は一人一人からの礼を受け、相好をくずして、「よく来た、よく来た」とねぎらってくれた。

ついで黒田方丈は、

一、今年二人お世話になっているが、さらに一名、大本山総持寺の安居者、それにロスアンゼルス禅センターからアメリカ人一名を留学させてほしいし、招聘状をいただきたい。

二、留学僧を派遣して七年になり、三十五名を九ケ国に派遣しているが応募に当っての提出論文を一冊にまとめ、近々発刊する予定なので、顧問として序文をいただきたい。

と要請し、快諾を得た。そして明日の得度式挙行について礼を述べ、細部の打ち合わせをお

こなった。

次に病気静養中の副住職プラ・パワナ・コーソン・テイラ（父君は日本人、母君はタイ人で日本名河北国雄、タイの高僧のなかで、ただ一人日本語に堪能な人で、日本人留学僧から「アーチャン」「アーチャン」「先生の意」といって親しまれている方である）をお見舞いした。この方は三年前善光寺での得度式の際、教授師をお勤めくださったので、四人の沙弥が一段と成長し、逞しくなっている姿を見て心から喜んでくれた。

明日の得度式に出ていただけないのが何よりも残念なことである。一日も早い本復をねがってやまない。

アーチャンの室を辞して、次に図書館に足を運び、「日本文庫」の陳列状況を見せてもらった。

戦後、タイ国で得度し修行した日本人僧の数は約九十名に達している。またバンコク在住の日本人の数は間もなく三万人に達するだろうとのことであり、日本とタイ国との仏教交流は年々深まっている。

こうしたことから「日本パクナム会」は昨年三月の臨時総会で、ワット・パクナムに「日本文庫」を開設することを決め、その図書を留学僧や在留邦人に利用してもらい、日本とタイ国の相互理解と仏教文化の交流に役立てようとし、開設に必要な経費を会員から集めるとともに、広く仏教書籍出版社などに図書の寄贈を呼びかけ、合計五百冊をまとめた。

贈呈式は当初、六月にワット・パクナムで総会を開き、その際おこなう予定だったが、ワット・パクナム住職、副住職が共々にアメリカ巡錫の旅に出て半月も不在になるため、日本に立ち寄った機会を利用しておこなうことに急きょ改め、五月二十九日、東京・渋谷の東急インで

目録を贈呈した。

その贈呈式の様子を報じた「中外日報」（平成二年六月八日付）に、中村元先生は次のように称賛の一文を寄せられている。

本屋には米国本のみ
日本文化への道開けよう

このたび黒田武志老師の発願により、日本パクナム会がワットパクナムに「日本文庫」を寄贈されることは大変意義深い。東南アジアは日本と関係も深く、大事な地域だが、日本のことはほとんど知られていなかった。物資の輸出入は盛んだが文化面では無視されてきたと言っても過言ではない。あちらの人が日本について知識を得るには、ロンドンまたはニューヨークを介しているのが現状で、英語で書かれた日本関係書物を読んでいる。大変な遠回りをして日本のことを知っている。

第一日本センターというものがほとんど無い。形式的には外交機関に付属して作られているが、余りに貧弱だから、大使館の人が見せようとしない。見せて欲しいとお願いしても、お恥ずかしくて見せられないという状態だ。

タイはアジアで一番国情も安定し進んでいる。文化的にはアメリカの感化が大きい。バンコクの本屋に行って驚いたのは、並んでいるのはアメリカのものばかりという印象だった。日本についての本なんてありはしない。大国のインドでも日本の書物を少し置いているのはタゴール大学の支那学研究所だけだ。これも中国人の作った研究所の横に置かれている。これでは残念だと思い、若干の有志が発起人になって、民間の力で何百冊かタゴール大学に贈ったことがある。東南アジアでは唯一ではないかと思う。

タイ国に何もないことはまことに残念なことで、それが黒田老師の発願に応じて、このように多くの方々が御協力になったことを知って喜んでいる。

タイ国の人々は日本の特に仏教の要素に対して、互いに友人、同信の気持ちを抱くだろう。華僑の人は日本語の読める人がいる。寄贈図書の中には英語のものも相当あるので、これは直接理解出来ると思う。この頃は日本人の滞在者が増えた。現地の文化に新しく接する機会を与えることにもなる。

寄せられた図書は船便で送ったのだが、前記のごとくアーチャンが病気で仆れたため、その後の状況を知ることができなかった。そこで今回ぜひにもと思って見せてもらった次第である。本は無事到着し本棚に並べられていたが、翠雲堂に寄贈制作してもらった「日本パクナム文庫」と大書した看板は、まだ到着していなかった。

一言付記すると、本の寄贈そのものはさほどむずかしいものではないが、送料がかさみ、届けるのが至難である。五キロまで二四〇〇円、それ以上になると、本の定価の一割が関税として徴収されるので、ツアー旅行の際携行してもらえればともかくも、送料高が最大のネックである。

落合・品田の両君もこの「日本文庫」をはじめて見せてもらい、「これだけ本があればうんと勉強できる」と張り切っていた。

得度式に参列　―三月三十一日―

今日はこのたびの旅行のハイライト、得度式に臨む日である。得度式は午後五時からおこなわれるが、その前に剃髪式がある。さいわい午前中は別に予定がないので大理石寺院・ワッ

ト・ベンチャマボピットを拝観に出かけた。この寺は約百年前ラマ五世によって建立されたバンコクで一番新しい寺で、イタリーから運んだ大理石で造られたまことに美しい寺であるが、ローソクの火の不始末から火災に遭ったとかで、目下修理中。せっかくの美観も写真のバックにならず、仏さまを拝んで早々に引き上げたので、一時間ばかり時間にゆとりができた。そこで子供さん方の希望によりホテルのプールで水泳、水球を楽しむことにした。おかげで私も何年かぶりで泳ぐことができ、さわやかな気分になった。また得度式に臨むに当っての沐浴でもあるので、「沐浴身体　当願衆生　心身無垢内外光潔」（身体を沐浴すれば、当に願うべし、衆生、心身無垢にして内外光潔ならん）と口誦し、強引に水泳を得度式に関連付けた。

昼食を済ませて、四人の子息は全員改良衣に着替え、各自法衣と袈裟を携えてホテルのロビーに集合した。今の今までシャツに半ズボンという軽装の男の子四人が白衣に黒の改良衣、白足袋に草履という出で立ちであらわれたので周囲の人々は一様におどろきの眼差をもって見つめていた。

約一時間バスに乗り、ワット・パクナムに着いた。早速アーチャンの居室を訪れ、ここで法衣に着替え、お袈裟をつけ、まず、ワット・パクナムを今日の隆盛に導いた、「ロンポー」（われらが父）と敬まわれ親しまれている前住職プラ・モンコン・テムニの尊像を礼拝し『般若心経』を読誦した。

剃髪は、日本の得度式の場合と違ってきわめて簡単なものだった。

日本の場合は、得度者は爾前に白衣を着け、導師は盛装して位につき、香を焚き、微音にて三宝を勧請し、十仏名を唱え、「礼讃文」を読み、

「髪を断ずるは愛根を断ずるなり。愛根わずかに断ずれば本身即ち露る」と諭し、出家の徳を賛え、次に「何某よ、世の無常なることを悟り、俗を棄てて仏弟子となる、まさに不思議の縁を思うべし」と唱え、ついで得度者の頭上に洒水灌頂、再び剃刀を拈じ「人生を流転すれば、恩愛を断つこと難し、恩愛を捨てて悟りに入る、これ真実の報恩なり」と唱え、導師、三たび剃刀を得度者の頭上に拈じ、「汝の頭上に、なおひと結びのシュラあり、ただ仏一人よくこれを断つ、われ今代って除去す、汝、許すや否や」と声をはげまし、許す、と答えを得てはじめて剃髪するのである。が、ここの場合は、建物のわきの大樹の下に椅子を置き、上半身裸の得度者の頭を濡らし、ハサミで切り、カミソリで剃る。頭だけでなく眉毛も剃り落とす。ただそれだけで、わずか数分間で終る。

「随分簡単なものだなァ」というと、駒澤氏いわく。「この間中国系の人の一時僧(タイでは男子二十歳にして五体健全ならば誰でも僧になれるし、とにかく結婚する前に僧になるのが一般的で、その期間は一週間、十五日間、一カ月、二カ月などと個々人の希望に応じて一般的に決められる)の剃髪式がありましたが、家族や友人三十人ぐらい参列し、それぞれハサミを入れたりカミソリを当てたり、写真を撮ったり、なかなか賑々しいものでした」とのこと。

日本の場合は、出家するということは本人のみならず家族にとっても一大決心を要することである。それだけに剃髪そのものに大きな意義を付与し、厳粛なセレモニーとしておこなうのであるが、この国の場合は一時僧の剃髪もあり、また一時僧でないにしても還俗に対する考え方はいたってゆるやかなもので、俗生活に還りたければ還俗し、また仏門に入りたければ入る。還俗は三度まで許されるという。仏門に入った

以上は戒律を守らなければならぬ。そこで戒律を守る誓約の儀式としての得度式は盛大におこなうが、その前の剃髪は当然の爾前処理として儀式化していないというところであろうか。

剃髪ひとつ見ても日本とタイとではこのように違うので、ここで日本の仏教とタイの違いについて触れておくのも無意味なことではあるまい。

お釈迦さまがご入滅になり、直接教えを受けた弟子たちも亡くなり、第二世代、第三世代と時代が経過するにつれ、お釈迦様の教えの解釈をめぐって対立が起こり、ついにいろいろな派に分れた部派仏教の時代となり、それぞれ自派の依り処とする経典の訓古的研究に没頭し、お釈迦さまの教えの枝葉末節に拘わるものが多くなった。ここにおいて、経典の奥にひそむお釈迦さまの教えの真実義を汲み取って仏教本来の姿に立還り、新しい時代に即応することが大事だとする仏教革新運動が抬頭して来た。

保守的な部派仏教においては、出家僧、つまりプロの坊さんが自らの悟りを得ることを最高の目的とするのであるが、新しい仏教運動では、仏教を信奉するのに出家在家の別はない。すべては仏の子であり、誰しもが悟りを求める菩薩である。そこで、自分だけでなく自他共々に悟りの岸に到るべく、衆生済度の誓願を立てて種々の波羅蜜行の完成を期すべきであるとするのである。

この仏教革新運動は燎原の火のごとく全インドにひろまり、その間、従来の伝承経典を超えて、仏の正法を開顕する新しい大乗経典が次々と創り出されたのである。そして大乗仏教は中国を経て日本に伝わり、小乗仏教はインド・スリランカ・タイの南方諸国に伝わった。ただ、大乗に対する小乗というといかにも見下げた感

じがするので、小乗といわず「上座部仏教」と称することに改められた。

さて、南方上座部仏教の比丘（僧侶）は二二七の戒律を守っているが、これだけの戒律を守るとなると衣食住に何等思いわずらうことのない、社会生活とは明確に一線を画した出家教団の比丘でなくてはできない。これは自他共々に悟りの道に進もうとする大乗仏教ではあまりにも煩瑣で窮屈すぎることである。そこで大乗仏教では十六カ条にすべての戒律を集約するのである。

前述のようにタイでは男子二十歳に達し、身体健全であれば誰でも僧になることができる。僧になるには「ウパサンパダ」（得度式）の儀礼を通らなければならない。

ウパサンパダとは「受け入れる」という意味のパーリー語で、サンガ（僧団）の一員として受け入れることを示すものである。

タイにおいて僧になることは、いわば一人前のおとなになることである。それは親を喜ばせることであり、また結婚相手に満足と安心を与えることである。しかし得度式を挙げるには相当の経費を要する。出家生活に不可欠の三衣つまり、アンタラワーサコー（腰巻）、ウッタラーサンコー（黄衣）、それにサンカーティ（黄衣をおりたたんだもの）やバアーツ（鉄鉢）及び日用品、それに戒師や参列僧に対するお礼の品々等々を準備しなくてはならぬが、これらの総額は月給の三倍ぐらいに相当するであろう。しかし幸いなことにタイでは「タン・ブン」といって、徳を積むことが最高の善行であり、同時にそれは自分を物質的にも豊かにするものであると考えられている。そして寺や僧団や僧に対する物質的な寄進こそ最善最良のタン・ブンとされている。したがって得度式があるともなれば、

自ら寄進を申出る人が少なくない。

さて、今回二人の得度式に際しては、二人とも善光寺留学僧であり、中でも一人は弟子でもあり、加えて今年は開山楳庵白純大和尚の十三回忌に正当しているので、黒田方丈は自ら二人のダーヤカ（施主）となるつもりだったが、アーチャンが、病気でもあるので「ぜひダーヤカにして欲しい」とのこと。そこで折半して一人づつ施主をつとめることになり、私がアーチャンの代理として参列することになった。

開式三十分前、クティ（僧房）のロビーにはたくさんのお供物がならべられ、ひとつひとつ、それを捧持するメチー（白衣をまとい、八戒を守り奉仕活動をする女性信者、最近は高校生・大学性が休暇を利用してメチーになるものが増えているという）が三十人位、それに小谷先生はじめ有縁の人びと、黒田ファミリーを加えて四十数名が、蓮華を持つ二人の得度者の前に二列に並び、ウポーサタ（布薩堂＝本堂）の囲りを三回右まわりして仏徳を賛えた。

十年前、日本人納骨堂のある寺、ワット・リアプで真言宗の青年僧野見山君の得度式に列したときは、銅羅や太鼓などの鳴物入りで踊りながらの三匝だった。得度式は俗人を仏のみ子に差上げるお祝いの儀式なのだから当然といえば当然かも知れないが、粛々として進むほうが私たち日本人にはふさわしいような気がした。

白衣に身を包んだ得度者は本堂入口にあるシーマ（結界標石、これのある寺だけが得度式ができる）の前で献香・献華・点燭して跪坐（ひざまづいて坐る）三拝、起立して「導師らに向いて礼拝し奉る。導師らよ、わが一切の罪過を許したまえ。わが徳は御身によって嘉賞されんことを。御身の尊徳はわれに与えられんことを。何卒、何卒」と唱える。この唱えごとは終始パーリー語で、暗記するには一、二週間はかかる

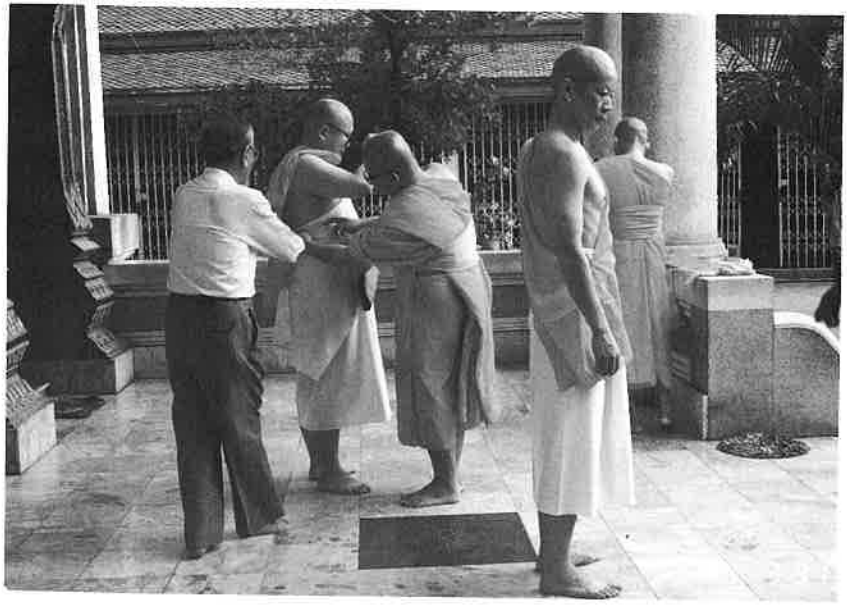
'91 3 31

という。一拝一唱、三度繰り返して本堂に入り、また同じような作法が続く。

一方本堂内では、僧衆二十数名ほどがコの字型に着坐し、定刻に入堂した戒師(住職)が点燭し、一同釈迦牟尼仏に三拝。戒師向きをかえて、コの字型の中心に、ご本尊を背にして坐わる。

得度者は出家を乞い、合掌した腕に黄衣をいただき、長跪(古い礼法の一つ。両ひざを地につけて、上半身を直立させてする礼法)して戒師の前に進み、黄衣を戒師に献げ、次に施主から戒師への供物を受けとって戒師に献上する。そして三拝して戒師より黄衣をいただき、合掌、起立して、前記唱え言を唱え、三たび重ねて出家を乞い奉る。

こうした所作が繰返し続き、やがて三衣をいただき、退堂して本堂裏で白衣を脱ぎ三衣を法の如く被着する。そして入堂して今度は戒師の前に進み、供物を献上して三拝し、前記唱えご



とを唱え、ついで三帰と戒を授けてほしいと懇願する。こうして三帰と戒が授与され、得度者が伝誦すること長々と続き、法名が授かる。落合君はピンダー・アラター、品田君はコーロー・アラタノー。アラタノーは住職の名前とのこと。

そして鉄鉢を首にかけてもらい、僧としての必需品三衣一鉢の確認をおこなう。そして戒師と教授師は得度者に教誡事項と同じく十三項目の障碍法の有無について質疑応答をおこない、最後に参列僧は沈黙によって賛意を表し、具足戒授与が全員一致で決定承認され、得度式は終るのである。

ついで、新比丘（僧）に対して垂示があり、終って「仰せの通り」と答辞を述べて三拝。施主は供物を献上して三拝する。式の流れは日本の得度式と大体同じで、所要時間も一時間だった。

式終了後、落合君が緊張そのものの顔であったのに対し、あの朗かで屈託のない品田君が、滂沱たる涙をじっとこらえている姿が印象的だった。

得度式終了して私は次のように謝辞を述べ、小谷先生に通訳してもらった。

「只今は善光寺留学僧二人の得度式を挙げていただき本当に有難うございました。そしてその儀式に参列させていただきましたことは寔に光栄かつ法悦の極みであります。

本来ならば黒田理事長が御礼申上ぐべきではありますが、実は黒田理事長、さきほど来、法悦に感無量の様子でございますので、常務理事の私が代って御礼申上げさせていただきます。

黒田理事長は今から二十五年前、ここワット・パクナムにおいて、只今のように得度式を挙げていただき、一年有余の修行生活を送ったのでありますが、その間に得た尊い体験をあとに続く修行者の為にぜひとも味わってもらいた

いとの念願に燃え、何とかこれが実現の方途を探って参ったのでありますが、〝念ずれば花開く〟といわれますように、七年前に花が開き、善光寺海外留学僧派遣育英会を設置する運びとなったのであります。

爾来、毎年、海外に留学僧を送っておりますが、これまで七年間に、九カ国に三十五名の留学僧を派遣しておりますが、ここワット・パクナムでは、今日の二人を加えて七名がお世話をいただいております。実は間もなくもう一人がご縁の深い大本山総持寺から、また、黒田理事長のお兄さん前角老師のもとからアメリカ人一名、計二名がお世話になる予定になっており、昨日ご住職よりご快諾いただいたところであります。

さらには三年前、ご住職のご一行がご来日なされた際、黒田理事長の四人のご子息のために得度式を挙げていただきました。これは日本はじまって以来の快挙として各方面から絶賛を浴びたのでありますが、本日、そのお礼言上の意もあって、そしてまた本場の坊さんの得度式をぜひ見せていただきたいこととて、その四人が、姉・妹とともにお母さん引率のもとに日本僧如法の姿で参っております。

このように、ワット・パクナムは遠い国の遠い異質の寺ではなく、まさに〝わが家〟といった親しみの感ぜられる寺であります。実はお互いがこうした親しみを抱いて触れ合うことが大事なことで、大袈裟にいえば、今、人類に求められているものはこのような親善友好の輪をひろげることでありましょう。

世界は今や一つの方向に着々とその歩みを進めておりますが、湾岸戦争に見られたようにナショナリズムと神を持つ宗教の融和には道なお遠しの感がいたします。しかし、さいわいにも仏教は神を持たず、四海平等を説くものであり、

これこそ来るべき新しい世紀の宗教であります。それにはまず私どもが仏教の内部においての親善友好の実を挙げなくてはなりません。そうした点において、只今の得度式は真に意義深いものであります。本当に有難うございました。

最後に、ワット・パクナムの今後一層の御発展と、日本との親善交流にさらに一段のお力を賜わらんことをお願いしてお礼の言葉といたします。」

アユタヤの旧日本人町跡へ　―四月一日―

今日は最後の日程、アユタヤ行きである。

アユタヤに王朝が興ったのは一三五〇年。タイ最初の統一国家として栄えたスヨタイ王朝をしのぎ、三十三代、四一七年間続いた王朝である。

アユタヤといえば山田長政、山田長政といえばシャムと連想する人も少なくないかと思う。

今から十年程前までは、東南アジアに出かける時は予防の注射や接種が必要で、パス・ポートにはイエロー・カードを添付する必要があった。十三年前タイに出かける時、私と同年で、今はもう故人になられた詩人の高田敏子さんが、「シャムにいらっしゃるんですって？　悪い病気に罹らないよう注意してくださいね」と電話をくださったことを思い出すが、あの時も黒田方丈と一緒で、アユタヤを案内してもらい、山田長政の白木の墓標の前に佇み、歴史の流れに感じ入ったものだった。そして今から三年前、黒田方丈は次のような趣意書を日・タイ協会会長に送っている。

山田長政顕彰碑建立趣意書

日本における歴史上の人物として山田長政ほど異色の英傑は他に見出だし得ないでありましょう。

下級武士より身を起こし、雄心の赴くまま波涛万里を超えてシャム国に渡り、威武を挙げ、国都アユチヤの日本人街の邦人を糾合して内乱を鎮め、六昆王に封ぜられて毒殺の悲運にたおれた山田長政は、正に風雲に乗じ、風雲に身を隠した異才であります。

そのため、山田長政を架空の人物と見る人は過去においても少なくありませんでしたが、日本の歴史教育の現況をみるに、山田長政の名は次代を担う青少年の心から消え去るであろうことは火をみるより明らかで、寔に憂慮にたえないところであります。

山田長政逝いて三五八年、いま日タイ両国は友好親善を深めております。このときに当たり、内憂外患を払い、シャム国を危急の難局から救った山田長政の功績を顕彰することは日タイ両国にとって時宜を得たことであります。これは、かってワット・パクナムにおいて修行経験を持ち、かつ同寺に留学僧を派遣している私として特に強く感ずるところであります。

ここに私は山田長政顕彰碑の建立を発願いたしました。経費は一切負担いたしますが、右意のあるところをお汲取りくだされ、アユチアの地に建立すべく万端のご高配をお願いするものであります。

昭和六十三年十月一日

発願主

日本国横浜市港南区日野町一六〇四

善光寺住職　黒　田　大　圓

後　援　　日本パクナム会

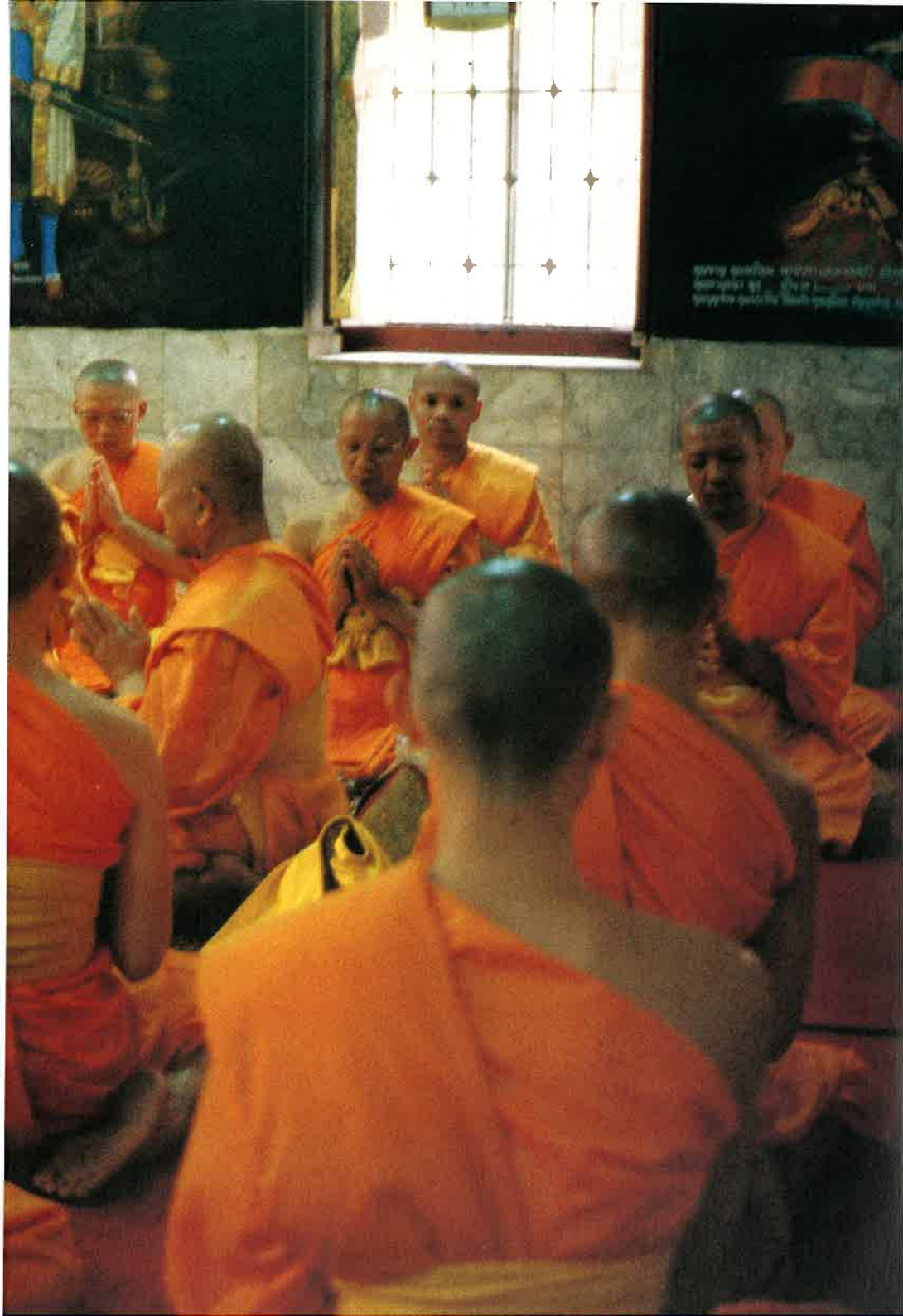
日・タイ協会会長　殿

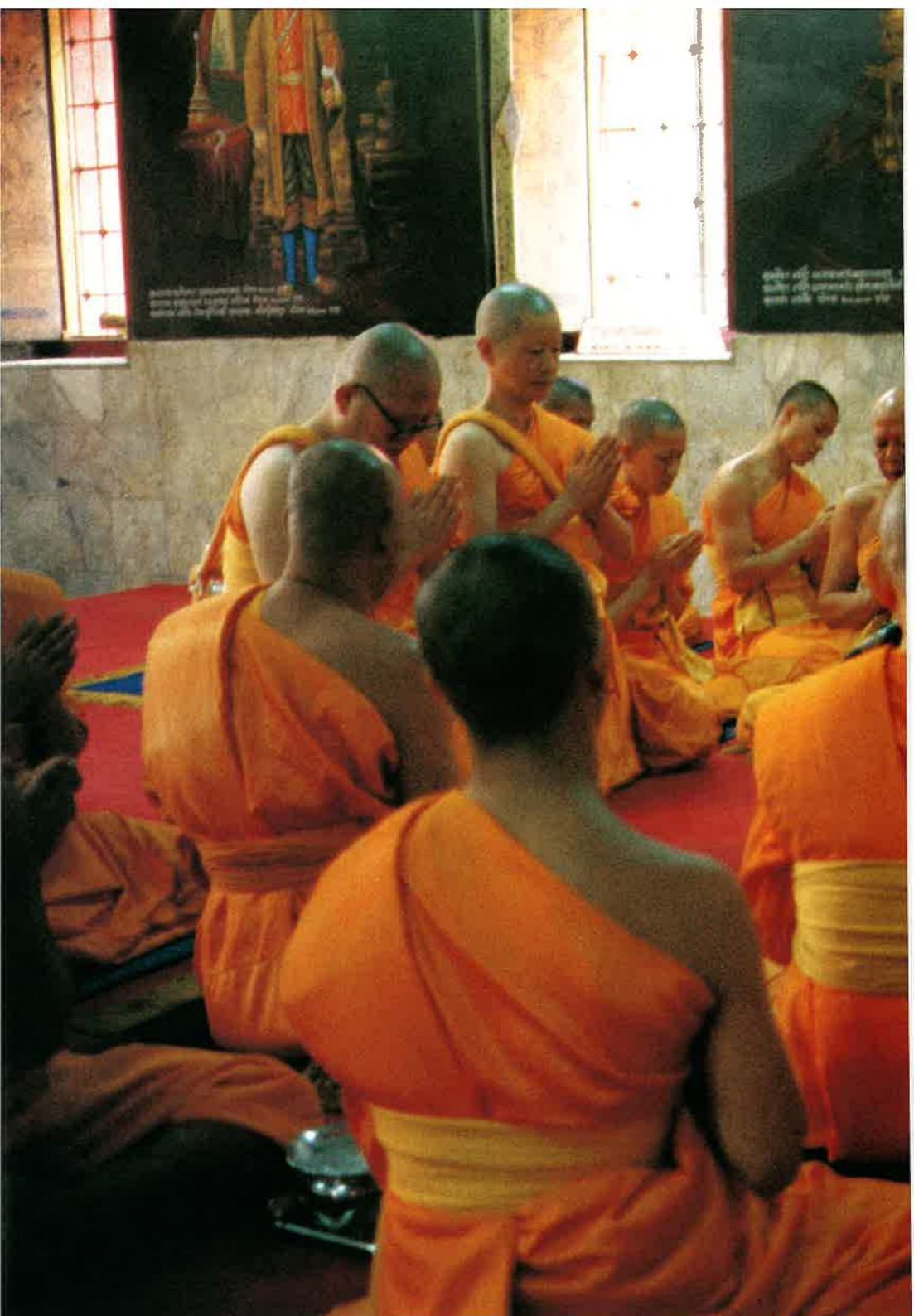
この趣意書を提出するに至った経緯はという

と、当時、日・タイ協会が旧日本人町博物館を建設する予定で、黒田方丈も協力を求められたのだったが、博物館もさることながら、供養のためお墓を造ることを忘れてはなるまいとの宗教者としての意見を述べたことに由来するものである。

ところがその後、当初の計画は大幅に修正され、日本政府から九億九千九百万円（約一億七千万バーツ）の無償援助があったので、日・タイ両政府の合意により「アユタヤ歴史研究センター」が設立されることとなり、本館はアユタヤ市ローチャナ通りに、別館は旧日本人町跡に建てられた。

足を運んでみると、一昨年十一月に行った時とはすっかり変って、実によく整備されていた。そしてまた、山田長政はこの地で亡くなった人ではないし、日本人全部の供養塔ならともかくもと建墓にはきわめて消極的だったので、今後別の形で何か協力要請があればともかくも、建墓の件はこれで打ち切り、水に流すことにしてチャオプラヤ川を舟でバンコクに下った。（終）





ประกาศ

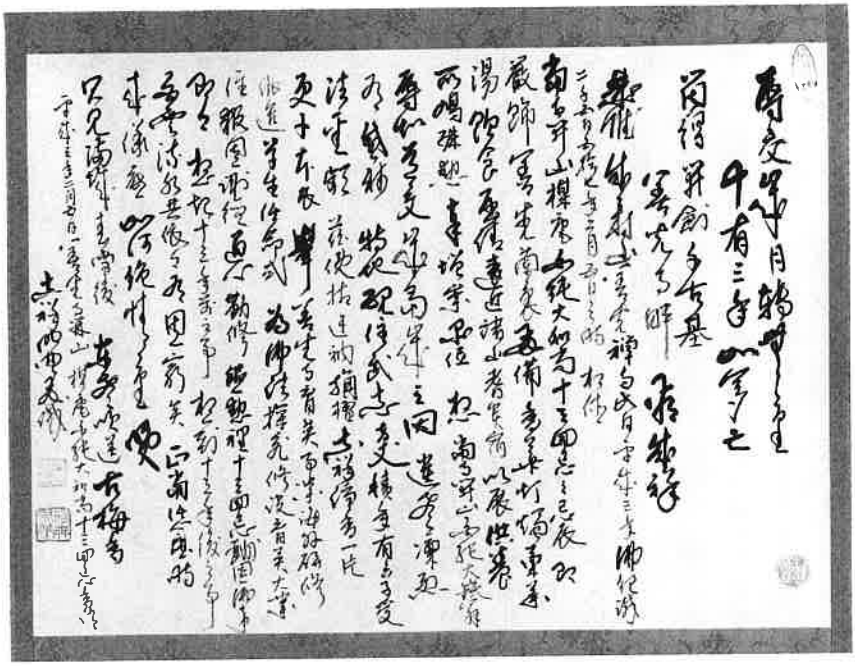
■開山十三回忌を厳修■

去る二月五日午後二時から、開山・楳庵白純大和尚の十三回忌法要が東京・本駒込の吉祥寺・岩本昭典老師の導師により厳修された。

開山の楳庵白純大和尚は黒田方丈の師父。白純和尚は大本山総持寺の副監院、曹洞宗審事院長、全日本仏教会事務総長などの要職を歴任し、昭和五十四年二月四日に遷化した。導師を勤めた岩本老師は、白純和尚が総持寺顧問会長の頃に総持寺貫首だった故・岩本勝俊禅師の資子であり、全日仏事務局で白純和尚の下で働いたなどの縁がある。

法要後、岩本老師は「数年ぶりに当山に足を運び、焼香させていただいた。感動多き法要だった」と語り、「白純老師は、お会いするうちにす

中央・岩本昭典老師



つかり黒田ファンになるという大きなお徳を備え、一見、芒洋とした風貌の中にも細かい心遣いのある方だった。雄弁ではないが、訥々とした中に仏法の法力に与るようなお話ぶりだった」など白純和尚との出会いや全日仏時代の逸話を披露して往時を偲んだ。

本寺の栃木県大田原市・光真寺住職黒田俊雄老師は「黒田方丈は住職二十二年になる。無一物中無尽蔵を実践し、無尽蔵の花を咲かせた。これもご開山のお力と思う」と挨拶。法要後の供養の席で、黒田方丈は「本日は本当に身内の方と平素お世話になっている方だけをお招きした」と参列者に感謝の言葉を述べた。

上は岩本昭典老師御揮毫の香語を表装したもの

育英生辞令伝達式

「地の塩」「一粒の麦」に…と激励

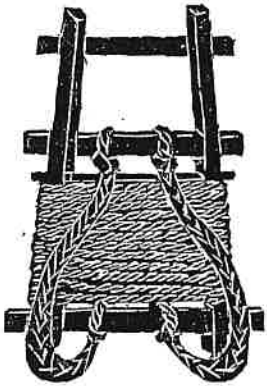
第七回育英生七人に対する辞令伝達式が去る二月五日、開山十三回忌法要に先立ち釈迦殿で行われた。育英会理事長である黒田方丈の導師で仏祖諷経が営まれた後、宮本延雄理事が新しく決定した育英生五人と、継続採用となった二人の計七人を発表。黒田理事長から一人一人に辞令と育英金が手渡された。

佐藤俊明常任理事は経過報告の中で、語学(日本語)が充分でないために選考から落ちた者がいたことに触れて、「この育英会はもとより国際的な視野に立っているが、一カ寺の事業である

ため、語学の障壁を越えて行うほどにはまだ成長していない」と説明。これまでにアメリカ、タイ、インド、スリランカ、イギリス、フランス、韓国、オランダ、日本の九カ国に三十四人を派遣したと報告した。

この後、育英生への激励を込めて、駒沢大学の鈴木格禅教授が「この事業は、自分の領域にとどまる学問その他の研修だけでなく、人類が今まで継続してきた文化を民族、国境の枠を超えて未来につなげていこうとする誓願が底に力強くあるように思う。従って、それぞれの研鑽を自分の手柄とせず、地の塩としてそれを未来につなげていただきたい。それが皆さんの一番大事な任務であり、当山の黒田老師はじめ多くの方々の願いであるに違いない」と述べた。

また、育英会顧問の伊藤喜三郎総代は「宗教にはいろんな派閥があるが、この事業は宗派に拘わらず立派な人を海外に派遣するという素晴らしいもの。一粒の麦が地球のあちこちに散らばれば、すごい力になる」と激励した。



白純大和尚さま

――思い出を語る――

ナリス化粧品　東郷　敏

いまさらながら、白純大々和尚さまの御偉業、御遺徳を偲んでおります。私は大圓御和尚さまをして、三十年も前にはじめて御目にかかりました。

総持寺や永平寺で御坊さんの恐しさは身にしみておりましたから、黒田先生の御父さんだから、とても偉いし、コワイのだと、観念的に思い込んでおりました。白純大々和尚さまは、型破りのジョークとユーモアを混じえながら、アッという間に、私に慈父の想いを抱かせ「仕様もない武志を東郷先生よろしく頼みます。親、子共に貧乏です。」と、とても信じられない様な低く、やさしいおことばから、あの偉大な子づくり人づくり、寺づくりの名人のかけらが少しも感じられないあの素晴しい溢れる御人柄は、忘れることが出来ません。

それから、間もなく、開基と伊藤喜三郎先生の御媒酌で黒田先生と、倫子さまの御結婚式が岩本猊下式師により、駒込の名刹吉祥寺でとり行われ、披露の宴が品川迎賓館でとり行われま

東郷　敏 氏

した。この宴の歴史的大事業の進行と司会を黒田先生の命により私がさせていただきました。

永平寺、総持寺の管長さまは勿論のこと、日本仏教会の元帥と大将クラスの方々ばかり、たくさんのご臨席があり、黒田家と加藤家の御立派な御家柄と佛教界における大きな存在感をはじめて知って、ふるえて驚くには、あまりにも、遅すぎた、自分を忘れることが出来ません。

時に、白純大々和尚さまの、御挨拶に、六波羅蜜の行に燃えた当時のご自分の生い立ちと青春を、鼻をすすり、涙ながら、諄々と語り尽してくださいました。まことに、慈父の輝ける御姿。

精一杯の母が、自分の着物を解き、色抜きして、躰の弱かった自分に、充分入れる綿にも事欠き、貧乏の中でワタ入れでなく、ワラ（藁）入れの丹前を届けてくださったわが母の犠牲と、思いとそのぬくもりで、乗り越えた苦しい修行の時代。今日あるは、親の御蔭。ご苦労の中でまたご自分も七名の子を育て、人を育て、寺を育て、自らに行を尽し、唯々精一杯救済事業と孝を尽しながら、国づくりの遠大な理念と理想を御話しくださったこと、いつまでも鮮明に忘れることが出来ません。いままた、子を想い、わが父母に遠く思いを致し、切々と述べられる大々和尚さま、そのときの感動は、表現できません。

そして申されるには、御臨席の皆様方に伏して。敢えて。述べて。尽して。御礼を申し上げます。この武志、私に似て求めての苦労人、とても、僧侶になるとは、親の目からは見えなかったが、到頭、横浜に善光寺を興してしまいました。この伜武志は私のタマシイを開いてくれました。五男坊で、御難続きではありますが『どうぞ、せがれ武志と倫子さんをコレカラモよろしく』と絶句されたことを、忘れることが出来ません。

やっぱり、大圓和尚さまは、お父さんの御意志を見事に継いでしまわれた様です。

私も、わが子十二歳にして失いました。どん底でした。その時、黒田先生が白純大々和尚ご夫妻さまと、大阪の私のあばら家に御尋ねくださいました。私の手をにぎり、東郷さん、辛いことです。負けてはなりません。子供さんはキット、御ほとけさまに救われて、召されて逝かれたのです。会者定離、どうぞ負けないで、がんばってください。

この輝ける力強いおことば、この説得力、まさしく体験者のみが伝えられる御ほとけさまの声。まさに『同事』。アッという間に私共をどん底から、救い上げ、とらわれの心から解き放ってくださった、白純大々和尚さま。この子は余名三ケ月といわれた命を、善光寺の延命地蔵尊に守られて、七年もの命をいただきました。

この力こそ白純大々和尚さまをして、大圓和尚に引き継がれ、遠大な理念のもとに、さらに青少年の教化、檀家への誠心誠意の布教活動、世界への留学制度等数えきれず、ご開山白純大々和尚さまをして、善光寺のさらなる世界への力。いつでも『人のマネをせず、人にマネされない創造と救済の善光寺。未来永遠唯々洋々と発展ばかりです。

あ・り・が・と・うございます。　合掌

くらしの中で読む『正法眼蔵』

王索仙陀婆の巻　その六

成興寺住職　小倉玄照

仏法をみきわめると

世尊一日陞座、文殊白槌して云く、
「諦観法王法法王法如是」
世尊下座す。
雪竇山明覚禅師重顕云く、
「列聖の叢中作者知る。
法王の法令かくの如くならず
衆中もし仙陀の客あらば
何ぞ必ずしも文殊一槌を下さん」

しかあれば、雪竇道は、一槌もし渾身無孔ならんがごとくば、下了未下、ともに脱落無孔ならん。もしかくのごとくならんは、一槌すなはち仙陀婆なり。すでに恁歴人ならん、これ列聖一叢仙陀客なり。このゆゑに、法王法如是なり。使得十二時、これ仙陀婆なり。被十二時使、これ索仙陀婆なり。索拳頭、奉拳頭すべし。索払子、奉払子すべし。

しかあれども、いま大宋国の諸山にある長老と称するともがら、仙陀婆すべて夢也未見在な

り。苦哉苦哉、祖道陵夷なり。苦学おこたらざれ、仏祖の命脈まさに嗣続すべし。たとへば、如何是仏といふがごとき、即心是仏と道取する、その宗旨いかん。これ仙陀婆にあらざんや。即心是仏といふは、たれといふぞと審細に参究すべし。たれかしらん、仙陀婆の築著磕著なることを。

正法眼蔵　王索仙陀婆

爾時、寛元三年十月二十二日、越州大仏寺に在りて示衆。

〈現代語私訳〉

ある日、世尊は高座にのぼって説法を始めようとされた。文殊菩薩は、高座の下で槌をカチリと打って聴衆たちに告げて言った。

「法王（世尊）の法をよくよくみすえてみよ。法王の法は、このようなものである」

そこで世尊は、黙って高座をくだられた。

（ずっと時代が下って）雪竇山の明覚禅師重顕（九八〇―一〇五二）は、この話に関して云った。

「居並ぶ八万四千の聴衆は、道場の法式作法を定めた者のことを知っている。法王の法を伝えるありようはこのようなものではない。衆の中にもし勘の鋭い、いわゆる仙陀の客がいたならば、文殊ももしかすると槌をカチリと打たなかったかもしれぬ」

そういうわけだから、雪竇のことばは、下した一槌が、もし完全無欠であってそのまま法を具現しているとすれば、槌を下そうが下すまいが、実はそんなことにこだわる必要はさらさらないのだ、と言っているのである。もしそうだとすれば、カチリと下した一槌が、実は仙陀婆なのである。すでにそのように一槌から自在に法を受けとめられる人であったなら、これは居並ぶ八万四千の聴衆がことごとく仙陀婆の客だ

ということになる。だからして、「法王の法は、このようなものだ」ということになる。一昼夜二十四時間を生きるということは、「仙陀婆を索(もと)める」ということのほかではない。無意識下に二十四時間を生かされているのも、やはり「仙陀婆を索める」ことである。指導者が拳頭(げんこつ)をふるう時には、弟子はちゃんとそれに応えねばならぬ。払子(ほっす)で指導をしようとしているときには、弟子はそれに応じねばならぬ。

しかしながら、いま大宋国の諸山で長老と称して指導者づらをしている連中は、仙陀婆ということについて夢にすら見たことはないらしい。苦々しいことであって、仏法の実践は地におちてしまったと言ってよかろう。厳しく身をせめてつとめねばならぬ。仏祖のいのちは、横着に身を任せていては伝えられぬ。そのことをたとえて言えば、「いかなるか是れ仏」と問いかけられると「すなわち心これ仏」と答えたりするのだが、その真意がよく通じているかどうか。実は、これは仙陀婆の問題なのではないか。「すなわち心がこれ仏」という場合、いったいその仏はどこにいるか、そのことを臍(ほぞ)おちすべく身も心もうち込んで究めねばならぬのである。もうすでにお気づきだろう、それは師と弟子とがたがいに真剣に仙陀婆をぶっつけあうことにつきるのである。

正法眼蔵　王索仙陀婆

このとき、寛元三年（一二四五）十月二十二日、越州大仏寺に在りて衆に示す。

人間生活と儀式

他の動物と人間とを比較してその特質をことあげすれば、視点の相違によっていろいろと言えそうです。私は、その一つに、「セレモニー（儀式）がなくては生きていけない動物が人間である」という言い方を加えても面白いのではない

かと思っています。集団で社会生活を営む時に、その成員を統合して行くためには、儀式が必須不可欠なものとなるのでしょう。

もちろん、多勢の修行者たちが寝食を共にして生活する叢林に於ても、儀式は昔から大事にされて来ました。師家（指導者）が、仏法の何たるかを修行者たちに語る場合も、一定の型に従って、いうなればセレモニーの中でそれをしました。

例えば、禅門の公案も、そういうセレモニーの中で師家が仏法の極意を語るための必要性から生まれたものではあるまいか、と私はうがってみたくなります。あながちにそれが間違いとも言い切れぬところがあるのです。

さて、この段の冒頭に引用された「世尊陞座」の公案も、そういう背景を念頭に置いて拝読した方がよくわかるはずです。これは、『碧巌録』第九十二則が出典。（『従容録』の第一則も「世尊陞座」で、本則はまったく同じですが、『碧巌録』の雪竇の頌を万松老人が批評するかたちになっています。）

住持が公式の説法をするときには、法堂の須弥壇に登ります。高座から説法をするのです。住持が高座に登り、いよいよ説法を開始しようとするときには、高座の下で今流に言えば司会者役の僧が、砧という堅木を八角形に削った高さ三・四尺の台をやはり堅木で作った槌でカチリと打ちます。釈尊が説法をするこの場では、文殊がその役をつとめています。

また、説法が終ったときには、槌を打って説法開始を告げた人が、「諦観法王法、法王法如是」と宣言して説法の終結を宣言します。これはセレモニーとして様式化されているのです。

儀式のおとし穴

ところで、儀式というものは、集団を統率す

るはたらきは大きいのですが、一方では、個性的な思考や行動を抑制もします。道元禅師は、『永平大清規』の「弁道法」の中で、

「群を抜くも益なく、衆に違しては儀なし」

ということを仰せになっています。これはかたちとか儀式を重視する叢林（禅の道場）の修行に於て堕し易い欠陥を明確にしながらそこでの修行の要点を巧みに表現しています。

一般には、このことばは、とにかくみんなと一緒にやるように、一人だけ群を抜く修行をやっても駄目なのだ、というふうに解釈されています。しかし、私は、もうかれこれ十年以上も前のことですが、永平寺に身を投じて修行生活をしながら、そういうやみくもにみんなと一緒に歩調を合わす修行のやり方を道元禅師は決してよしとはされなかったのではないかという疑問を抱きました。なぜなら、横着本性の人間は、とかくすると楽な方へ楽な方へと堕して行くからです。

四九日（四と九のつく日）は、「夜坐各寮」と言って、夜の坐禅は銘々の部屋でつとめなさい、ということになっています。そんなとき、殆どの雲水は、各寮で本を読んだり、お茶を飲んだり、仕事をしたりしています。真面目に坐禅をしている雲水は、五指に満たないほどです。「夜坐各寮」の夜は、夜坐を休むのが「群」ですが、それに調子を合わせてしまっては、修行道場の質は低下してしまいます。やはり、たった一人でも僧堂で黙々と坐る「抜群」の人に畏敬の念を抱くべきなのです。「抜群」の修行をしても何の利益もないのです。しかし、仏道修行は決して利益を求めてするものではないのですから「無益」を覚悟で「抜群」の修行をつとめなければならない、と私は思うのです。

そして後半の句「衆に違しては儀なし」という注意がまた心にくいと思います。「抜群」を奨

励すると、とかくすると周辺の人間と不協和音を発し易いのですが、それでは駄目だ、とクギをさされているのです。抜群の修行をつとめながら、雲水仲間とはちゃんと調和がとれた生活を送っている—これが道元禅師の理想とする修行のありようなのです。

マンネリの打破

儀式とかセレモニーとかを重視する生活になずむ時に生じやすい体制順応的な心の弛緩をどう克服したらよいかという点について、このお示しは示唆に富んでいます。儀式の流れに身を任しながら、常に初心にかえった緊張感を持続していなければならないということです。

世尊の説法を聴く大衆に、体制順応的というか、堕性的というか、ある種の倦怠を文殊菩薩は感じられたのでしょう。世尊の説法に感応道交して、自らの生きざまをさらに仏道に親しいものに昇化して行こうというような気迫がその場に希薄なことを問題視し、その打開の方法として、世尊が今や説法を始めんとするその刹那に、説法終了の宣刻をしてしまったのです。

さぞかし、世尊もギクリとされたことでしょう。思いもかけぬ文殊菩薩の鋭い一声に、世尊はしかし文殊の意図を素早く感知されました。間髪を入れない対応です。まるであらかじめ打ち合わせしていたかのような見事さです。まさに仙陀婆はかくあるべしといってもよいでしょう。

世尊と文殊の火花の散るような鋭い勘と勘の対応ぶりにハッと胸を打たれた大衆がはたして何人いたか。動静は大衆に一如する生活をしながら、内に抜群の志気を秘めた道心の堅い人間でなければ、それは不可能なことなのです。（この項つづく）

講演

激動する世界の旅

ニューヨーク州立大学政治学教授　伊藤　博

一、はしがき

平成二年八月二日、我々夫婦は南アフリカ連邦でイラクのクウェート侵入侵略のニュースを聴き、唖然としました。実は今回の世界一周旅行の案を練っている時、最も有力だったプランは、ニューヨーク→パリ→カイロ→クウェート→カラチ→バンコック→日本で、しかもクウェートからイラクの国境の町バズラまでバスで行くことも真剣に考えておりました。このプランに沿って飛行機とホテルの予約もほぼ完了したのが、三月中旬でした。ところがある日突然カイロ・バンコック間の予定していた航空会社が、この区間の運行を中止したことが解りましたので、急きょ予定を全面的に変え、今回の経路になりました。従ってイラクのクウェート侵略、それに伴う人質のニュースを聴いた時、八月初旬にクウェートに行く予定だったので、もし、前の旅行プランに従っていたら、我々も人質になっていたと思うと冷や汗が出ました。

激動する世界を旅しますと、予想しない危険に出会う可能性がいつもあるわけですが、今回の旅行は色々の観点から、激動の一端を垣間見ることができました。今回は西欧十四カ国、東欧二カ国、アフリカ三カ国、それにオーストラリア、南太平洋（パプアニューギニア、フィジ島）それに韓国とメキシコを旅しました。

先ず第一に、この一・二年の間に目まぐるしく変わった世界情勢は、東西陣営の緊張緩和と、更に混乱し続ける中近東の転回です。ゴルバチョフのペレストロイカやグラスノスチで象徴される予想できなかったソ連の自由化、それによって引き起こされた東側衛星諸国の社会主義、共産主義の放棄、東西ドイツ統一の実現、そして急速に近づくヨーロッパ共同体のより強大なブロック化、軍事面ではソ連圏の軍事同盟であるワルシャワ条約の崩壊があります。これらの発展はいずれも世界国際関係の緊張緩和と平和共存への一歩前進であることは明らかです。政治イデオロギー、特にマルクス・レーニン主義とか、社会主義が後退し、経済的イデオロギー、特に自由市場や個人企業の、より一層の抬頭というような変化が見られます。また中近東に於ては長年のアラブ・イスラエル間の紛争の外に、石油経済を中心とした経済摩擦が始まっており、その一端として今回の湾岸紛争が始まり、更にアメリカを中心とした多国籍軍の動員により、世界全体の紛争にまで発展し、その直接の影響として、なまなましい湾岸戦争というような問題が生じました。これ等の新しい、しかも目まぐるしい出来事が、私達の訪れた国にも色々な形で現れておりました。

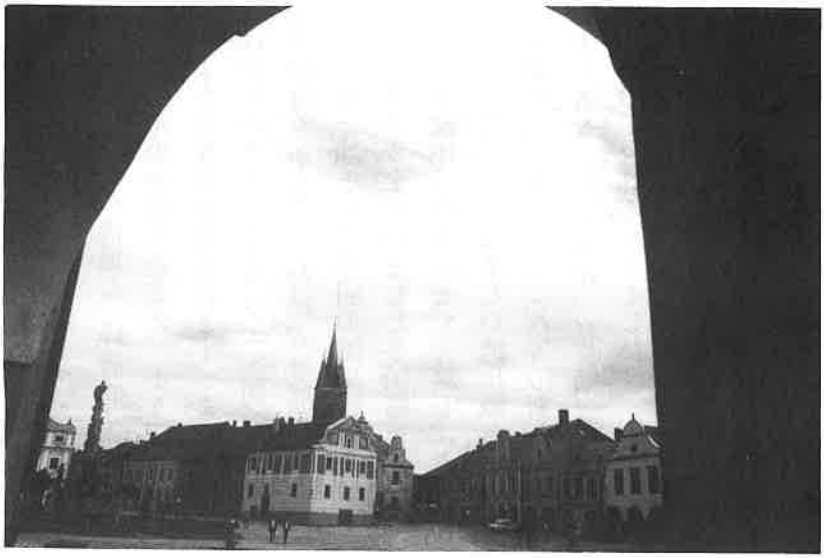
二、東欧・チェコスロバキヤとポーランド

ヨーロッパ十六カ国は、すべてレンタカーで旅をしました。ドイツのミュンヘン空港で既に

予約していた車を借り、オーストリー経由でチェコスロバキヤを縦断し、目的地のポーランドの古都クラコーに向いました。

クラコーと言えば、今のローマ法王ジョン・ポールが、以前大主教を努めていた古い壮大な教会とお城のある町ですが、日本の京都を思わせるような所です。教会は今回の民主主義運動の担い手になっており、一般市民の教会への愛着心は最近特に増えております。以前にもソ連をはじめ東欧に行ったことがありますので、比較してしまうわけですが、今回は町で出会う一般市民の明るさと生き生きとした顔を見るのは、我々の想像だけではないと思います。その反面、今まで表に現れなかった生活難や公害問題が著しく目につきました。道を走る車の数は極度に少ないにも拘らず、自動車、バス、トラックから出る排気ガスは想像以上にひどく、我々の車は冷房のない車だったので、窓を開け

チェコスロバキヤ中世紀の町テルチェの広場



て走っていても他の車が近づいて来ると、慌てて窓を閉める作業を頻繁に繰り返すほどでした。もし間に合わないと、真っ黒な排気ガスを直接吸うことになり、息苦しくなります。更に車の窓から見える工場や火力発電所、それにホテルの煙突から、もくもくと黒い煙が出ていました。マスコミで報道されているように、色々な物資不足も目立ち、ホテルやレストランで食べる食事も種類が限られます。物価は比較的安いわけですが、収入が非常に少ないので、一般市民の生活はとても苦しいことが容易に推察できます。それにも拘らず、一般の表情は明るく、混乱と困難の中にも明日への希望が明らかに読み取れました。もしペレストロイカやグラスノスチがなかったら、これ等の国々は救いようのない程までに陥っていたのではないでしょうか。

三、南アフリカ連邦、ズィンバブエ、およびザンビア

ロンドンから赤道を越えて十時間ほど飛び、南アのヨハネスブルグに着きました。着いた時の第一印象は、黒人も白人も観光客にとても丁寧で親切なことでした。南ア連邦に行った大きな動機は人種隔離政策（アパルトハイト）を実地に見ることでした。南アに対しては、行く前から否定的な態度を持っていたので、この第一印象は意外なものでした。少なくとも表面的には良識ある感受性の高い黒人にも白人にも会うことができました。しかし、現状を見るためにバスでヨハネスブルグの南西にある黒人大部落スウェートーに行きましたが、ここに数百万の黒人が住んでいます。南半球は、我々の行った八月は真冬ですので朝晩冷え込み、石炭が唯一の暖房で、掘立小屋の仮煙突から出るこの石炭の煙は想像を絶するほどで、十メートル離れた

相手の顔が薄ボンヤリとしか見えない有様でした。人種隔離政策は黒人を低賃金の肉体労働者に追い込み、貧しい生活に追い込んでいるわけですが、政治の表で行われている、デ・クラーク政府とネルソン・マンデラの率いるアフリカ国民議会（ＡＮＣ）との交渉や白人と黒人との武力抗争は、遅かれ早かれ白人独裁政治に終止符を打ち、黒人を中心とした多数決に基づいた政治に取って変わるのは、半ば必然的です。しかし既に黒人の中には中小企業の経営者も出てきており、医師や弁護士のような専門職が抬頭し、黒人の間にも中産階級が出てきており、立派な家を建てている人もいます。

南アはアフリカ大陸で一番経済力の強い国ですが、これは黒人の労働力に基づいた白人の資本と技術がもたらしたものです。南アの民主化にとって、人口の八〇パーセントも占める黒人の社会的自由が第一の目標ですが、白人の既得

南アフリカ連邦の黒人部落スウェトーの貧民街
（暖房の石炭で息ができない位）

ビクトリアの滝

権と資本および経営能力をいかに国内に止めるかが、国の発展のために重大な関心事になっております。隣のズィンバブエにも行きましたが、この国は元、ローデシヤと呼ばれ、少数の白人がやはり多数の黒人を支配していましたが、今は黒人の政府が国を治めています。黒人の政治的独立は白人資本の流出を招き、国の経済力が著しく落ちました。この様な前例があるので、いかに黒人の自由および多数決と白人の経済的既得権を調和するかが南アの将来を決する一番の問題です。天然資源の豊かな南ア連邦やズィンバブエ等が将来、産業化、工業化することにより、他のアフリカ諸国の近代化の原動力になると言われています。

ズィンバブエとザンビアはビクトリアの滝を挟んだ国ですが、想像したようにとても貧しい国です。農業が主な産業ですが、色々な伝統的、宗教的な制限があり、生産性の向上を阻んでお

ります。それでも人々の表情は比較的明るく、人間は最小限度の物があれば、どこででも生きていけるものだとつくづく感心しました。

アフリカに行ったもう一つの理由は、サファリに行き、野生の動物がいかに生きているかを見ることでした。南アで一番大きなクルーガ国立公園に行きました。強大な土地を動物保護区に設定し、密猟者の侵入を防ぐために囲いの柵を回らしています。公園の中には無数の野生の動物や鳥がおり、草食動物を餌食とする肉食動物（ライオン、豹、チータ等）が弱肉強食の自然の法則に従って生きている光景は圧巻でした。ここで問題となるのは、密猟者たちが経済的利益のために野生の動物を不当に殺して、動物たちの自然のバランスを崩していることです。幸い我々の行ったクルーガ国立公園は、この点恵まれておりましたが、他のアフリカ諸国では現状はかなり緊迫しております。

四、オーストラリアの原住民

アフリカ大陸を後にして八時間ほどインド洋を飛んで着いた西オーストラリアの町パースはお伽の国のようです。目に映る物が全て、アフリカの物と対照的で、清潔できれいに見えました。しかしそのようなオーストラリアにも歴史的な矛盾が根底に見受けられます。日本のアイヌのようにオーストラリアの北部に追いやられ、国からの生活保護で居留地に住んでいる原住民に対する差別待遇を白人が反省しはじめています。職業訓練や普通教育を増やし、就職の機会を与え、更には原住民の文化を白人の間に紹介しようとする静かなブームが起っています。

第二次大戦後オーストラリアは南太平洋の島々を国連の信託統治領として治めてきましたが、最近のオーストラリアの経済の低迷は、戦後独立した南太平洋の島国に対するオーストラ

リアの影響を少しづつ弱めてきています。このことが顕著に見られたのは、次の我々の訪問国パプア・ニューギニアです。

五、パプア・ニューギニアとフィジ島

パプア・ニューギニアは七百以上の部族からなる南太平洋の発展途上国です。首都ポートモーリスビィを初めとする海岸沿いの都市や、山岳地帯、それに山の中を流れる大河の流域にある部落を訪ねました。この国が初めて世界に紹介されたのは十九世紀の終りですが、山岳部族に関しては、初めての白人との接触は第二次大戦後のことでした。石器時代の生活様式をしていた現地人にとって、白人の宣教師や鉱山師の到来、しかも飛行機での到来は、大きな驚きであったようです。彼等は白人を見て、彼等原住民の祖先が神の化身となって戻って来たと信じたそうです。今でも原住民は原始的な生活をし、

パプア・ニューギニアの高地民族の踊

自然宗教を信じています。彼等にとって、ヨーロッパや中近東での激変は月の上で起こっている事柄のように無関係でしょう。しかし彼等なりに他の社会との関係を理解しようとしています。宣教師が来る前は、部族間の争いは往々に弓と矢の戦いで解決され、多くの犠牲者を出していましたが、教会が建てられ、布教活動が始まると部族間の争いも平和的に解決されるようになりました。同様に南太平洋のフィジ島では、人間の肉を食べる習慣が長くありましたが、これもキリスト教会の教えにより地元民の食生活を変えました。我々が訪れた発展途上国では、キリスト教と原始宗教が共存しておりますが、キリスト教は大々的に教育や福祉事業にも携わり、最近では営利的商業活動にも関与しているそうです。

隣の韓国も含めて東南アジアや南太平洋諸国に於るキリスト教会の布教活動は目を見張るものがありましたが、それとは対照的に仏教の布教活動がほとんど見当りませんでした。その意味でも当寺海外留学僧派遣育英制度がお坊さん自身の修養と共に海外での布教活動に参加させるものであり、大いに有意義な事と思います。特に今までの布教が西洋から東洋に向けて行われていることを考えると、宗教文化の交流の観点からも逆に東洋から西洋へ、又、東洋の内部での相互布教活動が一層活発になるのが望ましいと考えます。

発展途上国の人達は押し寄せる物質文明と近代化の波に懸命に乗ろうとしています。しかしそれが原住民の望みを変え、新しい問題を起こしています。南太平洋の酋長が嘆いています。昔は島民が魚釣りに行ったり椰子の実を集めに行った時は皆、酋長の所に持ってきたそうです。それを酋長が公平に配分し、平和を保ったわけです。しかし最近はラジオや自転車、それにき

れいな衣類が市場に出回ってきて、島民はそれを欲しさに収穫物を商人の所に持って行き、何がしの現金に換えてしまい、酋長の所には持って来なくなったそうです。その結果、老人や子供達の中には食物に困っている人が出て来ました。又、パプア・ニューギニアでは今までさつまいもと時折、大切に育てた豚を食べていた原住民が、最近はオーストラリアから輸入された白米と東南アジア製の缶詰の魚を食べるのを大変な御馳走とみなすようになってきたそうです。しかし島民の七割り以上が未だに貨幣経済に参加していないので、米と缶詰を買うことは高価なことのようです。

ニューギニアの伝統的社会では個人の地位は、その人がどれだけ富を持っているかではなくて、どれだけ他人に施すかによって決まるそうです。この伝統は今でも見られ、例えば政府の閣僚の中には、給料を全部大家族の長に渡してしまう人がいるそうです。同様に豚を一番貴重な富と見ている社会ですので、村の祭りや冠婚葬祭に一頭五万円から十万円もする豚を何頭寄附するかが、一大関心事だそうです。しかし貨幣経済が始まっている都会では、職を求めて出てくる若者と都会の中産階級との摩擦が生じ、施しの精神を失った中産階級の家に強盗が押し入り治安も乱れている所もあるそうです。私達が居る間にも戒厳令の施かれている場所がいくつかありましたし、パプア・ニューギニアの唯一の日本料理店は、既に七回も強盗に入られたそうです。

政治的にも大きな変化が起こっております。数年前ブーゲンビル等で地元民が白人の所有している金鉱山で暴動を起こしましたが、理由は地元の天然資源の搾取と地元への経済的利益の還元がほとんどないことに地元民が怒りを発したからです。

六、まとめ

東西を問わず世界の各地で激動が起こっていますが、今回の旅で各地域が異った発展段階を経ているということを強く感じました。南ア人種差別もアメリカ合衆国では程度の差こそあれ一九五〇年代まで行われており、百年前は奴隷制度もあったわけです。日本も百年前は封建制度を出て近代国家として第一歩を踏み出したばかりでした。現在発展途上国は人口過剰、資本不足、富の分配不平等、それに治安の不安定等の問題を抱えて社会経済体制を発展させようと努力しています。異った文化を持ち、異った発展段階に居る国々を同じ尺度で計ることはできませんし、特に利害関係が対立している国際関係では紛争の糾明も難かしくなります。世界の出来事を我々一人一人が内面化（Internalize）して自分との関係に於て捕え、自分にとってどのような意味があるかを考える時、複雑な国際情勢が少しでも理解できるように思います。湾岸戦争にも拘らず、世界は明るい安定した方向に向っていると感じます。

（平成二年十一月二十五日に行った善光寺文化講演会の話をまとめました。）

インド留学記

その6

日常の日々 (2)

大沢学岩教授
金助島

インドにおける古典学の将来

日本人の私から見れば、インド人の学生は英語もサンスクリット語も私とは比較にならないほどよくできるように思えたのだが、年配の先生がたはよく「今の学生は英語力もサンスクリットの力も昔とは比べものにならないほど低下している」と嘆いていた。あれでできないと言われるのなら、私は一体どうなるのだろうと驚いて尋ねてみると、次のようなことが分かった。

まず、英語の力であるが、第二次世界大戦後イギリスの植民地から独立したインドは、イギリスの言葉である英語からインドの言葉であるヒンディー語（主に北インドで用いられているアーリア系の言葉）を国語に近い形の全国に通用する言葉にしようとして、ヒンディー語の教育に力を入れた。それはもちろん、特に南インドのドラヴィダ語系を母語とする人たちの強い反発を受けたわけであるが、現在では、私の留学地プーナを例にとれば、小学一年から母語で

あるマラーティー語の授業があり、小学五年からヒインディー語を第二言語として学習し、中学一年から英語を第三言語として学習するという教育システムになっている。その結果、戦後の英語教育を受けた人たちは、たとえば英語で行われている授業のノートを母語であるマラーティー語でとるという例にも見られるように、イギリス植民地時代に英語教育を受けた人たちほどには英語ができない。プーナ大学のサンスクリット学科でも、三〇代の先生が五〇代の先生に論文の英語をチェックしてもらっているという光景は珍しいものではなかった。

一方、サンスクリット語教育のほうは、英語よりももっと悲惨な運命をたどった。昔は、パンディット（学僧）と呼ばれる人がいて、サンスクリット語で書かれた宗教文献をサンスクリット語を通して教授・学習するというような形の伝統的な教育機関が数多く存在していた。しかし、現在では、サンスクリット・カレッジと呼ばれるごく少数の教育機関を除いて、このような形の伝統的な教育システムはあまり残っていない。さらに、中等教育でのサンスクリット語の位置は、プーナではヒンディー語との選択科目とされており、現在用いられているヒンディー語とは違って今ではほとんどだれも喋る人のいない古典語であるサンスクリット語を選択しようなどという変わり者は数少ない。そうなると、中学・高校（Secondary School）ではサンスクリット語の先生はあまり必要なくなってくる。とすれば、大学や大学院でサンスクリット語を学んでも、大学に残って研究者になる以外には職がないということになってくる。一つにはそんなわけで、サンスクリット語を学習してサンスクリット語で書かれた古典を読んで研究しようという人は減っていくことになったのである。

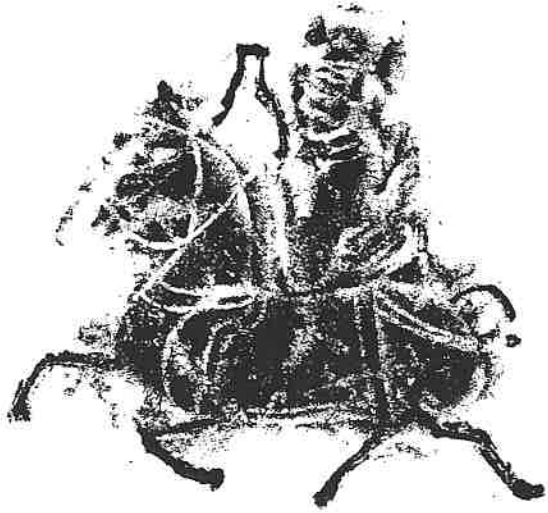
さらに、近代化・工業化を押し進めている国インドにとってまず重要なのは、それに役立つ学問を収めた人たちである。法学部や工学部や医学部に行って、官僚やエンジニアや医者になったほうがなんといっても実入りが多い。サンスクリット語を学んで古典を研究したところで金にはならない。日本のように何をやってもなんとか食っていけるような国なら、古典を研究して優雅に暮らすというのもリッチだけれど、インドには食えない人がたくさんいるわけだし、大学や大学院までいける人たちというのが全体から見れば数少ないのだから、法学部や工学部や医学部に行ってまず経済的に豊かに暮らせるようにと考えるほうが理にかなっているというわけだ。そんなわけで、優秀な学生はまず法学部や工学部や医学部を目指すことになる。もちろん例外はどこにでもあるわけだけれど、優秀な学生がサンスクリット学科に来る割合は一般的に言って極めて低いということになる。そのせいであろう。私の先生の一人（当時四〇歳位）が嘆いていた。「私の学生のころはこの本一冊（『ブラフマ・スートラ・シャンカラ註』全五百頁程度、金倉円照訳『シャンカラの哲学上・下』春秋社刊で全一一四五頁）が一年の期末試験の一科目分の試験範囲だった。今ではその三分の一が試験範囲なんだよ」と。また、マンジュールさん（インド古典研究の由緒ある研究所であるバンダルカル東洋学研究所の図書館員）が冗談めかして悲しそうに言っていた。「インドの古典を研究しようと思ったら、そのうち、インド人がドイツに行って学んでこなければならないということになるだろうね」と。自国の古典を他国に行って学んでくる状況はとても悲しいことにちがいない。特に自国の精神文化にたいして誇りを持っているインドの人たちにとっては。しかし、現状では残念ながら、将来は

そうなりかねないと私にも思えるのである。これがいわゆる近代化というものなのであろうか？

私の個人授業

大学で修士課程の正規の授業に出たのは週二科目四コマだけだったが、それにも十分ついていけなかった。そのため別に個人授業を受けることにした。先生たちは修士課程の授業としては週に一科目二コマ教えるだけで、あとは博士課程の学生の論文指導と自分の研究の時間ということで、雑務もそれほどなく時間的には余裕がありそうだった。ただし、日本の大学のように授業と会議がない日は大学に来なくてもいいというようなことはなくて、いつでも一一時から五時までは研究室につめていなければならないとのことであった。

学科長のジョシ先生に頼んで先生を二人紹介してもらった。一人はバテさんというサンスクリット文法学が専門の美人のお姉さん（当時は研究員であったがジョシ先生退官後の現在は学科長になっている）で、もう一人はラフルカルさんであった。この人はヴェーダが専門だが授業ではヴェーダーンタを教えている五〇代なかば位



の人で、褐色のほていさんが眼鏡をかけたような見るからに人のよさそうなおじさんだった。

バテさんからは、将来的には専門のサンスクリット文法学の初歩でも習うことにしても、今のところは基礎的なサンスクリット語の能力を養成してもらうことにした。私はすでに日本で大学二年の後期から修士の一年の前期まで三年間もサンスクリット語を学んではいたのだが、なにしろ日本でのサンスクリット語の教育といえば、大学二年の後期に週二コマ、英語でいえば中学一・二年程度のテキストを使って勉強したと思ったらすぐに、三年になるとシェークスピアの作品に相当するようなものを突然読み始めるというようにレベル差が激しい。それで語学としてのサンスクリット語能力という点では、その時点ですでに落ちこぼれてしまっているという意識が私にはあったからである。そこでまず最初に、英語で言えば中学一・二年の文法の教科書に相当する『サンスクリット・マニュアル』を教えてもらった。それは練習問題が読解編と作文編に分かれており、さすがに読解編は自分でもやれたのでサンスクリットの作文を添削してもらうことにした。バテさんは当然予習などしてこない。私のほうは、三・四時間かけて四苦八苦して英語の文章をサンスクリット語に翻訳してくる。バテさんはフンフンといいながら見るまに私の作文の誤りを訂正していく。こんな日々が二・三ケ月続いた。次に、日本で大学三年のときに一部だけ読んだことのある『ナラ王物語』(ナラ王とその妻ダマヤンティーの愛の物語)を全部読むことにする。しかし、バテさんはただ読むだけでは解放してくれない。読んだ箇所の要約をサンスクリット語で書いてこいというのだ。そのときのノートはもうないが、とにかく毎日相当の時間をかけてそれをなんとかこなした。そして次は、インドのイ

ソップ物語『パンチャタントラ』（五つの物語）である。これも同じように読んだ箇所の要約をサンスクリット語で書いてこなければならないのだ。なんでこんなえらい思いをしてこんなことをやらなければならないのだろうと何度も思った。「古典語であるサンスクリット語を日常的に喋っている人なんかほとんどいないのだから読めるだけでいいではないか。なんで作文なんかやらなければならないのだろう」と。しかしそのうち分かってきた。サンスクリット語は日本の漢文や古文よりもずっと生きた言葉なのだと。バテさんは別段伝統的なサンスクリット語の教育を受けた人というわけではないのに、サンスクリット語で流暢に喋ることができた。バテさんは、年に一度学科でサンスクリット語で劇や小話をやる催しのときにはいつも、サンスクリット語で司会をしていた。また、サンスクリット劇の脚本を書いて、その劇が賞を受けたこともあった（もちろん私にはその劇の内容は目では理解できても耳では理解できなかったが）。また、サンスクリット語で詩を作るのを趣味にしているパルスレーという先生も学科にはいたし、デッカン・カレッジからはサンスクリット語で授業をやっているシュリニヴァース等の先生も来ていた。日本では全く死に絶えた古典語だと思い込んでいたサンスクリット語が、ここインドではごく限られた範囲ではあるものの依然として生きているのだ。このことはショックだった。しかし、そんなわけで、ともかく真面目にサンスクリット語の作文をやり続ける気になったのであった。そしてそのせいで後に、インドの高校生相手にサンスクリット語で講演をやったり、大学の学科の人たちを相手に落語の「ときそば」をやったりする羽目になるのであるが、そのことについてはまた機会を改めて述べることにしよう。

インド留学記

その10

祈りと改宗

東方研究会
専任研究員
保坂俊司

祈りと改宗

さて、今までヒンドゥー教における祈りやイスラーム教における祈りについて色々考察してまいりましたが、今回は、これらの宗教の祈りを多少違った面から考察しましょう。

インド亜大陸（以後原則としてインドという場合は、インド亜大陸をさす事にします）に、ヒンドゥー教系の宗教における祈りの形態（ここでは特に祈りの形態をさす事にしますが）とは異なった祈りの形態が、組織的に齎らされたのは、西暦七一一年にシンド地方を征服したイスラーム教徒によってであった。イスラーム教は周知のように、七世紀の始めアラビア人のムハマンド（一般にはマホメッド）によって始められた新宗教でした。この宗教がインドに知られるようになったのは、早くも六三六年のシンド地方への遠征によってであるといわれています。しかし、その当時は単なる掠奪が主で、イスラーム教の信仰を布教しようということはな

かったといわれています（もっとも、このイスラーム教の出現によって、ヒンドゥー教徒の間に間接的には大きな影響を与えたことは事実です。この点に関しては後に詳しく論じましょう）。ところが、世界宗教とよばれるイスラーム教は、本来改宗の宗教です。ですから、その初期において世界中に侵略活動を行なったイスラーム教徒の活動の目的の一つは、この新しい宗教の伝播にあったといわれてもいるのです。これは言葉を替えれば、他宗教からの改宗者を募ることを目的としていたということです。従いまして、七二年にシンド地方の征服にやってきたイスラーム教徒も、その様な意図を持っていました。

この遠征時の記録は、インドのイスラーム教徒の間においては有名な資料によって克明に記録されて今日に伝えられています。その時、このイスラーム教徒を率いていた将軍であるムハマド・カーセムは、戦いは最後の手段であるとして、現地のインド人達に降参を呼び掛け、またイスラーム教への改宗を盛んにすすめています（この時は強制はなく、彼は、税金を払うことで現地の宗教の存在を認めていた）。もっとも彼の場合は、後世のイスラーム教徒がインドでおこなったような乱暴な弾圧はほとんどありませんでした。その時、インド人の中に多くの改宗者が出たのですが、その多くが仏教徒であったということが、記録によって明らかとなっています。それについては東方学院の機関誌『東方』六号に紹介しましたので、ここでは触れません。しかし、ここにインド人によるイスラーム教徒が出現したことは、今日インド（パキスタン・バングラデイシュを含めた地域）において三億人強のイスラーム教徒が存在する事実と関連して考えると、大変興味深いものがあります。つまり、八世紀の初頭にほぼゼロであった

イスラーム教徒人口は、一千二百年後の今日、三億人強の人口に膨れあがっているのです。これは、とりもなおさず、多くのインド人がイスラーム教の祈りを受け入れたということを意味しています。勿論、この中には、インドへのアラブやペルシャといったイスラーム教圏からの移住者も含まれていますが、その数は一割にもならないといわれています。また、インド人がイスラーム教を受け入れたその経緯についても、政治的な圧力や、経済的な利点を求めたというような純粋に宗教的な要素以外のものもあったことは事実です。しかし、そのような改宗者はむしろ少なく、多くはイスラーム教に何かしらの魅力を感じて改宗したのでしょう。勿論、インドにおいて改宗は、個々人の問題というよりも、社会や集団の問題となるので、集団改宗という形態をとることが多かったのです。しかし、改宗の経緯はともあれ、一度イスラーム教の祈りを心から受け入れれば、絶対者アッラーへの絶対的な仰敬と畏怖の念が、心に満ちあふれてヒンドゥー教とは異なった祈りの世界に埋没してゆくのです。

今日、インド亜大陸のパキスタンやバングラデイシュといったイスラーム教国家は勿論、インド共和国においてさえ、イスラーム教徒の存在は大きなものです。毎週開かれる金曜礼拝の時、巨大なモスクを埋め尽くすイスラーム教徒の祈りの姿は、何万という信者に一人として乱れなく、まさに驚異的の規律によって成り立っています。それは、ヒンドゥー教のような、自由な祈りの形態を持つ宗教とは明らかに異なっています。

ヨーロッパを訪ねて

海外留学僧第六回生　浅井宣亮

今年（平成三年）の一月から三月にかけてヨーロッパの禅道場を巡ってきました。初めてのヨーロッパで右も左もわからない上、言葉もほとんど話せません。どうなることかと不安を抱いて出発しましたが、どの国でも全く見ず知らずの私を暖かく迎えてくれました。

旅に出る前、特にパリの道場はプライドが高く、行っても冷たく応対されるというような噂を聞いていましたが、実際は大違いでした。このことをパリの道場の人に話すと、それは誤解だということで、以下のように話してくれました。

「確かにプライドが高いというのは我々の欠点です。しかし多くの日本人は、教えてやるぞという態度か、何も言わずに笑っているだけです。寺の制度は日本では整っていますが、フランスでは白紙の状態から始まりました。修行僧が生活していくための収入を得ることも大きな問題でした。我々は僧になっても、外で働き収入を得なければ道場を維持していけません。だが

我々はこの環境の中で一生懸命努力し、修行しているのです。かつて私が日本の有名な僧堂を訪ねた時、そこの堂頭の最初の一言は『あなた達の修行は間違っています』でした。だから私は予定を変更してすぐにそこを引き上げました。日本人は、そんな時でも頭を下げるのを美徳だと思うのでしょうが、西欧ではそんなことはしません。我々は礼を尽さない人には礼を尽しません。」

ヨーロッパで最初に禅を広めたのは弟子丸老師だといわれています。その教えの基本となるものは、〝正しい姿勢・正しい呼吸で坐禅をすれば正しい心をつくることができる〟ということと、〝日本の教え方はヨーロッパでは通用しない〟という二つだと思います。特にフランスでは、弟子丸老師が亡くなられた後もこの姿勢を堅持しています。それ故、日本との交流は現在ほとんどありません。私がパリの道場を最初に訪ねた時、実はその道場は引っ越しており見つけることができませんでした。後でドイツで新しい住所がわかったので訪問することはできましたが、日本人は誰も引っ越したことさえ知りませんでした。

あと意外だったのは、日本・ヨーロッパ間の交流と同じく、ヨーロッパ各国間の交流が全く活発でないということです。仲間ではあるが、同時にライバル・敵という意識も持っているからでしょう。だから私が道場を訪ねるとよく質問されたのは、他の道場の様子についてでした。

この様なことはアメリカでも見られます。何故こうしたことが起こるのでしょうか。禅宗の特徴の一つに、特定の経典を持っていないということがあります。それ故、各道場がそれぞれの特長を出し易いという利点がありますが、一方では統一性に欠け易いという欠点にもなります。各道場の指導者は、メンバーを集めるため

◀パリ・禅堂入口

▼パリ・新しい道場
（写真は弟子丸老師）

◀ミュンヘン（ドイツ）・禅堂内部

▲イタリア・禅堂内部

▼イタリア・本堂

に、メンバーが他の道場に移っていかない様に自分のところの長所を強調するのが普通です。この道場で教える禅は〝本物である〟と言い切らなければ、人は集まってきません。しかしこれは、他は偽者であるという理屈を生み出し易いでしょう。だから近い道場ほど仲が悪くなるのでしょう。

〝本物〟の禅を修めようと努力することは尊いことだと思います。しかしそれ以上に他人の立場を認めることは重要なことではないでしょうか。各人はそれぞれ違ったバックグランドを持っています。釈尊はインド文化の中で、道元は日本文化の中で育った以上、全く同じ教えを説いたはずはありません。本質は同じかもしれませんが、実際の布教の場では全く違ったスタイルになります。逆に、異なった社会で生きている場合は、異なった布教方法を採って、初めて同じ本質の教えを説くことが可能になると言った方が良いかもしれません。

日本の禅・アメリカの禅・ヨーロッパの禅はそれぞれ違った形を採るのが自然だと思います。そしてどちらが上とか、どちらが本物かなどということは全く無意味だと思います。誰もが一生懸命生きている以上、誰もが本物であって、偽者など存在しないでしょう。

海外での一年を終えて、世界には多くの違った文化・常識を持つ人達が生活していることを知ることができました。現在交通手段の発達で世界は小さくなっていると言われますが、各国間の文化の相互理解は余り進んでいないと思います。摩擦もこれから増加していくでしょうが、それを解決するのは、他人の立場を尊重すること以外にないのではないでしょうか。

インド留学記 その2

インドの学校事情

東方研究会専任研究員
立正大学講師
高橋堯英

"Hey Fresh! Come here!" "Yes,sir!"
"Fresh,what's your name? Which school are you from?"……

こんなやり取りがキャンパスのいたる所で交わされ、上級生による精神的肉体的「しごき」で終始した一ケ月のラギングの期間が過ぎると、やっと、新入生も"Stephanian"として認められることになりました。

当時の我々の一番の楽しみは、何故か、キャンパスの一隅に設けられた「カフェー」と呼ばれる喫茶室の利用の解禁でした。文庫本くらいの大きさの食パンのスライス二枚を皿に乗せ、その上にトマトのいっぱい入った半熟のスクランブルド・エッグをかけたものがこのカフェーの名物で、コショウーをしっかり利かせて食べるのです。時間帯によっては、丁度日本のコロッケのようなマトン・カトゥレットの揚げたても食べられました。学生は、スライスをバタード・トーストにしたり、マトン・カトゥレットを二つオーダーしたり、その日の懐具合に従って注文して空腹を満たすのです。ラギング期間中、上級生にカフェーに連れて行かれ、悪くす

ると講義にも行かせてもらえず二時間近くもの間質問責めにされ、挙げ句の果てに上級生が旨そうにスナックにむしゃぶりつく様子を見せつけられる、ということを新入生の誰しもが経験していただけに、カフェーの利用解禁がうれしかったのだ、と思います。

さて、冒頭の会話でも明らかなように、上級制は必ず出身校を聞きます。出身校で、その新入生の大体の背景が理解できるからです。

インドでは、今でも小学校の一年生から高等学校の最終年の十二年生迄（一九八一年に、十一年教育制から十二年教育制に移行されました）が同じ学校で教えられているケースが多く、公立や私立など様々な学校があります。興味深いものには、後にボンベイの税務署の税務官になった友人R・K君の出身校のように、サイニク（Sainik）・スクールと呼ばれる陸軍幼年学校などがあります。

しかし、特筆すべきものは、パブリック・スクールと称する私立学校の存在でしょう。

私の周りにも、ラジーブ・ガンディー元首相が幼年時代を過ごしたデラドゥーンのドゥーン・スクールや、セポイの反乱の時レジデンシーに立てこもったイギリス人住民を守るため学生が最後まで反乱軍に抵抗し散っていったという伝統を持つラクノーのラ・マーティニアー・カレッジとか、勇敢なラージプート族の子弟育成のためにアジメールの藩王が設立したというメイオ・カレッジなどの出身者が居ました。彼らの多くは、小学校の二～三年生頃パブリック・スクールに転校させられて以来、親元を離れた寮生活を続けているという者たちでした。

パブリック・スクールの多くは、シムラやムスリー、そしてダージリンなどのヒマラヤ山麓の避暑地にあり、主にキリスト教の伝道団体によって経営され、英語による一貫教育が行われ

ています。大英帝国による統治の置き土産なのか、インドでエリートとして成功するためには、しっかりした英語力がものをいいます。特にビジネスマンが多いのですが、親たちは子供たちの将来のための投資として、そして、パブリック・スクールに子供を通わせているという一種のステータス・シンボルとして、全寮制のパブリック・スクールに子供たちを転校させるのです。私の周りに居た十人位のパブリック・スクール出身者の内、ヒンディー語で家族に手紙を書いていた者は、ビハール州とラジャスタン州出身の三名程度という有様でした。他の者たちは、ヒンディー語は話せるだけ、という連中。しかし、おどけて、アメリカ人のアクセントやオックスフォード大出身者のアクセント等を使い分け、講師の先生方の物まねを披露してしまうような、そんな連中だったのです。

ラギングの極度の緊張から解放され、九月も半ばを過ぎる頃になりますと、チェスやブリッジなどのサークル活動や、スカッシュやテニスなどのスポーツを通じて、学生相互のコミュニケーションが更に深められていきました。また、極親しい者のグループなども自然と生じてきました。一たびこのような「仲間」意識が芽生えると、少なくとも彼らとは心に着けていた鎧を外してつき合うことができ、腹の底から大声で笑い合えるような機会も増えてきたのです。英語とも米語とも違うインド英語のアクセントのため、留学生の誰しもが経験する英語ノイローゼの時期にあったその頃の私も、ラギング期間中に知り合った仲間の「明るさと笑顔」に引っ張られ、余り落ち込むこともなく時を過ごすことができました。差し詰め、友の明るい笑顔がつくりだした環境と雰囲気が、「良薬」そのものだった、ということなのでしょうか。

（つづく）

聖地巡礼——リシケーシ

東方研究会専任研究員
清　水　晶　子

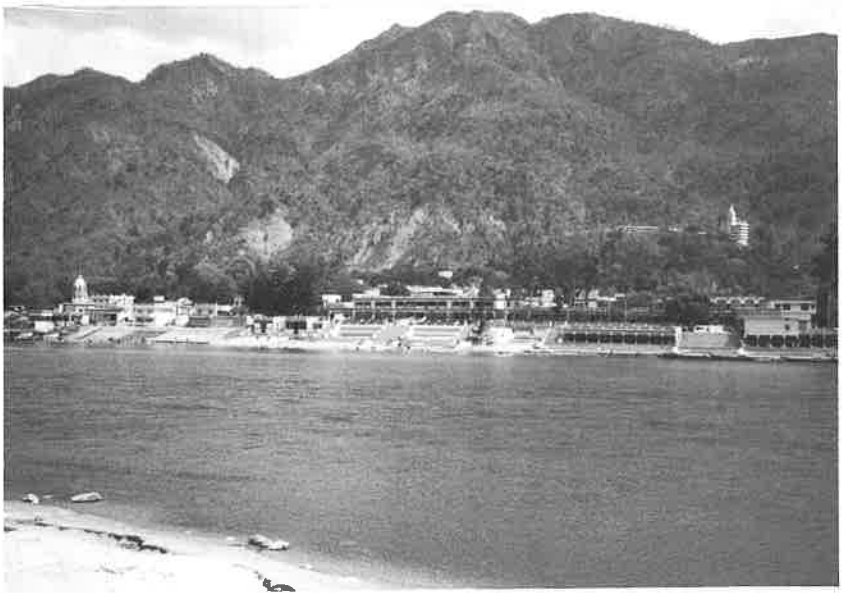
五、六月のデリーは、酷暑期の名が示す通り、想像を絶する暑さとなる。連日、気温は摂氏四〇度を軽く超え、日常生活にもかなりの困難を感ずるようになる。頭の上からばかりでなく、地面から照り返す強烈な日差しにも、目を開けているのが痛くなる。人々は、日中屋内で暑さに耐え、極力外出を避ける。天井扇風機を四六時中つけっぱなしにしても、熱い空気をかきまわすだけで、涼しくなるわけではない。夜も寝苦しく、寝る前に、石の床に水をまいて、部屋の熱を少しでもさましてからでないと寝つけなかった。

学生たちは、この時期、学年末のテストが終わって、すでに帰省している。留学生も、避暑や帰国のため、デリーを離れる。にぎやかだった寮も、居残る学生は数えるほどになる。あちらこちらと、避暑地を物色していたが、五月末、我慢も限界に達し、夏休みは指導教授のご好意で、知人のシャルマさんを紹介していただき、二カ月間リシケーシで過ごすことにした。

リシケーシは、デリーの北東約二五〇キロ、聖なる河ガンジスの上流にあり、デリーからは、バスで六～七時間の道のりである。容赦なく照りつける太陽の熱にさらされてのバスの旅は、目的地にたどり着くまですっかり体力を消耗した。あまりの暑さに、道中、ジュースばかり飲んでいたら、隣の席のシク教徒の老夫婦から、お弁当のにがうりのカレーとチャパティ（インドの薄焼きパン）をいただき、リシケーシに着くまで、一人旅の私をいろいろ気づかってくれた。

リシケーシは、ヨーガの聖地として有名な所であり、小高い山が迫るガンジス河の両岸には、アシュラム（道場）と石段のガート（沐浴場）がいくつも並んでいる。巡礼者たちはアシュラムに滞在し、聖河で沐浴し、罪障を浄め、祈りの日々を過ごす。三月に訪れた時、エメラルド色だったガンジスは、ヒマラヤ山脈の雪解けと

ガンジス河とアシュラム



共に、水かさが増して、泥水のように濁り、勢いよく流れていた。リシケーシは、サードゥ（行者）の町でもある。その数は、巡礼にやってくる人々をはるかに上まわっているように見えた。

鮮やかなサフラン色の衣を身にまとい、杖とカマンダルと呼ばれる手さげの鉢と毛布を携えたサードゥたちが、聖地の雑踏を行き交う。リシ（聖仙）を思わせるような、長く伸ばした髪を見事に結い上げ、腰布だけをつけ、灰で全身を覆っているサードゥたちにも、出会うことがあった。彼らは、人里から離れた庵に住んでいる。リシケーシから、さらにガンジス河をさかのぼった奥地には、生涯森林にこもって修行している行者が大勢いると聞いた。

リシケーシのサードゥ

リシケーシは聖地なので、肉食・アルコールは禁止されている。バザール（市場）では、卵は売られていたが、どこへ行ってもレストランでは、菜食の料理のほかは食べることができない。あまたのサードゥたちを支えているのは、インド全土からの篤志家の寄進による食事のサービスである。リシケーシは、ヒマラヤに点在するそれぞれの聖地巡礼の旅への出発点でもあり、巡礼者とサードゥのかもし出す、どことなく神聖な雰囲気の漂う町であった。

リシケーシは、いにしえより聖者の集まる所

と言われている。現世での一切の欲望を捨て、サードウとなって修行する人々や、ガンジス河への熱い思いを抱いてやってくる巡礼者の群を日々目のあたりにしていると、その聖なるヴァイブレーションがいつしか私にも伝わってきて、神々との出会いや恩寵を求めて巡礼する人々の気持ちが、肌で感じられるように思えた。

シャルマさん一家と、優れたヨーガの指導で名高いシヴァナンダ・アシュラムを訪ねたり、ガンジス河への献花のプージャー（祭礼）をしたり、新たな楽しい体験をし、一カ月の間、ゆったりした休暇を送った。この地で体調を整えたあと、以前から予定していた、ヒマラヤの聖地にあるケダールナート寺院とバドリナート寺院に参拝する巡礼のツアーに参加することにした。六月下旬、ウッタル・プラデーシュ州主催のツアーバスに揺られて、聖地へ向けて旅立った。

ガンジス河岸

神話のいきづくヤムナー河畔（その一）

東方学院専任研究員　及川弘美

ヴリンダーヴァンには、クリシュナ神を祀るたくさんの寺院がありますが、クリシュナという名がつく寺院はありません。すべてクリシュナの異称をとって寺院の名前にしています。前回まで述べてきましたラーダーラマン寺院も含めほかにも、ラーダーダモーダラ、ゴーピーナータ、マダンモーハン、ゴーヴィンドデヴ、ジャグキショール寺院など、まだまだたくさんあります。これらの異称は、クリシュナ神話の様々なエピソードが描かれているクリシュナ信仰の聖典、バガヴァット・プラーナからとられています。ラーダーラマンのラマンという名称も同様にこの中からとられたものです。そこで今回は、バガヴァット・プラーナの中から、現在ラーダーラマン寺院がどのようないわれのある地に建てられているのかお話したいと思います。

ヴリンダーヴァンの北辺を東流するヤムナー河岸には、クリシュナ神話にちなんで名付けられたチール・ガート（ガートとは沐浴などのため河に降りるための階段があるところをいいます）、ケーシー・ガートなどが並んでいます。（ケーシー・ガートを過ぎるとヤムナー河はヴリンダーヴァンの東辺を南下しはじめますが、この一〇キロメートルほど下流にクリシュナ誕生の地であ

り、仏教美術でも有名なマトゥラーがあります。)そして、ラーダーラマン寺院は、そのチール・ガートのすぐ南側に位置しています。

バガヴァット・プラーナ第十巻二九章から三三章には、ヤムナー河の畔で青年のクリシュナがゴーピー(牛飼いの女)たちと戯れ、遊んでいる様子が叙情豊かに描かれています。この中でクリシュナは、彼を慕うゴーピーたちからラマン(愛しい人)と呼び掛けられているのです。次に、聖典に基づきこのヤムナー河畔でのクリシュナとゴーピーたちの情景を簡単に描写してみたいと思います。なお、この部分については『バラモン教典・原始仏典』(世界の名著1 中央公論社)に原点に沿った詳細な訳が載せられています。

満月の美しい夜、クリシュナの甘美な歌に、すっかり魅了されてしまったゴーピーたちは、夫のことも子供のことも家のことも忘れて、ヤムナー河畔に集まってきました。ヤムナーの岸辺には白睡蓮が咲きほころび、心地よくそよぐ風に揺らぎながらその薫りをあたり一面に漂わせていました。ゴーピーたちはクリシュナとともに歌い興じて、至福の歓びに浸っておりました。すると突然、クリシュナは姿を消してしまいました。彼女たちは、クリシュナの居所を探してヤムナーの岸辺に生い茂る種々のマンゴーの木々、ピヤール樹、パナサ樹、アサナ樹、コーヴィダーラ樹、ジャンブー樹、アルカ樹、ビルヴァ樹、バクラ樹、カダンバ樹そしてニーパ樹などの木々に尋ねまわり、森から森へと「おお、主よ、ラマンよ、最愛の人よ、どこにいるのですか」と叫びながらクリシュナの姿を求めて駆け巡りました。結局、クリシュナを見つけだすことができなかった彼女たちは、再びヤムナー河の岸辺に戻り、クリシュナを瞑想し、彼

を讃えて歌を歌い始めました。やがて、蓮の芳香が風に漂い蜜蜂の群がるヤムナーの岸辺に、クリシュナが戻ってきました。ゴーピーたちは大喜びで彼を迎え取り囲むと、ひとりしかいないはずのクリシュナがそれぞれのゴーピーの間にはいり、クリシュナとゴーピーとが交互に輪になって手をつないで歌と踊りが始まりました。その時、天界の神々もクリシュナを讃え、ガンダルヴァ（天界の楽師）のうちならす太鼓とともに、花の雨を降り注ぎました。

このクリシュナとゴーピーたちとが織り成す輪の踊りをラースリーラーといいます。このラースリーラーは、最高神クリシュナとゴーピーたちとが合一した至福の世界を具現するものとして、信仰上、非常に神聖な意味を持っています。そのため、この地にラースリーラーとかかわりのあるラマンという名をとって建立されたラーダーラマン寺院は、ヴリンダーヴァンの重要な寺院の一つとなっているのです。

以上みてきたように、ヤムナー河岸辺のチール・ガートからラーダーラマン寺院のある付近は、バガヴァット・プラーナではクリシュナとゴーピーたちとの戯れやラースリーラーが繰り広げられた花々が咲き乱れる緑豊かな森として描かれています。しかし、現在のヤムナー河岸には、そのような戯れや、美しい河畔の情景を偲ばせるものはありません。それどころか、どこまでも灰色に濁ったヤムナー河の流れと白茶けた砂浜のコントラストは、なにか荒涼としたものすら感じさせます。ただその中で、チール・ガートのそばにある色とりどりのサリーが枝に結び付けられた一本のヴリンダー（めぼうき）の巨木だけが、神話の世界を彷彿とさせています。このチール・ガートについては、また次回にお話したいと思います。

イスラームの国

太田好信

パキスタン回教共和国は現インド共和国の北西部に位置し、英領インドから分離独立し現在四三年の壮年期の若い国だが、その昔BC二三〇年頃はガンダーラと云う地名で呼ばれ、東西文化の交流地としてシルクロードの要所であった。それゆえに各時代の権力者や他民族に依り侵攻されて近世になり、イギリスの支配下約一世紀があった。民族宗教としてイスラム教は約千年ものあいだ多少の盛衰は有ったが現在は殆どイスラム教徒だ。

パキスタン回教共和国の国名が示す回教はイラクとは宗教で同盟国であるが、湾岸戦争では多国籍群参加出兵までしているのはなぜであろうか？

私なりの思考ではパ国の北東部は前述した他民族や権力者により幾度か侵略された経緯があるので湾岸戦争終結後を予測し多国籍軍に加盟したのだと思う。然し国民のほとんどがイスラム教徒なので国民の一部は「フセイン」を回教徒の英雄として支持応援するが我々にもうなづ

ける。

街中を歩くと「フセンイ」のポスター売りの少年、パキスタン国旗を振るデモ隊、ポスターを張った車、自動小銃を持った民兵、など緊張した状況に出会った。

暁暗にコーラン流る冬の空

ガンダーラ美術

ガンダーラ美術はいうまでもなく仏教に関係した宗教美術であるが、西洋風の顔だちの特異性は釈尊が入滅された当時遺骨を収めた塔が礼拝の的であったが、その後二～三世紀後ギリシャ神像彫刻を手本としてガンダーラ地方で仏像が製作されたと伝えられている。それゆえ紀元一世紀半頃の仏像はギリシャ風な容貌をしているがこれがインドに里帰した頃には現代の仏像に近い型に変遷していた。

時の権力者が二代三代と変るうちに他宗教が

ガンダーラ派仏像（ラホール博物館）

勢力を得、特にイスラム教の蔓延に仏教美術は衰微し、戒律の厳しいイスラム教徒によって石仏、寺院は破壊され、永い年月に地下に埋没してしまった。

むなしさや石仏くづる寺院跡

インダスの古代都市

モヘンジョダロ（死者の丘）は世界的なインダス文明遺跡の一つで紀元前二〇〇〇年頃栄えた古代都市だが、内容は近代都市そのものであった。メーンストリートによる区画、給排水溝、貯水所らしきもの、共同ゴミ集積所、等住宅を含め総て練瓦で構築されている。この都市は昔森林に囲まれていたらしいが樹木の乱伐が原因？か毎々洪水にみまわれたらしく重層的に新旧の跡が見られた。BC一五〇〇年頃「アーリヤ人」に侵攻され滅びたという説もあり崩壊の原因は定かでない。

カメラがとりもつ縁

旅行中に冠婚葬祭にで会ったことはあったが今回は結婚披露パーテーに参加さしてもらった。

シャワーを浴び明朝の移動に備えトランク内を整理していた時、窓外から時ならぬ音楽が聞えたので庭園へ出てみたら新郎新婦が入場するところだったので、急いで自室に戻り背広に着がえて庭へ出た。ガードマンにカメラを見せ中に入れてもらった。儀式は終ったらしく両人は花で飾られたステージで来賓から祝福を受けたり、お祝の贈物などを頂いている。受台にはむきだしのルピー紙弊が、幾枚か見える。日本人の様な体裁をつけないらしいので、私は手持の三色ボールペンを新郎にはなむけとし片言英語で祝い、写真を撮る。

広い園内は着飾った女性たちでまばゆい。民

族衣装の娘さんを二、三枚撮り帰りかけた折娘さん二人が追いかけてきて赤い薔薇を呉れる。先程アドレスを聞いた娘さんなので私も一緒にならび記念写真を撮り、帰国後郵送することを約し別れた。

ばら一輪　嬉しき老の旅路かな

デスクサイド

似て異なるものは、かつて我々が味わった戦争と今回の湾岸戦争であろう。多国籍軍の猛攻の最中イラク大統領フセインが地にひれ伏して神に祈る姿がテレビに放映された、彼は己の身を守る為シェルターの奥深くで全軍に命令、指揮し、外での姿は替玉か戦前の録画ではないかとも言われる。

彼等イスラーム教徒は一日に五回も神に祈を捧げるが、その場所は家の内外どこでも小綺麗な所に布一枚を敷き大地にぬかづき敬虔なお祈をする。フセインも其の一人であろう。

イスラーム教は一神宗教であるから信者総ての祈は神のみが受け、神のみが答える。

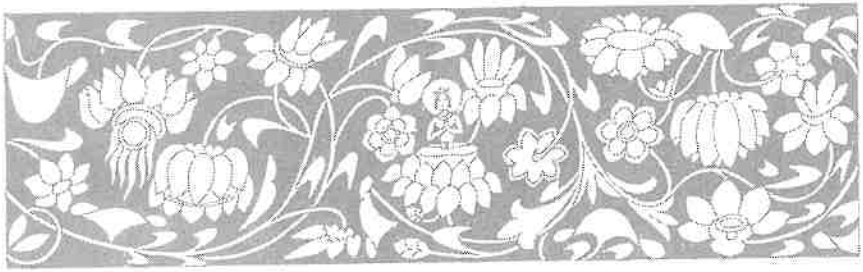
例えば神がフセインに対し「お前は戦争の責を負い死ね」と答が出たら彼は喜んで神の言葉に従うであろう。或いは「機会をみてイラク国民の為に再起せよ」と神の指示があればいつの日再び戦が起ることもあり得る。コーランの強さは絶対的なものらしい。

翻って最近の日本人の宗教的祈はあまりにも安易に現世利益を得る手段としての祈であるなば、神仏を冒瀆するも甚だしいことだ。

剃髪体験をして

井上葉智

それは、数年まえのこと。
月に一度、水野弥穂子先生の主宰する福田会で、共にお袈裟作りに励んでいた方が剃髪をされた。
そのすがすがしい姿に、わたしは思わず目を見張った。
常に笑みを湛え、穏やかな彼女の秘めた「志し」を不覚にも、わたしは気づかなかった。
その後、尼僧院で二年間の厳しい修行を勤めあげ、めでたく尼僧になられた。
相変わらず、彼女は福田会にお見えになっている。



十二年まえのこと。
わたしは、西嶋和夫老師に相見し、坐禅とご提唱の会に出席して、ご慈教を頂戴している。
三年目、授戒会に参列し老師より厳かに受戒を戴いた。
そして九年目のいま、在家人のままで剃髪をした。
五月三日、西嶋老師の授戒会の儀式のあとに、わたしは七條衣の黒袈裟の拝受という形で、剃髪を味わう。

仏道は、いまを暮らしている人間の「生きざま」を、問題とする。
個人の問題からはじまる。
極楽も地獄も現世のこと。未来や過去のことではない。
議論したり、知識をひけらかしたりするものでもない。
もちろん、正しく「仏教」「仏法」を、充分に勉強することは大事であるが、「仏行」「仏道」の、この四つの意味の違いを充分に認識することが大事である。
仏教が「行いの哲学」であるといわれるのは、その辺りを指しているのだろう。
「喰わねばわからぬ饅頭の味」と、いまは亡き沢木興道老師も言わ

れているではないか。

起床し、洗面をし、衣服を着、飯を喰い、仕事をし、金を稼ぎ、その多寡に心を揺らし、身近な人をあげつらう、人の日々の行動。その行ないが問題なのである。

その暮らし、本人が極楽なら結構だ。地獄も良いと言うならば、それもまた結構なことである。

極楽にいながら地獄と感じたり、地獄にいながら極楽と感ずる。その不合理はどこから来るのだろうか。

人間の業とは何んなのだろうか。と、疑問を投げ掛ける人に、お釈迦様は仏の道、真理の道を、いろいろな形で示してくれた。その後に現われた、仏々祖々の正伝のお陰で、わたしたちは仏教を知ることができた。

人の心はすぐ変わる。自然の姿も無常である。

刹那、刹那。瞬間、瞬間のなかで、泡のように生きているにも関わらず、永遠不滅がある。と錯覚するところから、迷いや、執着が生じてくる。瞬間の重みを忘れる。

「いま、おまえは何をしているか…」という、行ないの世界の貴重なこと、夢にも気づかずに。

確かな行ない。正しい行ない。悪い行ない…ｅｔｃ。
「心」は無限の「行動」を、想像することが出来る。
想像したことで、さも「行動」したかのような、錯覚に陥る。厚かましくもあり、哀れなことでもある。
只管打坐。半畳の中で只、坐る。「我」を凝視する。
実践することでその尊さに気づき、直観力は養われる。

剃髪をした。在家の私は、また有髪になるだろう。
この機会に、ご縁の寺々に表敬訪問をする。わたし…

第七回育英生入選論文

二十一世紀の仏教と私の役割

東北大学大学院博士課程　早川　敦

仏教の最大の課題は、生死の因縁を明らかにすることである。実に、この契機を抜きにしては、仏教は決して存在し得ない。

しかし、単に生死の因縁を問うのみであれば、ジャイナ教やヴェーダーンタ学派の哲学と何の違いもない。これら外教から仏教を截然と区別する教説が、三法印と縁起説である。そしてこの二つは、生死の縁って来たる所を具体的に示している。

三法印とは、仏教の旗印といわれる「諸行無常」、「諸方無我」、「一切皆苦」の三つである。縁起説とは「無明」にはじまり「老死」におわる十二支縁起である。この世のすべてのありようが「無常」であり、「無我」であることを知らないのが「無明」である。「無明」は縁起の各支をたどって、最終的に「老死」に至る。これらは全体でひとつの体系をなし、生死の因縁を解き明かしている。これらはまた仏教のすべての

教理の土台となっている。ここで、私は仏教を「死の哲学」とかりに呼ぶことにしよう。

さて、この「死の哲学」に関連して、わが国では「死の美学」ということがしばしば口にされる。すなわち「武士道」である。

武士道と仏教とはあいまって発展し、歴史のあちこちに大輪の花を咲かせた。たとえば鎌倉時代は武士道の最初の興隆期であるが、この時代は同時に日本仏教の興隆期でもある。鎌倉武士たちの多くは仏教、特に禅宗に帰依し、自らも坐禅の修行に余念がなかった。彼らは、「いつでも死んでみせる」という覚悟があった。そして、それを支える思想が、仏教の無常、無我の教えであった。

世俗的価値は、それがいかに重大なものであれ、死を賭けて守るべきものではない。死んでしまったらそれを楽しむことができなくなるからである。これに対して世俗を超えた価値は、死を賭しても守るべきものである。なぜならそれこそは世俗の生に秩序と価値を与えるものだからである。仏教は世俗の我を否定し、そのことによって武士たちに、世俗を超える価値を明らかに示したのである。

死の覚悟なるものは、とりわけ日本の武士の専売特許ではない。仏教経典には、仏道修行の完成のために命を捨てた人々の姿が散説されている。そのうちの一つ『大智度論』巻四の尸毘王の物語を、ここに紹介しよう。

尸毘王は帰明救護陀羅尼を得、一切衆生を救済するという誓願を立てていた。帝釈天は彼を試そうと考え、自ら鷹に姿を変じ、毘首羯磨天をして鳩に変ぜしめ、これを追って尸毘王のも

とに至った。鳩は尸毘王のもとに逃げ込み、鷹は王に、鳩をひき渡すように迫った。王が誓願を理由にこれを拒否すると、鷹は、自分も「一切衆生」のうちのひとりであり、また鳩を奪われては飢えて死んでしまうと訴えた。他のものの肉を与えようという尸毘王に対し、鷹は殺したての肉でないとだめだという。他の生き物を殺すわけにはいかないから、王は鳩の重さの分だけの自分の肉を割いて与えることにした。王は自らの股の肉を割いてはかりにかけるが、いくら割き取っても鳩の重さにつりあわない。王はついに身体全部ではかりに乗った。帝釈天は王をまことの菩薩と認め、真実語の力で身体を回復した尸毘王に、のちには必ず仏陀となるであろうと予言し、天上に去っていった。

このような捨身の精神は、日本では太平洋戦争を境に消滅した。そして、「敬神愛国」「滅私奉公」というスローガンにかわって、「愛と平和」というスローガンが巷間に流布するに至った。「愛と平和」という言葉は、自己否定の契機を欠いているぶんだけ、「滅私奉公」よりも耳触りがよい。しかしそれは無限の自己肯定に他ならない。かくして我々現代日本人は、命を賭すべき何物をももたないのである。

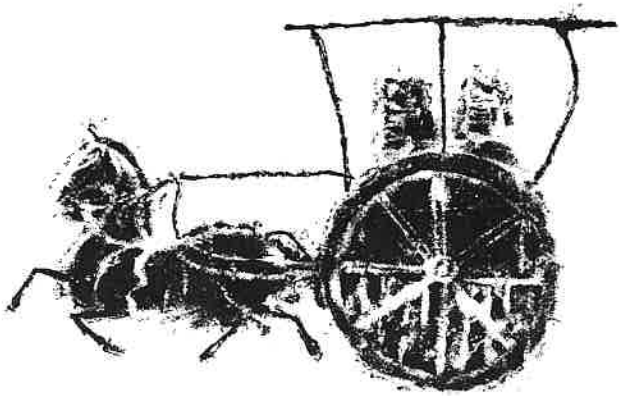
安易な自己肯定は精神の頽廃を招く。その実例は最近のレジャーブーム、財テクブーム、三K企業の人手不足などにみることができる。要するに現代人は、ヒマと金と、楽な仕事を求めているのである。「愛と平和」といえば聞こえはいいが、このようなものは生きながらの緩慢な腐敗、無明の中の生に他ならない。

最近は仏教の俗化が進んでおり、寺院の境内にゲートボール場を作ったり、本堂でカラオケ大会を催したりする寺もあるという。しかし、仏教寺院の役割は地域のコミュニティセンターになることではない。仏教は徹頭徹尾自己否定

なのであり、むしろ世俗と一線を画し、精神の頽廃と戦い続けることこそ、あるべき仏教の姿である。このことは二十一世紀が来ようが三十二世紀になろうが、決して変わることがない。

以上述べて来たように、仏教の役割はあくまでも「否定」であると考える。すなわち仏教の中核は個人的レベルに存する。そこで、「私の役割」も自己否定に尽きる。だから仏教徒たるものは常に問い続けなくてはならない。

「肉体を生かして、魂を殺してよいのか」ということを。



第七回育英生入選論文

タイ仏教に学ぶ

善光寺徒弟　落合　隆

ひとつの印象的な映像がある。タイ国で長い間上映されたその映画は、ある青年の非恋物語で、それは彼の死によって完結する。その死は何を象徴しているのだろうか。

バンコックの富豪の息子に恋人を連れ去られた農村の青年は、その事件を契機として日ごろ父親から勧められている得度を決意する。父親はその決意を喜び、三衣（チーオン）を大切そうに持ちながら村人たちに報告してまわる。車座になって作業をする農婦の一人はその姿を見て小さく合掌をする。仏像でも比丘でもない。息子の得度を喜ぶ一介の農夫に向かって合掌するその姿からは、南方上座部仏教を小乗仏教と賤称する根拠を見いだすことはできない。

釈尊の大きな手で蒔かれた教えの種子は、伝播された国々の風土や固有の文化に育まれて、様々な花を咲かせた。花の形や色の諸相の成立は、それぞれの国土に育つように自在に変化さ

せる仏教の柔軟さによるものであるが、種子はあくまでも同一のものに収斂される。それは息子の得度を喜ぶ父親への農婦の合掌が、いくつかの媒体を通してもなお、光の速度で釈尊に向かって行くことと同じ構造を示している。映画という庶民文化の一断面、それも時間的には数秒の場面にも釈尊の姿はたち顕われる。

仏教学を修めたわけでもなく、寺院の出身でもない、ごく普通の教育を受け、現代の日本社会で働き生活する私にとって仏教はおおむね無縁なものであった。加えて、私にとって寺院とは特別な儀式や法事以外には関わることのない特別な場所であり、仏像は礼拝の対象ではなく、ほどほどの美意識を満足させる美術品であった。又、仏教のもつ様々な哲理は物事の認識方法を拡大させることもありうるといった程度の理解はあっても、日常生活における私の所作には仏教の影響はほとんどなかったと思われる。

そのような私にとって仏教との出会いはタイ仏教との出会いから始まったといえる。

タイの仏教は正しくは「テーラヴァーダ（南方上座部仏教）」と呼ばれるが、それは二百二十七条の戒律（男性の修行僧である比丘の場合）によって象徴されている。戒律の問題は仏教徒であることを強く自覚し始めた私自身の問題でもある。在家仏教徒としては五戒が定められている。そのうち、たとえば「殺生戒」とは何か。私の手の親指の付け根に一匹の蚊がとまる。簡単に叩き潰すことに躊躇する私はしばらくは見つめているほかに術がない。細い足を皮膚にく

い込ませて、その小さな生命は懸命に血を吸い続ける。この小さな生物の生と死がとるにたらない小さなものであるとする論拠は何処にもない。人間に限らずあらゆる生物が他の生物の死に依ってしか生を保ちえない運命を担っている以上、殺生を行なわないことが不可能なことは自明のことである。だからこそ「殺生戒」とは日常のあらゆる場面での生と死の検証作業を求める。「何故か」という問いへの解答は何処にも用意されていない。あらゆる日常的な行為に対する注意深い醒めた意識を戒律は求めているのではないか。戒律とはそのようにして、「お前は今、何をしているのか」という問いを間断なく発し続けるものである。

タイ僧伽の比丘は戒律の遵守を修行の柱としている。パーラーチック（パーラージカー）と称される四つの大罪、（一）性交の罪、（二）盗みの罪、（三）殺人の罪、（四）悟りについての虚言の罪、から服装や食事の作法に至るまで戒律のすべてを守ることは、現代のタイ僧伽においても容易でないことは想像がつく。あの東欧諸国の激変をもたらした情報化社会は、固有不変とされる価値観をたやすく脅かした。情報は世界をかけめぐり第三世界と呼ばれるタイにおいても情報や物流の奔流から無縁であることはありえない。

水あれば　魚泳ぎ
田あれば　稲穂みのる

このタイ語であらわされた最古の刻文に見る牧歌的な生活感も、中間層（＝市民層）の形成とあいまって工業化を押し進める政府の方針や、現実に流通する工業製品の魅惑的な姿によって徐々に変ってゆくことであろう。それは価値基準の選択支を増やすということはあっても、あたりまえのことを理解する能力を高めることまでは保証しえないことを日本を含む先進

諸国がすでに明らかにしている。現代社会は激しく揺れ動き、未来の予測などとうていできない。

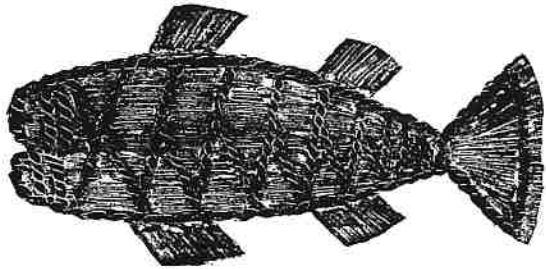
タイの民衆のブン（功徳）志向や国家による保護によって成立するタイ仏教界も、世界の潮流や国内の諸条件の変化にともない変革を余儀なくされるであろう。少し視点を変えればタイ仏教に対する批判も成り立つ。仏教は少欲知足を説くところから、むしろ人を怠惰にするのではないか。生産活動に従事しない出家者がタイ国の全男子人口の一・五％～一・七％も存在すること事態が経済開発を遅らせているのではないか、貧しくても心が豊かなら良いとする見方は富めるものの傲慢で無責任な認識にすぎないのではないかと。

平衡感覚にすぐれているといわれ、仏教を生活のよりどころにする誇り高いタイ国民は過去の様々な仏教改革運動を展開してきた。古くは一八三五年のモンクット親王によるタマユット運動。ブッダ・タート比丘によるチャイヤー道場における新仏教運動。そして現在もなお様々な試みがなされている。タイ国民とタイ仏教界は、生命をかけて守りぬいた仏教国としての誇りをたやすく捨てる道は選ばないであろう。聖と俗の乖離。あるいは精神的価値と物質的価値の交換構造。そのことが互いをあざやかに照射し合う宗教的社会の力動性をかたく信じているように思われる。

さて、アジア的なるものを回避すると同時に、宗教に対する素朴な情熱さえも失いかけている日本を、彼らはどのように見ているのだろうか。たえまない技術革新により、驚異的な経済大国にのし上ったアジアの小国、日本。少なくとも極めつけの困窮者がほとんどいない状況は評価できるとしても、この国の精神的空洞は何によってもたらされたのか。不必要な情報と工業製

品を大量に溢れさせ、その中で溺れかけているようにも見えるわが国の現代社会にこそ、釈尊の教えが求められているのではないか。

ラック・タイ（タイの国体原理）として仏教を幼児期から教育されているタイとそうでないわが日本とでは、仏教に対する認識が異なっているのは当然である。しかし、明晰な合理性をもつ釈尊の教えは国情の差異を越え時代を越えてなお両国に生き続けている。在俗の仏教徒にすぎない私にすら、タイ社会において仏教がごく日常的なものではなく、それ以上のものがあるのではないかと、興味をもって感ずることができる。私は知らぬまに身につけてしまった余計なこだわりをすべて捨て、釈尊の教える法と、自分自身をよりどころにして、タイ僧伽に身を投じ、何ものかを学び、持ち帰りたいと切に願っている。



第七回育英生入選論文

未来社会の仏教と私

真言宗豊山派僧侶　品田裕淳

私たちは、今日ほど世界が予想しがたい速度でうねりをもって動いていることの実感を抱いたことはかつてなかったのではなかろうか。

それは、昨年秋に始まった東欧諸国での変革、東西両ドイツの統合、ソ連とアメリカを中心とした冷戦構造の解消、イラク対全世界の対立等である。

また、二十一世紀を目前に控え、全地球的（グローバルな）視野に立った環境問題が声高に叫ばれている。いわば、生存の危機的状況を認識し始めてきたのである。ある学者によれば、このような脱イデオロギー社会において、最終的にリベラリズムに対立するものとして残るのは、宗教とナショナリズムであるといわれている。二つとも心の領域の問題であるが、しかし宗教にはややもすればドグマ性が強いので、ナショナリズムよりも対立解消という点では困難ではないかと私は思う。

いままでの人類の歴史を眺めてみた場合、そこにはいつも宗教に端を発した対立があった。宗教は排他的であり、世界の宗教はそれぞれ自分の宗教こそ究極の真理を説いていると主張してきた。ところが、二十世紀の今日世界を最終的に制覇する宗教はありえないことが明らかになってきた。すでに多くの人々は、宗教の本質はドグマに他ならないことに気がつき始めている。このことは、一九八六年にアッシジでローマ法王ヨハネ・パウロ二世の主唱によって実現された世界平和の祈りに示されているし、わが国の禅僧とカソリックの修道士によってもたれた「東西霊性交流」によっても明らかである。このような意味で、二十一世紀は宗教史上、類を見ない画期的な時代であるといえよう。

おそらく来世紀には、紆余曲折を経ながらもドグマなき宗教の時代、つまり宗教の相違によって人間がわけへだてされることのない時代を迎えるであろうと思われる。人類にとっての進歩とは、ドグマから自由になることであると私は考えたい。

さて次にはここでのテーマである「未来社会の仏教」ということに視点を移そう。周知のごとく、最近のマスコミにおいては脳死問題や、ターミナルケアが盛んに取りあげられ、そこでの仏教者の発言や取り組む姿勢に期待がもたれている。

一方現代の仏教は葬式仏教であるという批判もしばしば聞かれる。釈尊は「生老病死」の四つを人生の苦の根本的なものとして取りあげら

れたが、前述の脳死問題にしてもターミナルケアにしても、ただ単に「死」にのみ焦点が当てられ、他の「生老病」と切り離され、特別視されすぎているような気がしてならない。あくまでも、「生老病死」は総体として把握されるべきである。このように、各々別個のものとして考えられるようになった原因は、いったいどこにあるのであろうか。おそらく、日本仏教のセクト主義・ドグマ主義によるものと思われる。

歴史に名を刻した各宗の宗祖や高僧方の多くは、自分の宗派だけでなく、他の宗派の本山でも修行を積まれ、研鑽にいそしまれた。それに対して、今日僧侶になるためには各宗立の大学に進むのが確実だと多くの人々は言う。とうぜんのこと一つの宗派を自分で選択することになる。それはかつての祖師方に比すると閉鎖的になることである。かつまた、現在の宗教系大学には知識としての仏教、学問としての仏教があるだけである。

また大学によっては卒業と同時に僧侶の資格が与えられるという。合宿免許を取得するのとにかよっている。このようにいう私も、一応仏教を学んだが、何か物足りないような気がしてならない。

仏教では仏法僧を「三宝」と称し、重要視している。ここでいう「僧」とは、本来「仏法を信じて仏道を行う人々の集団（僧伽）」を指す。したがって本来の僧侶と世間一般で認識されている僧（いわゆる「死者儀礼」を生業としている職業僧侶）の間には、かなりの隔たりがあることは否定できない。出家者として法衣をまとい、頭を剃っている、いわゆる形を整えた姿はあるが、果たして心のほう（心の出家）はどうであろうか。今こそ、我々仏教者一人びとりに、あらためて僧侶としての在り方が問われているのであり、さらには「僧伽」本来の共同体的な

在り方というものが今後見直されるべきである。我々が今こうして生きているということは、存在しているということでもある。

冒頭にも述べたように、我々人類は文明の岐路に立たされている。これからは宗教や科学技術をはじめ各領域の知的遺産ともいうべき諸分野の学問・哲学・思想などに携わる人々にお互いに手を結び協力して行くべきであろう。

わが仏教も特別な枠をはめずに、あくまでも人間の思索の営みの一環として共有されるのが望ましい。それはまた、仏教以外の諸宗教に関しても同様である。

最後になるが「あなたにとっての仏教とは何か」を問われた場合、実際私は答えに窮する。

私は大学に入ってから得度し、仏教を志したが、ある人から「坊さんになったということは、それ自体、人生の目標というか答えのようなものが与えられているのだ」といわれたことがある。確かにその通りかもしれない。

しかし、私の道はまだまだ険しい。私は時として、自分の選んだ道はこれでよかったのかと思うことがある。私のようなものが僧侶にふさわしいのかという疑念に駆られることもある。祖師方の行履（あんり）に還ることこそ、現在のそして本来の私に対する何らかの指針を与えてくれるであろう。さらに仏陀の生き方を真似（まね）ぶことが出来たら「僧侶になったことの意義」がおのずから明らかになるであろう。

もっとも、それ以前の問題として、まづ自分の人間性を高めることが先決であると、私は考えている。

第七回育英生入選論文

タイの仏教に学びたいこと

大本山総持寺安居　水野克彦

現在の私は、タイ仏教が属するところの南方上座部仏教（いわゆる小乗仏教）についてほとんどと言っていいほど知識を持ち合わせていない。ただ、私自身が南方上座部仏教の教えとして知っていることと言えば、学生時代に学んだ「自己を完成するための教えである四諦八正道をもってその根本教理とし、その四諦八正道の完全な理解が得られれば、自己が完成されるとともに、それはやがて他の人びとを救済する助けにもなる」と言う事だけである。

さて、仏教と一口に言っても、国や地域によってそのありようがさまざまに異なっているのが今日の現状である。釈尊の原始仏教から部派仏教・大乗仏教と発展し、かつさまざまな地域に広がりを見せた仏教であるが、大きく分類すると南方仏教（南伝仏教とも言う）と北方仏教（北伝仏教）に分類される。

そのうち、北方仏教とは、西北インドから中

央アジアを経て中国に伝えられ、さらに朝鮮半島、日本へと伝えられた仏教である。中国において翻訳され、流布した多くの仏典はそのほとんどが大乗仏典であることにより、北方仏教は「大乗仏教」とも呼ばれている。それに対して南方仏教とは、スリランカ（セイロン）・ミャンマー（ビルマ）・タイ・カンボジア・ラオスなどの東南アジア地域に行なわれている仏教であり、外形的には原始仏教や部派仏教の多くを伝えている仏教である。

このように仏教の教えが広められた地域によってそれぞれの仏教は多少異なり、またそれぞれの地域において独自の発達（変容）を見せている。一例を挙げてみよう。重要な仏教の修行法として「六波羅蜜」と「十波羅蜜」とがある。大乗仏教は六波羅蜜（一）布施、（二）持戒、（三）忍辱、（四）精進、（五）禅定、（六）智慧）を重視するのに対して、南方仏教は、これに四つ（七）方便、（八）願、（九）力、（十）智）をさらに加えて十波羅蜜をたてることである。

現在私は、北方仏教に属する日本仏教のうちの曹洞宗に僧籍を置く者の一人である。本来ならば曹洞宗の教えを身につけ、それをもって布教するのが私の役目であるが、それでは、仏教の原点である原始仏教を良く理解せぬまま、北方仏教（大乗仏教）のみをもって布教して行くことになる。私はむしろ、釈尊の原点をもふまえた思想や教えをもって布教することが大切ではないかと思う。そして、仏教を単なる理論としてではなく、自分の身体で体得し、おのが身につけることがこれから先、出家者（宗教家）として人生を歩んで行く私にとって重要なこと

ではないかと考える。

私たちの曹洞宗は、周知のように、道元禅師によって開かれ、瑩山禅師によって一般の人々に広められた一宗派である。また、坐禅をひたすら実修することによって悟りを自覚する、つまり「只管打坐」の禅を主唱する宗派である。しかし、本山等における現状は、ただ僧侶の資格を手に入れるために安居する者が多くなってきている傾向はいなめない。事実、私もそのような資格を取るために本山僧堂に安居した一人である。

送行して初めて気が付いたことがある。それは、真の出家者としての自己ができあがっていないことである。僧侶としての資格はあるのに自己が未完成というのは、実際おかしいことである。以前私は、法要を行ない御施主さんに手を合わせて見送られたことがある。その時自分に対して情けないと思った。若い僧侶なら一度は感じることだと思う。それは形式だけの法要を行なうからである。

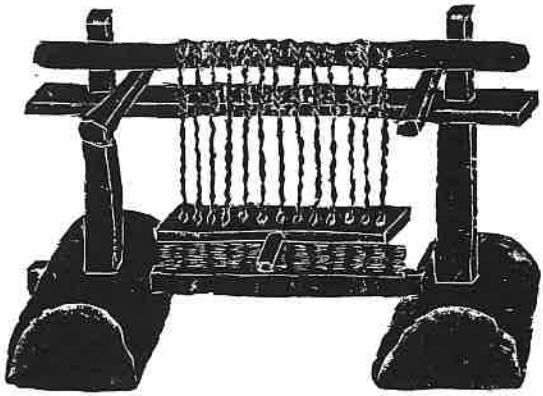
現在日本における仏教は形式的な側面が顕著で、出家者としての本来の道を失いつつあるのでは…と思う時がある。法衣を身に付け、浄髪をしている者ならば、それなりの自己完結が必要である。在家の人たちは、法衣を身に付け、浄髪をしている姿を見れば、その者を一人前の僧侶として待遇するであろう。かれらの待遇に甘え、法要のみを形式的に行なうだけでは出家者として失格であると思う。このようなことをいく世代も続けて行けば、日本の仏教は、だめになるであろう。

それゆえ、私は仏教の原点である南方仏教そのものを少しでもおのが身体で感じる必要があるのではないかと考えた。もちろん法式・声明・葬儀の仕方を覚え、行なうことも大変重要なことである。が、その前に真の出家者としての自

己を確立することが、第一であると考える。そのためには、タイに赴き、「四諦八正道をもって自己を完成し、真の自己を完成させるとともに、それはやがて他の人びとの救済のための助けとなる」という南方仏教の理念を少しでも体得することが自分にとって急務であると考える。さらに、そのことはこれから自分が出家者として人生を歩んで行く上で大いにプラスになることでもあると思う。

本来僧侶という者は、世の人々の心の支えとなり、かれらの精神的な悩みについての良きアドヴァイザーであることを本来の役目とするものである。もちろん世の人々が成仏できるようにとねんごろに供養するのも僧侶としての責務であろう。

そのために、まず私は、出家者としての自己を確立させるために、釈尊の教えにより近い南方仏教の現実をまのあたりに見て学び、そしてみずからのものとしたいと念じて、善光寺育英会のタイ国派遣留学僧を希望する次第である。



第七回育英生入選論文

未来社会の仏教と私

立正大学大学院修士課程　曺　良淑
（韓国）

今日の世界はどんどん変わって行く。永遠な鉄の帳幕であると見なされたベルリンの壁が崩れ、世界中の共産主義者は終末を告げている。しかしまだ中東の事態は、全世界の緊張を高めている。にもかかわらず、人間の欲望の所産である廃棄物資は、地球の危機をもたらすであろう深刻な環境の問題を引きおこしている。

このような時代に生きている我々はいったいなにを考え、なんのために生きていったらよいのか。我々はこれまである時は飢餓の苦しみの中で、ある時は天災地変の苦しみの中で、またある時は戦争の苦痛の中で、我々はその時々をまた将来のために一生懸命に働いて来た。その結果、ある面では物質的には豊かになったが、また別の面ではあくなき欲望がもたらすところの種々の問題を惹起してきた。

本来の正しい思想が理解され実践されているならば、個人のあくなき欲望は抑制され、社会

もまた安定し、ひいては世界に永遠な平和がもたらされるであろう。つまり、この娑婆世界に浄土が実現されるであろう。

私は、社会の秩序と統一は制度の整備だけから成されるのでなく、あくまでも正しい思想と精神の理念を基盤とするものであると思う。

仏教者の修行は悟道を目的とする。そして悟りが仏教の究極的な理想であることはいうまでもない。しかしながら言語と思惟を超越した悟りがそれだけにとどまるならば、他にその悟りをめぐらすことをおこたることになる仏教は人間的な宗教ではなく、非人間的な宗教ないしは超人間的な宗教であるという誤解を招くおそれが生ずる。

単に目的それ自体を追及することよりも、他の人々のために貢献することこそ非人間的ないし超人間的な宗教におちいる不幸を防止する道ではないかと私は思う。

あるとき、私の先生は次のように語ってくれた。「お坊さんたちが、自分の座席を能く守ればそのままで仏教はもちろんこの社会は安心してもよい。」と。

「座席を能く守る」という言葉にいろんな深い意味が含まれている。私が出家の道を選び修行生活を送っていたころ読んだ「初発心自敬文」の文句が思い出される。

汝自無始已采　至千今生　背覚合塵
堕落愚癡　恒造衆悪而入三途之苦輪
不修諸善　而四生之業海。
身随六賊故　或堕悪趣則極辛極苦

心背一乗故　或生人道則　仏前仏後。
今亦幸得人身　正是仏後末世。
嗚呼痛哉　是誰過興。雖然汝能反省
割愛出家　受持応器　着大法服履出塵之逕
路　学無漏之妙法　如龍得水　似虎山其
殊妙之理　不可勝言。

いわんとするところを略説すれば次のごとくなるであろう。仏滅後の末世に生まれているが、出家して、仏の応量器を受持し、法服を着ているそのすぐれた意味（意義）を正しく知って、出塵の経路にしたがって、無漏の妙法を実践すれば、あたかも龍が水を得、虎が山に依ることと同じであると。

いくら一生懸命に修行したとしても、その方法がまちがっていれば、その修行は実を結ばない。逆に、それが正しい修行方法であるならば、いかに苦しくともふみおこなわねばならない。そして、その正しい修行道を見つけるための努力をおこたってはならないことはもちろんのことである。

これは誰の手をかりることもできない。自分自身が自づから行い、そしてきわめなければならないことである。

日本の鎌倉時代に、宗教的危機意識としての末法思想が新たな救済論を形成させた。加えて、鎌倉新仏教は、奈良仏教や平安仏教という既成の仏教教団を覚醒させた。そのことを考えるとき、今日の我々ももう一度真剣な反省をしなければならないことを切に感ずる。

現代の物質文明は、我々をして個人主義・快楽主義・物質主義の考え方を助長し、相手に対する信頼を欠きつつ、また自らは、人間として生きるべき確固たる目標を失いつつある。このような状態にあっては、正しい（真正な）幸福や平和は、いくら努力してもはるか遠いところといわねばならないであろう。

要するに、こんな時代における人間の宗教ということは、まず、人間の現実を包容する人間らしい宗教になることとして、人間が人間存在の窮極的な行方を解明して与えることであり、そして人間が現実を生きて行く永遠な倫理を提示することである。これが生に対する態度ないし姿勢が自分自身を救済する戒律であり、倫理ではないかと思う。

私が出家を決意し、両親から離れる時、父が私に語ったわかれの言葉を思い出す。

「出家の道はそんなにやさしい道ではない。ほんとうの出家者として修行する勇気があるならば行ってもよいが、簡単に決めたことなら止めろ。」と。

自づから進んで決めたこの道を後悔しないようにしっかりけじめをつけるべきだと、そのとき私はもう一度決意しなおしたのであった。

私が選んだこの道が真理に向かうことを、私は確信している。私は釈尊のほんとうの弟子になろうと秘かに念願している。そのためには、まずもっと仏の教えを学習しよく理解し、仏の教えを実践しなければならないと念じている。私が留学する理由は仏の教えをもっと具体的に知るためであり、また私の修行を続けるためである。

自己の修行は自分のためだけではなく、他の人になにかしらを教える契機でもある。自他がお互いに人間らしく生きて行く指標でもあると私は思う。

私は、再び生まれきたときも黙々とこの仏の道を歩き続けることを念願している。

第七回育英生入選論文

未来社会の仏教と私

東洋大学文学部印度哲学科　李　焌　秀
（韓　国）

人間はこの世に偶然に生まれてきたのではないと私は思う。また神の命ずるところにしたがって生まれてきたのでもなく、といって運命として定められていたのでもない。仏教はこれらを無因無縁論・尊祐論・宿命造論としてしりぞけ、むしろ業論・行為論・努力論を主唱した。

簡単にいうと、人間はこの世に自分の意思によって生まれてきた、というのである。

したがって自分の行動については、自分で責任をもたなければならない、というのが仏教の人生観の基本である。

これは前世からこの世に生まれてくるという、大きなタイムスパンでの議論であるが、これを日常生活に適用すると、幸福になるのもならないのも本人の意思次第・行為次第ということになる。たしかに両親や友人たちなどのまわりの人たちから影響も受けるであろうし、政治や経済といった社会の情勢によって翻弄される

ということもあろう。しかし両親や友人たちからの影響は、結局主体的には自分が受けとめているわけであり、社会の情勢も自分を含めた多くの人々の意思によって動かされているのであって、決して社会が一方的に自分を規定しているわけではない。

人間は自分で幸福になろうと思い、そのように行動すれば、幸福になれる可能性は大きい。

これは自然現象でも同じであって、樹木を伐採してあとに植栽をしなければ当然のことながら禿山となって、ちょっとした雨で山崩れをおこす。工場廃水をたれ流せば死の海となって魚も住まない。フロンガスを野放しにするとオゾン層を破壊して人体に悪影響を及ぼす。人間が生み出す多量の煙やほこりの放出や熱帯雨林の破壊は地球の気候をも変えてしまう。要するにこれらは自然の摂理などではなく、人間の行った悪行の結果なのである。

このように自然や気候でさえも、私を含む全世界の人々の営みによって動いているのであり、それらは一に私たちの意思や行動にかかっているといってよいのである。

このように、この世に生まれてき、幸せとなり、よりよい社会をつくり、快適な自然環境を保つか否かは、すべて私達の意思と行動によるのである。これは業の思想であると思う。

縁起は永遠不変のダルマ理法であるとともに、初期仏教や阿毘達磨仏教では、縁起は現実の迷いの世界の成り立ちを説明するものである。

とするならば、業は縁起の一部分なのであるから、結局のところ業思想は、この迷いとしての現実の生活のありよう（行為）を説いたものである。しかしながら行為を善とか悪とかに分類するのは、所詮分別の所産であって、決してさとりとしての無分別智の世界のものではないことを忘れてはならない。

試みに何が善で、何が悪かということを考えてみよう。哲学辞典をひもといてみると、善は『一般にわれわれにとって価値あるもの、貴重なもの、有利なものをいう。悪の反対。たとえば、このような性質をもつ個々の行為、意志、人間、制度などはみな「善」にかぞえられる』とされている。当然のことながら悪はこの反対の記述がなされている。

社会体制や時代や国、あるいは宗教や信条によって大きく左右されることは容易に推測されるであろう。要するに善や悪は、このようなあやふやな基準しかもたない。現実的でごく相対的な概念であることは明らかである。仏教のさとりはこのような相対的分別をこえて、「あるがまま」を「あるがまま」に見るところにあり、したがって善悪の彼岸にあるものでなければならない。

ところが業の思想は、こうした善悪といった相対的規範を当為の目途にするのであるから、当然のことながら現実の迷いの世界における行為論・努力論としての一応の目標にしかすぎないのである。

ところが無分別智を得ていない私たち衆生は五取蘊と把握され、私たちの行う肉体的活動も精神的活動もすべてすでに煩悩に影響されていないものはない。したがって私たち凡夫の行う行為はたとえ善であるとはいえ煩悩に影響されていないものはない。そこで私たち凡夫の行う善を「有漏善」と呼ぶのである。これに対して煩悩に影響されていない善を「無漏善」と呼ぶが、これは無分別智を獲得した聖者にしかしえないものである。

要するに分別智をもととして判断する善悪は、多かれ少なかれ利害得失を前提にしたもの以外ではないのである。縁起説は仏教の核心的な思想である。実存主義哲学者のサルトルのアンガジューマン理論とか、科学者のアインシュタインの相対性理論は縁起説と同じ思想であると思う。

未来社会の仏教は、もっと生産的で、もっと進取的なものを志向しなければならない。また、未来社会が必要とする哲学があるとしたら、それは縁起説による調和の哲学であると私は思う。

仏教の縁起説の調和思想は世界のどの宗教、どの哲学にもない偉大な思想である。縁起説の世界平和を実現させるためには、仏教を世界にもっと広く知らせることが必要であろう。

私は仏教を勉強して、物質文明の中で生きて行くすべての現代人に仏教の偉大な教えを限りなく伝えたいと思う。

善光寺だより

十三回忌法要を営む

四月上旬、米国ロサンゼルス禅センター主管前角博雄老師はじめ、ニューヨーク禅コミュニティ主管グラスマン徹玄師、ニューヨーク禅マウンティンセンター主管ローリー大道師、オレゴン禅センター主管ベイズ澄禅師が来日。四月十一日善光寺において、ベイズ澄禅師を導師にロサンゼルス禅センター法類による楳庵白純大和尚十三回忌法要が営まれた。

春季茶会開かれる

五月十八日（土）午後一時より恒例の茶道教室（裏千家）主催の春季茶会が開かれた。本席掛物は総持寺禅師さまの「杜鵑（とけん）山に啼（な）いて風竹

裂る」、折から山内は緑濃く、各茶席は一期一会の一服を楽しむ大勢の参会者で賑わった。

皇居内特別参観と隅田川くだり

六月の声を聞くと時を同じうしてツユ入りとなり、三日間うっとうしい雨続きだったので、〝この分では…〟と誰しもが案じていた天気、五日当日はうって変って雲一つない快晴となる。これひとえにお不動さまのご霊験と、感謝感激、嬉々として出発する。

七時善光寺前を出発したバスは、八時、横浜駅西口天理ビル脇でここに集合した人々を乗せたバスと合流して七台となり、一路皇居に向かう。

九時半、二重橋前に集合待機していた参加者を加え総勢二五〇名、桔梗門より皇居に第一歩を踏み出し、窓明館に入って少憩ののち、爾前の説明に耳を傾ける。

今から四〇一年前の天正十八年、関東に移封された徳川家康がここに入城し、爾来幕府の終焉まで二七八年間、徳川幕閣の総府として事実上日本の政治の中心としての地位を保ち続けた江戸城。

明治元年、明治天皇が京都から東京に都を移し、ここを皇居と定められてより、明治、大正、昭和の三代にわたって、数々の重要な国家的行事はすべてここでおこなわれて来た宮城、皇居。

昭和二十年、戦火により一部炎上したが、戦後、混乱がおさまるにつれ、宮殿再建の声があ

がり、昭和三五年、再建事業は現実に第一歩を踏み出し、約十年の歳月を費して今日の威容がととのった。

一行は係官の誘導、案内で、新宮殿—宮内庁—道灌堀—江戸城天守台跡—呉竹寮—東御苑—と、約一時間半足を運びながら、好奇のまなざしをかがやかせた。

皇居を退出して築地の料亭で昼食をとり、浅草の観音さまに向った。

「浅草の観音さん」で通っている浅草寺は推古天皇の三六年(六二八年)、土地の漁師の投網にかかって隅田川から示現した観音さまを御本尊に祠っている東京最古の寺である。のちに慈覚大師が「お前立本尊」を刻んで中興し、大江戸の発展を背景にして栄え、天下の観音霊場となって今日に及んでおり、日に数万人の参拝者があるという。

ちなみに浅草寺は坂東十三番の札所になっている。「江戸自慢　十三番がこれくらい」という古川柳があるが、これは、浅草寺が坂東札所第一番でないことへのあてこすりであろう。

浅草の観音さまをお参りして、次は水上バスでのんびり隅田川くだり。一名「橋めぐり」ともいわれるこの舟くだり、橋の多いのに一驚する。そして、二十五万平方メートルという広大な浜離宮に上陸、ここは潮入池を主体とした回遊式臨海公園で、皇居同様、東京都内を忘れさせる風光明媚の庭園を散策して四時半、解散。

まことにすばらしい清遊の一日で、参加者一同、いのちの大洗濯ができたと大よろこび。

主催者、善光寺黒田方丈、並びに伊藤婦人会長、充実した日程になかなかあいさつの機会が得られず、結局、水上バスの中で、一階二階に分かれてのごあいさつとなったが、これまた時と処を得た恰好のものとなった。

ご寄付御礼

〈海外留学僧派遣育英会〉

森　祖道殿　四十万円
天乃屋石材店殿　四十万円
中央典礼殿　十五万円
一適　隆信殿　十万円
高山　元延殿　十万円
博林　津龍殿　十万円
浅井　恒道殿　十万円
坂戸　誠一殿　十万円
梅津　好司殿　十万円
岡田　哲道殿　五万円
服部　恵子殿　五万円
石川　征一殿　五万円
貞　昌　院殿　五万円
品田　泰永殿　五万円
小沢　正気殿　三万円
黒田　能勝殿　三万円
久保田賢一殿　三万円
西村　房蔵殿　二万円
今泉　源由殿　二万円
櫻井　和子殿　二万円
中村　淳子殿　二万円
佐藤みさを殿　二万円
藤井　昭雲殿　二万円
敦岡　白鳳殿　二万円
木下　純一殿　二万円
中畑　勝善殿　一万円
上村　勇雄殿　一万円
水　蓮　堂殿　一万円
安国論寺　殿　一万円
瀧澤　卓也殿　一万円
斉藤　正二殿　一万円
太田　好信殿　一万円
内海　忠男殿　一万円
高山　徳殿　一万円
吉村　新殿　一万円
奥家美智子殿　一万円
越前　竹子殿　一万円
井上　葉智殿　五千円
辻　稲男殿　五千円

〈成寿賛助〉

貞昌院殿　五万円
矢萩信顕殿　三万円
北川久憲殿　三万円
阿部慈園殿　三万円
永明寺殿　三万円
石川響殿　三万円
安部正殿　二万円
上田頼石殿　二万円
内山款偉殿　二万円
赫多正円殿　二万円
柴田秀晃殿　二万円
出井義章殿　二万円
伊藤昭典殿　二万円
島田喜久子殿　一万円
武井恵美子殿　一万円
松田童龍殿　一万円
佐瀬道淳殿　一万円
桐元武一殿　一万円

飯田利行殿　一万円
鐙喜三郎殿　一万円
鈴木有哉殿　一万円
鈴木紀元殿　一万円
水野弘元殿　一万円
原清殿　一万円
町田恒蔵殿　一万円
浅香清志殿　一万円
大場満洋殿　一万円
垣内善勝殿　一万円
広野義成殿　一万円
椎名宏雄殿　一万円
石田清殿　一万円
小川勝殿　一万円
鳥屋原百合子殿　一万円
蓮蔵栄治雄殿　一万円
安居太道殿　一万円
奥山大観殿　一万円
松岡睦雄殿　一万円
三村佛天殿　一万円

飯塚平八郎殿　五千円
太田好信殿　五千円
村上博中殿　二千円

「海外留学僧派遣育英会」ならびに「成寿」に、上記の方々よりご寄付をいただきました。心からお礼申し上げます。

読者からのお便り

先般はご尊父楳庵白純大和尚様十三回忌にお招きいただき、親しく霊前に焼香の栄を賜り、心より厚く御礼申上げます。

想像はいたしておりましたが当日は海外留学僧の辞令交付の式を併せ素晴らしい式典でございました。

白純老師の子弟数多い中で六男武志老師の孝順心は一極目立ち誰にも「まね」の出来ない盛儀でした。お父さまもさぞかし御満悦のことと推察いたしております。見事でした。敬服いたします。

大導師吉祥寺岩本老師の香語の素晴らしさ音量の豊かさ、涙の出てくるような感激でした。当日、佐藤俊明老師の搭けていた糞掃絡子にお目を止め、何とか一肩というお話になりました。帰宅してから家内に其の事を話し、十三回忌のご縁だからと快く引き受け把針三昧、本日出来上りましたので送らせていただきます。方丈様より吉祥寺様に差上げていただければ幸甚です。

長野市　**池沢　悦二**

『成寿』第十六号をお送り下さいまして誠にありがとうございます。台湾と親善友好を深めることは結構なことでございます。お互いに末永く提携して世の為努力いたしましょう。まずは御挨拶まで。

台湾仏教会館住職　**妙　然**

益々御活躍の段拝誦、年とともに育英会の輪が拡がって仏教界を圧する勢いになってゆくのに驚き敬服しております。御自愛御活躍祈り上げます。

東京都　**鏡島　元隆**

号を追うごとに充実した誌面に何よりも啓発をうけますことを有難く存じます。海外留学僧の派遣も第八回となるようで、多くの実績を挙げておられるようでお慶び申上げます。尚、賢志君の得度の報はこれまた嬉しいことです。兄弟が揃って仏法興隆のために尽力されること、何より力強いことです。

どうぞ益々お大事に御宣揚の程を念じあげます。

東京都　**昼間　光威**

「照燿念仏台湾を歩く」を拝見しまして、戦前両親が台湾で苦労した話を思い出し、仏法の興隆をとおして世界の平和に努力しておられる姿に感銘しました。又、地球環境問題の指針を『修証義』が与えているで、横浜総研の「環境と食」研究の原点を見ました。「宗祖を通して釈尊に還る」を想い出し、何もないと行動しない私の不甲斐無さを、はずかしく思います。

方丈様に手紙を差し上げる事で

清々しい気分になり、田舎の両親に報告させていただきます。ありがとうございました。

横浜市　吉川　文夫

これだけ立派な季刊誌をお出しになられるのは、編集者として御苦労の程が偲ばれ、尊いことだと存じます。余程の志がなければ続かない大きな企てですが、老師様の御志は、二一世紀と世界にまで拡がり、御法の転法輪一筋に注がれておられますことは、本当に素晴らしいことだと存じます。

赤間氏の「ひとすじの太陽」の如く、方丈様の下に赤誠が集約され、その大誓願が成就されますよう祈念して止みません。私も微力乍ら、出版活動を通して一隅を照し続けて参りたいと念願致しております。

東京都　永井　光延

巻を逐うごとにますます充実してくるのを頼母しく存じている次第です。特に今回の台湾特集は、私にとりまして二十数年前の宗学研究所員時代からの台湾仏教界の知人が数名おり、現在も大活躍しているため、懐しく拝読させていただきました。同封の「海外留学僧募集」の貼札、早速仏教研究館の掲示板に貼らせていただきました。仏教の国際化が叫ばれている現在、一人でも多くの希望者が出ることを祈っている次第であります。

川崎市　新井　勝龍

台湾大学の大鳥文庫のことでは大変お世話様になりました。貴重な時間をお割きくださり間隙をぬって見て来ていただき、有難く思います。やはり大鳥文庫は昔のままで大切に保存されていたのですね。日本人で大鳥文庫の図書目録なり蔵書の一部をご覧になられた方はそう滅多におられないのではなかろうかと思います。と申しますにそもそもその存在をあまり知らない方が多いからです。『成寿』最新号で拝読させていただきその確認が得られて、なんとも感激し頗る嬉しく思いました。

東京都　村田　一夫

日本はまもなく梅雨入りのころでしょうか。昨年の九月に横浜に移り住み、そのころから現在まで方丈様には様々なご助力を頂き、感謝にたえません。得度式にも来て頂き、又、パクナムでの修行に関してのご配慮、身に余る光栄です。

得度式からしばらくして感じたことですが、他の外国人に比べても私どもは破格の恵まれた条件を与えられているように思われます。又、得度式までの一週間についても、寺院側の丁重な対応に有難く思うと共に、方丈様及び留学生育英会とワット・パクナムとの強い結びつきを、あらためて感じさせられた次第です。こ

れも方丈様の願いとするところが持続して行なわれていることのあらわれと考えられます。何度も申し上げたように思いますが、私のような一般人がタイ国で、テーラ・ヴァダ比丘として出発することは夢のような話で、まず実現は無理だろうと考えておりました。それが実現したことは仏教の新たな復権を願う方丈様の誓願と檀家の方々、育英会の諸先生のお気持が、この無力な私に与えられたものとの考えが日々強くなる思いです。

このタイ国は確かに仏教国です。日々、驚き、考えさせられることが多くあります。しかし、当然のことながら結論めいた事を考える必要はまったくありません。数百人いる比丘の中にはまさしく様々な者がおります。戒律がそうであるように、自己の意思が絶えず問われていることは、どのような日々を送ろうと考えようによってはまったく自由なことになります。条件はそろえてある、すべてはお前が考えろ、そして行動しろ。この見えない戒律がテーラ・ヴァダのテーラ・ヴァダたるところでしょうか。まだ何もわかりません。しかし、私がすべきことは無限にあります。方丈様、育英会の誓願がこのワット・パクナムにも大きな波動となって伝わっております。皆様のご期待に応えられるよう日々、努力を重ねて行く所存です。

ワット・パクナム

落合隆（ピンターラタノー）

湾岸戦争は宗教戦争ともいわれました。キリスト教・ユダヤ教・イスラム教の戦争ということです。アメリカもイラクも〝愛と正義〟のために殺しあったのは、日本人にはよく理解できませんでした。戦争する両国の大統領はそれぞれ神に祈り、演説の終りに〝神のお加護を〟と唱えたのは奇妙に聞こえたものです。

今こそ不殺生を第一とする仏教が、これらの宗教の対立から協調へと進展させる使命をになうときがきました。おだやかに話しあいゆずりあっていく道を仏教が説くときがきました。

おしゃかさまは二千五百年も前に今日あることを知っていたのでしょうか。ありがたいことです。

宇宙の全生命を尊といとする、即ち宇宙のすべての生命を肯定するおしゃかさまの教えこそ、平和へ至る道なのです。自分と違う宗教の信者の生命も同じように尊とい、まことにありがたいことです。

黒田方丈様は、おしゃかさまの教えをすでに七年前から実践して参りました。善光寺派遣海外留学僧がそれです。

これには二つの重要な意義があります。ひとつは、仏教内部の実践です。宗派をこえ、大乗と小乗をこえる実践です。

宗派こえた留学僧制度。

方丈様自身二十数年前、タイ仏教で得度され、数年前四人のご子息が得度され、いままた留学僧が得度されました。大乗と小乗が親善交流することから仏教内部の協調が生まれます。

ふたつには、国際的な宗教問題―キリスト・ユダヤ・イスラムの三教の対立を協調へ止揚する実践の第一歩を歩きはじめているのです。世界を考えると現在の留学僧の三十五名は少数といえるでしょう。しかしなにごとも一からはじまることを思えば大変に立派な数ではありませんか。

世界的に知られた科学者たちは、核による破壊と環境破壊が地球を滅ぼすと警告しています。この二つを同時にやるのが戦争です。現代の戦争は地球即人類を滅亡させます。

宇宙のすべての生命を尊といとする仏教が世界へおくる実践的メッセージが、海外留学僧なのです。平和への道づくりは平和への人づくりです。方丈様はこの世界的な大事業に誰でも参加できる方法を創作しました。これが留学僧制度の中でもっとも卓越した点かもしれません。毎食ひと口。一回十円。一日三十円。

これからはビールのおいしい季節です。屋上のビアホールでジョッキをかたむけるのは実にイイですね。飲む前に十円を別のポケットに入れておけばいいのです。これを忘れなければ宇宙の中の尊とい生命を損なうような飲み過ぎを防ぐことにもなるでしょう。義務とかなんとかいうクライものではなく、ビールも適量おいしく飲んでこのおいしさを明るく肯定し、十円を別のポケットに入れて貯めておくことで、世界平和の大事業に参加することができる。なんというすばらしいことでしょう。

一杯のビールも禁じ否定し歯を食いしばるといったことでなく（これでは長続きしません）、一杯のビールを大いに楽しみ明日への活力にしながら、ポケットに入れた十円で大事業に参加できるところに、この制度の明るさすばらしさがあるのです。一杯やって気が大きくなったら百円でも千円でも別ポケットに入れても結構。

海外留学僧制度のこの明るさ、生活の中ですぐ実行できる喜びを忘れないようにしましょう。

横浜市　赤間　義徳

台湾親善訪問など皆様益々ご清栄の段、大慶に存じます。毎度ご芳情を賜りながらごぶさたばかりしまして、申し訳もございません。タイからの雰泰尼も何とか無事冬をこすことができましてほっとしております。日本語も大分上手になりました。漢字も三〇〇字以上はわかるようになりました。将来何かのお役に立つようになればと思っております。先日スリランカの僧を岡山の曹源寺の方

へ依頼したところです。上座部の方も大乗に興味があり、勉強したい人があります。達磨大師の生国地方のあるインドでも南部の方で大乗仏教を再興したいと言う希望を聞きました。そのために女子二名大乗仏教の尼僧にして十年位あづかってくれとたのまれましたが、まだ先方が子供なので無理と思いますし、私の方もまだせますぎますのでまだまだです。老庵主が何とかもう少し元気になってくださったらと考えております。皆様のご活躍とご健勝をお祈り申し上げます。

岐阜県　山本　浄月

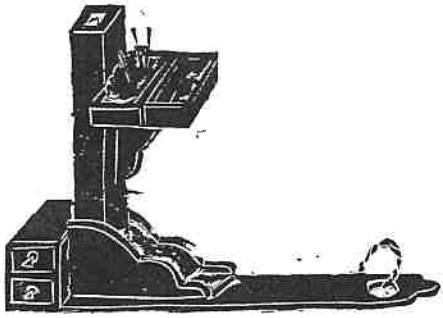
貴山益々緑深く美しく御堂に映ゆる候　洵に御栄祥大慶に存じ奉ります。先日は御先考様十三回忌とて美しい席へ御招き下さいまして、まことに有難うございました。

一つ一つ眼の辺りに当日におきた暖かい御心づくしを思い出し心から嬉く存じ居ります。

総持禅師の「杜鶴啼山風竹裂」の偈を黄磁紅彩御水指に照り映えさせた御とりあわせ、報恩の茶杓は当日の為に外にては使用せず特に御つかいありました御心、そして織部のなつかしい御菓子と影絵の風情の御茶室障子、正式真の御花生と床掛はまことにつゝしみ深い風情も感ぜられ、御美事でありました。続いて緋もうせんにて、心を和ませていたゞき青梅、上手の瓢赤絵の振出しに夫婦供浄土に坐す気分にて締りもなく只々よろこび感謝し恐縮しているばかり。手造りの志野小服は絵うつくしく恐らく名ある人の作と考え、大辞典外索出仕りましたところ、近江の三井高就牧山（号）稜々と号すの在制ではないかと思いましたが、そちらに御知りの方あると聞き及び居りますので、真のところ又の期にでも御うかがいさせて下さいませ。

黒田大圓老師様には御尊体御回復の御様子にて御気分よく御ありでしたが本当に一番の慶事であります。何卒御大切に遊されますように御願い申します。

東京都　井高　帰山



第八回海外留学僧募集について

目　的　大学卒業相当以上の学力を有し、仏教を修学する者のうち、学業操行ともに優秀にして心身堅固なものを海外に派遣し、仏教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る優秀な人材を育成することを目的とする。

派遣先　世界各地

派遣期間　一年間とするも場合により延長するも可

給　費　派遣先までの往復旅費及び滞在に要する必要経費を支給する

募集人員　2～3名

提出書類
(1) 論文
(2) 保証人と連署した願書
(3) 卒業証明書
(4) 履歴書
(5) 推薦書
(6) 健康診断書

提出レポート
●禅の国際化と私の役割
●二一世紀の仏教と私の役割
●タイの仏教に学びたいこと
●未来社会の仏教と私の役割
いずれか一題を選ぶこと、枚数はいずれも四〇〇字詰原稿用紙五～一〇枚

原稿〆切　平成三年十二月十日

善光寺海外留学僧派遣育英会事務局

This is the thirteenth anniversary of the late Rev. Syoten Iwamoto who initiated this temple. On Feburuary 7, we had an honor of having Rev. Iwamoto of the Kichijoji Temple, Tokyo, solemly administering a memorial service, remembering how much we owed to the late priest. On the same occasion, we held the seventh annual award ceremony for the newly-chosen priests who would study abroad in 1991. Since one of the chosen is my young colleague, I attended his ordination held in Bangkok on March 31.

Then on May 28, we had a pleasure of conducting the ceremony of enshring a newly-made substitute Fudomyo. Earlier we had commissioned the statues of Bhaisajya-guru and Amitabha/Amityus, which were to wait on Mahavairocana-tathagata, the main image enshrined in our Fudoden Hall.Through these ceremonies we pray that each member of the congregation may enjoy peace and tranquility now in this life and an appropriate reward in the next life. May we also pray for growth of all temples and shrines.

Among the three well known temples in South Korea, the Tsudo Temple is outstanding as a repository of the Buddhas ashes brought from China during the Tang dynasty. As part of its project to display to the Korean Public various priest robes from all over

the world, the temple has requested a donation of a priest robe of the sodo—sect in Japan. A priest robe has had important functions in the past. Priests considered it extremely important to wear their robes whenever they practiced their desciplines in their hope of attaining nirvana. It is said that a lady in the evening who danced with a priest robe for fun later turned into a devotee. Some cites were also patterned after priest robes. Thus, one of the epithets of the Buddha is to wear a priest robe and endeavor to pratice the buddhist ways. The robe is also said to bring blessings to the public. Along with Rev. Sato and Mr. Azuma, I visited the Korean temple and presented a robe with a hope that the robe will help to propagate the Buddhas teachings and contribute to friendships with the Korean Buddhist colleagues.

編集後記

▼平成三年、秋季号をお送りいたします。今年は御開山の十三回忌にあたりますので、記念事業として、不動殿本尊大日如来の脇侍仏として、阿弥陀如来、薬師瑠璃光如来両尊像をお迎えいたしました。

▼本誌グラビアと本文「二仏像成り御堂に坐す」で、その盛儀の模様をご報告いたしました。お檀家の皆様、関係各位にはあつくお礼申し上げます。特に仏師・錦戸新観先生には心から感謝申し上げますと共に、次号に、錦戸先生との対談を掲載の予定です。

▼七月二十三・二十四日、本坊光真寺夏大祭には多くの方々の御参加をいただきました。ありがとうございました。

▼七月三十日、韓国の通度寺に理事長(住職)、佐藤俊明常務理事、東隆眞理事が赴き、九条衣お袈裟二肩、絡子二肩、『正法眼蔵』九十五巻を贈呈して参りました。次号にてご報告いたします。

▼八月二十四日、神奈川県警察本部から住職が交通安全対策の講演を依頼されました。交通戦争とまで言われる昨今、事故の当事者も被害者もその悲惨さにおいて、言葉では言いつくせません。皆様も交通規則を守り、事故のない日々をお過ごしくださいますよう念じてやみません。

▼九月上旬、ミャンマー(ビルマ)を訪問の予定。ゆったりと静かに時を刻む町ヤンゴン(旧ラングーン)を訪ね、王朝の栄華、仏教文化の現在の様子をつぶさに見て、誌上でお伝えしたいと思っています。

▼第六回育英会総会を十月に開催する予定です。尚、育英会の論文集が出版されます。

▼間もなく秋彼岸です。暗いニュースの多い今日この頃、お先祖様を尊び、明かるい毎日を過ごしたいものです。

成寿　第十七号
平成三年九月一日発行
発行所　成寿山善光寺
横浜市港南区日野町一六〇四
電話　〇四五(八四五)一三七一
印刷所　神奈川新聞社出版局

横浜善光寺